

---

# とある最強の抑止力

Pearl

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある最強の抑止力

### 【Nコード】

N4098X

### 【作者名】

Pearl

### 【あらすじ】

『とある魔術の禁書目録』。その世界に迷い込んだとある転生者。彼/彼女の存在はその世界で何をもたらすのか。科学と魔術が交錯する世界で『無』能力者である少女が新たな物語を紡ぎだす。

## 序章 とある転生者と学園都市へトリップワールド (前書き)

初投稿です。拙い文章だとは思いますが、ご容赦のほどを。  
感想、ご指摘があれば遠慮なくどうぞ。

出来る限り参考にさせていただきたいと思えます。

## 序章 とある転生者と学園都市へトリップワールド

いきなりだが、氷室皇月は『転生者』である。

言うまでもないことだろうが、環境や生活を一変させる意味での『転生』ではなく、生まれ変わりという意味での『転生』だ。

いや、環境や生活も一変したのでどちらにも該当するというのが正しいだろう。

元は有り触れた日本人の成人男性。それが、何の因果か死後、気が付いたら少女の赤子となっていた。それも記憶と知識を引き継いだ状態で、だ。

要するに漫画や小説などありがちな所謂『TS転生』と呼ばれるもの。

もつとも前世の記憶は生まれ変わった瞬間に全て思い出せたわけではない。成長するにつれ徐々に、おそらくは脳の成長に合わせる形で思い出していき、自覚していった。

ともあれ、当初は混乱の極みにあったものの、15年も経てば自ずと落ち着きを取り戻す。

生まれ変わったことについては単に『ラッキー』と思えばいいだろう。

しがたないサラリーマンだったため、財産なんて呼べるほどの蓄えはなかったし、両親はすでに先だった後だ。兄弟や妻、恋人、子供もいなかったし、親しい友人は居たものの、こればかりはどうしようもないとあきらめるしかない。心残りと言えば、読みかけだった小説の終わりと、借りっぱなしのAVを誰が返却したのか、とそのあたりだろうか。

一方、女となってしまったことについては、意外と如何にかなるものだ、というのが実際のところだ。

少なくともよくありがちな“初めて”やらなんやらで無様な混乱

はなかったと思えるし、自己の性を否定して突発的に死にたくなったりなどはしていない。普通にスカートだって履けるし、下着類も女性用のものをちゃんと使用している。ただフリルやレースがふんだんにあしらわれた服だけは、どうにも受け入れられない。その程度だ。

つまり、さほどの混乱もなく、氷室皐月は現状を受け入れている、というわけだ。

さて、そんな『転生者』である氷室は、当然のことながらその頭脳は大人である。

日本人であるため義務教育はもとより、慣例に従い高校、大学と進学した身の上である以上、相応の学力は備わっている。また体力面でもそれなりに鍛えてあるため、学生生活は優位に立てる

(はず、だっただけどねえ……)

「はい。それじゃ先生プリント作ってきたのでまず配るですー。それを見ながら今日は補習の授業を進めますよー？」

そう、補習である。

チートとまでは言わないが、かなりのアドバンテージを持って生まれてもなお“ここ”ではそんなもの何の意味もなさない。

確かに“ここ”は『外』とは隔絶した高度な科学力を持ち、それに比例して要求される学力も高い。しかしそれに見合った教育は施され、スタート地点ですでに優位に立っている氷室にしてみれば、少し頑張れば成績優秀者として補習などとは無縁の生活を送れているはずなのだ。

事実、氷室の学力は極めて高い。

ペーパーテストではさすがに満点とは言わないものの、平均点を大きく引き離す得点をマークしており、体育の成績もそれなりにい

い方だ。それならば当然補習に引つかかることなどありはしない。  
しかし現実には非情な補習宣告。

ちなみに本日は7月20日。世の学生たちにとっては『夏休み初日』という記念すべき日である。

(うう、今日は『夏休み突入記念サマーバーゲンセール』の初日だっていうのにい)

初日だからなんだ、というかもしれないがバーゲンというのは戦場だ。しかも今日という日に限っては世の学生たちが学業という檻から解き放たれたのだ。財布の紐が緩むのは必然。そこにとってつけたかのような　というか、まさしくとってつけた大安売りであれば即時完売する商品も一つや二つではあるまい。店側も大量在庫で大儲けを期待しているだろうが、店舗スペースを考慮に入れば、その数は自ずと限られてくる。

しかし補習の終了予定時刻は正午0時。

この遅れは致命的だ。特に『服集め』が趣味の氷室にとってクリティカルダメージだ。HPの実に八割が一瞬にして削られる。

ならば初めから補習なんて受けなくて済むようにすればよかったのではないか、というかもしれないが　努力はしたのだ、これでも

先にも述べたとおり、ペーパーテストの成績は決して悪くはなく、授業態度にも特に目立った問題はない。

これが“普通の”学校ならば文句なく補習免除だ。

その上、今回は近年稀に見る本気で挑み、ほぼ満点に近い成績を叩き出した会心の出来だった。

しかし、それでもなお補習が免れないのには、そこに氷室自身の努力ではどうにもならない問題が横たわっているから。

こればかりはどう足掻いたって無理だ。不可能だ。どうしようも

ない。

(はあ……)

氷室がそんな絶望に満ちた深いため息を心の中で吐いている間にプリントを配り終えた、どうみても「身長135センチ十二歳、真っ赤なランドセルとリコーダーが標準装備です」な小学生にしか見えないロリイなクラス担任月詠小萌(アラサ)は、全身を精一杯大きく見せながら声を上げた。

「おしゃべりは止めないですけど先生の話は聞いてもらわないと困るですー。先生、気合を入れて小テストを作ってきたので点が悪かったら罰ゲームですけすけ見る見るですー」

「つてかそれ目隠しでポーカーしろってアレでしょう先生！ ありや透視能力専攻の時間割りだし！ 手元のカードも見えないのに10回連続で勝てるまで帰っちゃダメとか言われたらそのまま朝までナマ居残りだとわたくし上条当麻は思うのでせうが！」

あまりに非情な仕打ちにツンツン頭の青年 上条当麻が一縷の望みを託すかのように叫びを上げた。

無理もない、と氷室も思う。彼の発言にもあるとおり、目隠しポーカー10連勝なんて“普通の”人間では無理だ。

確かに “運良く” “偶然” “奇跡的” に10連勝できる可能性はある。だがそれは本当に“運が良く”て、“偶然”で、“奇跡的”な確率でしかない。

そんな方に一つみたいな奇跡の産物を、赤点の罰ゲームにするなど“普通の”学校ではまずありえない とうか、ありえてはならない。それは単なる『虐待』でしかない。

しかし“ここ”では別だ。“ここ”ではそれが『当然』なのである。

そんな“運が良く”て、“偶然”で、“奇跡的”な確率を100%に変えてしまう力 『超能力』なんて代物が実在する、この『

学園都市』では。

一昔前ならばフィクションの産物と一笑されていた『超能力<sup>シロモノ</sup>』は、科学的に解明され、現在では人為的にその力を持つ者 『能力者』を生み出すことすら可能となっている。

それを実現し、今なお更なる高みを目指すために存在するのが、ここ『学園都市』だ。

日本の首都東京の西側三分の一を占めて設立された『学園都市』は、その名にあるとおり多くの学校と研究所で埋め尽くされ、またそれらを客とする商業施設やレジャー施設や各種公共施設、果ては専用の空港まで完備されており、都市として必要なものは全て揃っていると言っても過言ではない巨大都市である。

むしろ『街』というより一つの『国』と称した方が早く、総人口は実に230万人とも言われ、その8割が学生である。

そしてその数は同時に『能力者』の数でもある。

学園都市はあくまでも『超能力研究』の場だ。そのために設立された街ではあるが、超能力者が路端の石ころのようにそこら中に転がっているわけではない。

そのためその研究・実験を行うには自らが編み出した『能力者開発技術』を用いて、被検体となる『能力者』を独自に調達する必要があった。

そこで目を付けたのが『学生』である。

能力の使用には得てして高度な演算能力が要求され、その演算力次第で威力が上昇する傾向がある。そのため能力者に対し高度な知的教育を行うのは必須事項であり、そのための学び舎を設立するのは当然の行為であった。

ならば、逆にそうした学校に通う『生徒』を能力者とし、実験の協力者とすればどちらにとっても益になる関係を築くことができるのではないか、と考えたのだ。



学園都市に通う生徒は、入学と同時に超能力研究の被検体としての契約を結ばされ、脳の『開発』薬物投与や直な電気刺激などが行われ『能力者』となり、その力を研究のための資料として提供するのが決まりとなっている。

無論、当初は相当の反発があつたそうだが、現在そうした声は下火だ。

その原因は学園都市が能力開発の副産物として手にした高度な科学力にある。

その力は『外』と比べ実に数十年分の差があるとされ、それに釣られるように学校側の教育もより高度なものへと転じていく。それこそ『中』では場末の学校を卒業したとしても、『外』では一流大学を卒業したぐらいの学力が身につくのだ。

さらに都市内での生活は最低限保証されており、実験協力の見返りとして『奨学金』の名目で生徒にはお金が振り込まれる事にもなっている。

水道光熱費は格安で、娯楽品には若干の税が加算されるものの、最先端科学に裏付けされた、それこそ『外』から見れば魔法のような製品が次々と登場し、売り出され、それでいて常人には扱えない『超能力』まで手にすることができる。

それこそ『脳を弄られる』ことすら霞んでしまうような、そんな夢のような生活を前に、人々の心は『学園都市』の存在を許容した。

しかし、現実というのはそんなに甘いものじゃない。

「はいー。けれど上条ちゃんは記録術かいはつの単位足りないのどの道すけすけ見る見るですよ？」

可愛らしく小首を傾げながら満面の営業スマイルを浮かべる子供こもえ先生の非情なる一言に、上条少年は絶望に打ちひしがれ絶句する。

そんな級友の姿を見て、彼の隣に座る青髪ピアスの学級委員（男）

が「…むう」と呟くと、

「あれやね。小萌ちゃんかミヤんが可愛くて仕方がないんやね」

「……おまいはあの楽しそうに黒板に背伸びしている先生の背中に悪意は感じられんのか？」

「…なに？ ええやん可愛い先生にテストの赤点なじられんのも。

あんなお子様に言葉で責められるなんてカミヤん経験値高いでー？」

「…ロリコンの上にMかテメエ！ まったく救いようがねーな！！」

「あつはーッ！ ロリ『が』好きとちゃうでーっ！ ロリ『も』好きなんやでーっ！！」

「雑食！？」

ぎゃあぎゃああと騒ぐバカ二人の姿に氷室はもう一度ため息を吐く。何を下らない話をしているのか。この二人はいつもこんな調子のやり取りを続けている。

だがそれは『外』となんら変わらない、『学生』の姿でもある。

どんなに高度な科学力を持ち、一流大学を優に超える教育を受けていても、そこに暮らす人々はただの『人間』だ。人間である以上、クラスメイトとのバカ話もすれば、補習は嫌だと思っし、強制居残りも御免被る。

何も変わらない。能力者であれ、そうでなかれ、人の本質は何も変わらない。

だというのに

「安心しなさい、上条当麻」

「ん？ ……氷室？」

「私も同じだから」

そう、追加の補習を受けるのは彼一人じゃない。

おそらく 否、間違いなく氷室も帰れますけすけ見る見る10 確定者だ。

これはもう瀕死のダメージに上乗せしてバットステータスのオンパレード間違いなし。氷室の気分は急転直下の大暴落、ストップ安

記録を絶賛更新中である。

が、その意図が正しく伝わらなかったのか「へ？」と間抜けな顔を晒す上条の脇で、何やら目を丸くしていた青髪ピアスが突如雄叫びを上げた。

「な、なんやてえー！ ひむろんもロリエ m ふぐあっ！！  
!？」

瞬間、青髪ピアスの顔面に飛び蹴りを喰らわせた氷室は間違っていないと思う。

「え、氷室って幼女趣味なのか？」

「違う！ そっちじゃなくて補習の方！ あと『ひむろん』言っなあ！！」

「ぐほお!？」

床に倒れた青髪ピアスの腹を踏みつけた氷室の横で、上条はようやく納得の意を浮かべる。

「あ、ああ……そういえば氷室も能力テストの点悪かったって言ってたな……」

悪かったというか『0点』である。問答無用に赤点である。

学園都市の存在意義が『超能力研究』にあり各学校は能力開発実験の場として存在する以上、そこに通う『生徒』は学生としての『学力』よりも被検体としての『能力』の評価の方が優先される。

それを調べるのが定期テストと同時期に行われる能力テスト  
『身体検査』だ。  
システムスキャン

主な能力系統である『予知能力』 『透視能力』 『読心能力』 『精神感応』 『念動力』の六項目に対し行われ、その何れかである程度の数値を叩き出せれば合格となる。  
プレコグニッション  
クレアホヤンス  
サイコメトリー  
サイコキネシス  
レハシー

無論、数値が大きいほど能力が強力である証であり、評価もそれに応じて高くなる。

逆に規定値以下だった場合は、問答無用で『無能』の判定が下る。そして学園都市のおよそ6割の生徒はこの“規定値に満たない”『無能』力者だ。実感できるほどの、目に見える形で姿を現すほどの力を持たないのであれば、それは最初から『無』いのも同じこと。だがそれならそれで規定値を越えられるよう努力すれば『無能』を脱する事ができる。つまり努力はちゃんと実を結ぶ可能性を残しているのだ。

しかし氷室の場合は、その考えすら当てはまらない真正正銘の『無』能力者だ。

『身体検査』の結果は常にいずれの項目においても0点を記録する。

待てど暮らせど、欠陥が千切れるほどに踏ん張ってみても1ミリどころか1マイクロミリすら計測器の針は一切触れないため、結果は常に『測定不能』を記す。

そのため『無能』出来損ないではなく『無』存在しない能という意味での『無能力者』として『書庫』バンクには登録されている。

確率的には非常に希少なケースで、小萌先生曰く「だからこそ調べる価値がある」と絶賛する存在なのだが、それを受け取る本人してみれば強制補習の最低評価としか捉えることなど出来ようはずもない代物だ。

言わばそれは『才能』の差というもの。

どんなに努力しようと普通の人間が水中で生活をしたり、空を単独で飛ぶことができないように、その壁は決して努力のみでは乗り越えられない。

だから『無』能力な氷室の努力は、『超能力者』の街では決して評価に繋がることのない『無』駄な努力に過ぎないのだ。

「なんつーか、お互い不幸だよな……」

そう呟く上条もまた、氷室と同じ『無』能力者だ。同病相哀れむというか、共通事項を持つ者特有のシンパシーを感じている。

そしてそんな『無』バカな子能力者が大好きで思わず補習かまひを充実させたくなってしまう小萌先生が担任となってしまうこと、これが二人にとって何よりの不幸である。

「あ、あの氷室ちゃん。お気持ちはわかりますけど、それぐらいにしてくれないと先生授業が進められませんですー」

「すみません、つい……」

眉を顰め困った顔を浮かべる小萌先生に頭を下げ、氷室が自らの席へと戻ろうとし

「むう……、黒の紐パンか。ひむろんは胸だけやなくて下着までエロエロやなあー」

足元から聞こえたそんな声に、氷室は身を強張らせた。

言うまでもないが、女子の学生服というのはどこの学校でもスカートがデフォルトである。

当然、（現世では）女子である氷室もそんな女子制服に身を包んでいる。

そんな格好で青髪ピアスへの飛び膝蹴り後、腹への踏みつけついきき。そして“その場から動かずに”小萌先生への謝罪を行ったのならば

結論 未だ青髪は氷室の足元に“仰向け”で倒れたまま。

「……って、待て待て氷室！ その大リーグボールみたいに振りかぶった青髪をどうするつもりだっ!？」

「今日は空が青いわねえー」

「投げる気満々っ!？ それも外に! つーか、ここ4階だぞっ!」

「大丈夫。ギャグキャラは死なないのがお約束よ」

「それは漫画の世界の話であって現実にはありえないからっ！ オカルトだからそれっ！」

「科学とはオカルトを実証するために存在するもの。彼にはその礎になってもらいましょう」

「つて、端から殺す気かよ！」

「大丈夫。彼が死んでも変わりはいるもの」

「青髪っ！？」

某世紀末黙示録に登場する使徒な少女の名言に思わず反応を返す上条。

確かに髪の色と語感には似ているが、ざんねん当然ながら青髪クローンでもなければ使徒でも女ですらない。

「……なあカミヤん」

「青髪、気が付いたのかっ！」

氷室に胸倉を掴まれ宙づりにされている青髪ピアスに上条は必至で声をかける。

「お前から何か言っちゃれ！ でないと殺されるぞ！ てか、その前に謝りやがれコノヤロー！」

元はと言えばこのバカがスカートの中身を覗いたりしたのが原因だ。たとえそれが不慮の事故であったとしても いや、なくても口に出すべきじゃなかった。

触らぬ神に祟りなし。逆に言えば触ったのなら祟られる。口は災いの元というが、今の状況がまさしくソレである。

「早く言え！ さっさと謝れ！ 言っとくが氷室はマジ本気だぞ！？」

自業自得とはいえ見捨てるわけにもいかない上条の必死の訴えに  
対し、当の青髪は

「こない美人に殺されるかと思うとゾクゾクせえへん？」

「そうだコイツMだった　っ!?!」  
「それも真正のDM。」

「じゃ、本人の了承も得られたところで… You can fl

「だあー、だからやめろって」

力を籠め投げ放とうとする氷室を引き留めるべく、上条がその  
“右手”で青髪の体を掴み

「あつ」

「へっ?」

ピシリッ、と何かがシュートしたかのような感覚とともに“体重が増した”青髪を支えきれなくなった氷室が上条すらも巻き込んで後方に倒れた。

「痛っっ!?!」

「はわわ、大丈夫ですか氷室ちゃん、上条ちゃ…ん?」

あわてて駆け寄った小萌先生が二人に声をかける。一人足りないような気もするが、おそらく気のせいだろう。誰も気にしてない。

しかしその言葉も、駆け寄ったことで状況を把握したがゆえに途切らざるを得なかった。

「……………」

教室に言い知れぬ沈黙が落ちる。

そんな微妙な雰囲気、倒れた際の痛みを堪えた氷室は周囲を見渡し首をかしげる。

皆が皆、自分の方を向いて目を丸くする様は異様だ。特に女子生徒は顔を赤くし手で覆う者や同情の視線を投げかける者もいる。

(なにが……)

起きているのか。それを探り当てるより前に、

上条、青髪に続く三バカトリオの一角、土御門元春が爆弾を投げ込んだ。戦略級の核弾頭を。

「いや、カミヤんは幸せ者だにやー。パンツ見せてもらえるだけじゃなくて“押し付け”までサービスしてもらえるなんて」

その一言に今度こそハッキリ氷室の心が凍りついた。

後ろに倒れこんだ結果、氷室は床へと座り込んだ形だ。

しかし何故だかそのお尻は床に触れてはいない。何かやわらかいクッションのようなものがそれを拒んでいる。

下を見る。

少し広がったスカートの端から覗くのは、ツンツンに尖った髪の毛。

つまりは人。それも頭部。

理解した。

自分はツンツン頭の少年　上条当麻の顔の上に座り込んでいるという現実を。

「……………ふふ」

自然と笑みがこぼれた。

すくつ、と立ち上がりその場から一步引く。

「……………」

下敷きになっていた上条当麻が姿を現したが、彼は何も言わない。否、言えない。

顔が赤く、鼻から赤い液体が垂れているが、そんなことを気にしている余裕はない。



上条当麻は『不幸』に愛された少年である。

今朝も昨夜の落雷により電化製品が全滅し、冷蔵庫の中身も全てダメになり、非常食のカップやきそばを食べようとしたり流し台に麵を全部ぶちまけ、仕方がないから外食しようとサイフを探している内にキャッシュカードを踏み碎き、ふて寝の二度寝の泣き寝入りを電話で叩き起こされたと思ったら『上条ちゃん、バカだから補習ですー』との担任からの連絡網ラプコイル。そして布団を干そうとベランダに出てみれば真っ白な修道服を着たシスターがすでに干されており、行き倒れというので賞味期限切れのパンを悪戯心で差し出したら腕ごと食われ、『魔術』がどうのというシスターと言い争いをした拳句、彼女が来ていた修道服『歩く教会』を右手でつかんだ瞬間、ものの見事にはじけ飛び、その中身を御開帳させ、直後怒りに狂った素っ裸の少女に全身を噛み付かれるという希少な体験レアをしてきたばかりだ。

そのシスター曰く、上条の『右手』が空気に触れているだけで彼が本来受ける筈の『神のご加護』だとか、『運命の赤い糸』だとかをバンバン打ち消してしまっているかららしい。

その話が嘘か真かはさておくとして

事実、上条当麻は『不幸』に愛された存在なのである。

そしてそんな上条にとって『幸運』ラッキーとは、その後の更なる『不幸』アンラッキーへのフラグであり、

それは今回もおそらく、いや絶対にご多分に漏れることなく

「上条君？」

「え、えーつと氷室さん？」

「……言い遣すことは？」

「いきなり死刑宣告!？」

「何か問題でも？」

ニッコリと笑みを浮かべる氷室。笑顔とは本来攻撃的なものである。

「ないなら」

故に、

「死にさらせエエエ！」

「不幸だあああ　　！！！」

少女の上履きが上条の顔を踏み砕くまであと0・5秒。

## 第01章 とある無能力と原作開始へファーストコンタクト

案の定、すけすけ見る見る帰れま10の刑に処された氷室は、夏休みの補習だとい  
うのに完全下校時刻までしつかり拘束された。

その後急いで『夏休み突入記念サマーバーゲンセール』という名  
の戦場に飛び込んだものの、目当ての品は粗方挿詞され売り切れた後。それ  
でも一縷の望みを託し、戦場方々を駆けずり回ったものの、手に入った  
のはほんの僅か。

「……、不幸だ」

昼間公開処刑に処した少年の口癖をつい口遊む氷室のテンション  
はもはや地の底を割って淀んでいた。

その上、この学園都市の交通機関は学生たちの健全なる育成のた  
めに最終便が下校時刻に合わせて運行されており、夕方を僅かに過  
ぎた程度のこの時間にも関わらず一切走っていないのである。

必然的に帰宅は徒歩となり、夜の帳が落ちた学園都市の道を一人  
寂しく寮へと向かって歩くしかないのだ。

夜は嫌いだ。

夜の闇は嫌なことばかりを思い出させる。

一人で居るのも嫌いだ。

孤独は不安を増長し、自分はこの世界に一人取り残されたかのよ  
うな錯覚を覚えてしまう。

静かなのは嫌いではないが、好ましくはない。

お祭り騒ぎが大好きというわけではないため進んで騒ぎに混じる  
うとは思わないが、それでも静かすぎるより気が楽だ。

生まれ変わったことで文字通り世界は一変した。しかし嫌いなも

のばかりが増えた気がする。

確かに前世の人生は碌なものではなかった。両親には早々に先立たれ、顔はブサイクで、普通に食事をしているだけなのにすぐに太る体質だった。

学校ではイジメられ、社会に出ても同じくイジメられた。

死因もそんなイジメの延長上で、通りすがりの女子OLにさりげなく引っかけられたことで運悪く階段下へと落下。そのまま帰らぬ人となった。

まさか彼女も死ぬとは思わなかったに違いないが、かといって彼女が罪に問われるかと言えば微妙なところだ。

故意か否かなど本人とその周囲の人間の認識によるものだし、その全てから疎まわれていた自覚がある以上、彼女の方に味方する人間は多そうだった。ただでさえその子は美人で人気が高かったし。

それに転んだ先が階段だったのは本当に偶然であり、そうじゃなければ死ぬようなことにはなりえなかった。

だから万が一捕まったとしても証拠不十分で釈放され、良くても執行猶予判決がせいぜいだろう。

死んでなお、誰一人見返すことができないなど、おかし過ぎて涙が出そうだった。

そんな状況だったから、必然的にオタな引き籠りとなり、仕事以外で外出することなどまずありえなかった。

ネットとアニメと漫画が趣味で、ライトノベルを読みふける日々だ。

昼よりも夜の方が好ましく、他人とコミュニケーションを取るなんて以ての外だった。

それが今ではどうだ。

ブサイクだった顔は誰もが羨むほどの整ったものとなり、引き締まったスタイルと大きな胸元は通りすがりの男子を振り返らせることも多く、一人街中に立っていれば自意識過剰な野郎に声をかけら

れ、告白を受けたことだつて一度や二度ではない。

そして前世では夜行性だったのに今では夜が嫌いになり、引き籠りだったのに今では一人が嫌いになり、静かな生活は大歓迎だったのに今では逆に落ち着かない。

(まるで別人ね……)

こんな女言葉が自然と出てくる時点でもうそれは証明されている。未練があるわけではないが、かといって現状とどちらが良かったかと問われれば答えに窮す。

嫌ではない。美少女となり、友達も増え、イジメられることもないこの人生が嫌なはずがない。

でもそれだけでこの世界 前世で読んでいた『とある魔術の禁書目録』の世界に生まれ変わったことが“よかった”とはけして思えない。

『無能力者』だし、補習の常連だし、ナンパはウザいし、帰り道は一人寂しくだし、嫌いなものがたくさん増えた。

そして何より、氷室皐月は『自分』が一番嫌いだった。

自分は誰かに評価されるような人間ではない。誰かに評価されていいような人間ではない。評価されるようなこと自体、あつてはならないことだ。

何故なら

「……サイレン？」

ふと氷室の耳に甲高いサイレンの音が飛び込んでくる。

近くで火事でもあったのだろうか、と首をかしげる氷室の鼻が“嫌な臭い”を嗅ぎつけた。

それは焼け焦げた煤の臭いではなく、鉄錆にも似た鼻を突くようなそんな臭い。

「……血？」

“嗅ぎなれた”その臭いに顔を顰め、走り出す。

血の臭いがするということは誰かが傷を負っているということだ。それもすり傷やかすり傷ではありえない。こんな場所まで臭いが届くのならば、まぎれもなく大怪我を負っているはずだ。

進むにつれ段々とサイレンの音が近づいてくる。もしかするとそこから香ってきているのかもしれないが、それならそれで構わない。すでに対処されているはずだから、杞憂で終わるだけでしかない。しかしすぐ近くまでやってきたところで、僅かにその道が反れた。どうやら火事は男子寮の方で起きたらしいが、臭いは少し離れた裏路地から漂ってきている。

ふう、と一息吐いてから、氷室は慎重に路地裏へと足を踏み入れる。

誰かが重傷を負っていたとしても、それを負わせた犯人がその場に未だとどまっている可能性もある。不用意に飛び込むのは危険だし、戦う必要があるのなら不意打ちの方が有利だ。

路地の角までやってきて、身を隠しつつその先を覗き込む。

視線の先には少年一人とベンチに横たわる少女が一人。少女の方は外人らしく、身に纏う衣装も学生服とは異なる。かといって私服とも思えない。

(ここからじゃ判別しにくいけど……)

怪我をしているのはおそらく少女の方だろう。

少年の方は少女の傍で跪き、少女と何やら会話を交わしている。

と、突如少年は少女の体を背負いこちらへと歩き始めた。

(この状況で?)

普通怪我をしている人間は下手に動かさない方がいい。その場に留まって救急車を呼ぶなり、人を呼んでくるなりするのが一般的な対応だ。ましてやすく近くに消防車が来ている状況で、わざわざ運ぶ必要はない。無論、一刻を争う自体なら往復の手間を惜しみ運ぶこともあるかもしれないが、少年の進む先はサイレンのする方向とは真逆の方角だ。

(怪しいわね……)

どうする、と自問し、

(なんて、考えるまでもないわね)

答えは出ていると、一気に物陰から飛び出した。

「止まりなさい！」

「っ 誰だ！」

道の中央に立ちふさがった氷室に対し、少年は警戒を露わにし身構える。

「っ って、氷室？」

「上条、くん……？」

対面したことでハッキリとした人相に氷室は啞然とし、同時心の中で盛大な舌打ちを漏らす。

(まさか今日だったとはね……)

おぼろげな原作知識を思い出し、現在の状況を悟る。

おそらく魔術師ステイル・マグヌスとの戦闘を終え、現場から逃げてきたところなのだろう。

(となると、この子がインデックス禁書目録……)

「なんでこんなところに……？」

「それはこっちのセリフよ」

「っ……！」

夜更けに大怪我を負った少女を背負った少年と、夜遊びに耽っていた少女のどちらが異常かを問われれば、間違いなく上条側がおかしいと断言できる。

無論、夜遊びも褒められたものではないのも確かだが……。

「っ って、こんなことしてる場合じゃないんだっただ……悪い、氷室。今急いでんだ」

「でしようね。その子、怪我してるみたいだし」

真っ白な布地に金の刺繍が施された高価なティーカップみたいな修道服を身に纏う少女を一瞥し、頷く。

血の臭いはそのシスター インデックスから放たれたものだ。  
今現在も足元に血の雫が滴っていることから、傷を負ってからそう  
時間は立っていないのだろう。

「ああ。だから」

病院に、と続ける上条の言葉を遮り、

「ええ、だからその子をすぐにおろして」

「え？ おろす？」

「いいから早く！」

「えっ……、あ、おい！ 氷室っ！」

状況を飲み込めていない上条を無視して、その背からインデック  
スをはぎ取ると地面にうつ伏せに寝かせ傷口を見る。

「酷いわね」

純白の布は背中の部分だけ真っ赤な血で染まり、黒く濁っている  
部分も見受けられる。

「そうなんだ。だから早くその子を病院に連れてかないと」

「なら、なんでサイレンの鳴っているのは逆方向に向かっているの  
？」

あれだけの騒ぎなら救急車の一台や二台待機していてもおかしく  
はない。

なのに、それをしないのはなぜか。

「そ、それは……」

「事情がありそうだけど、今はこの子を助けるのが最優先よ。少し  
黙ってて」

言い淀む上条にきっぱりと告げ、氷室は携帯を取り出すと短縮ボ  
タンから目的の番号を呼び出す。

「……私よ」短いコールの後、電話に応じた相手に開口一番そ  
う告げると、「訳有りの重症患者一名。背後から鋭利な刃物で一撃  
傷口は広くて深いけど中は無事みたい。でも出血が酷い。血液型は  
……」ちらりと上条に視線を向けるが、しきりに首を振る姿を見て  
「御免、わからない。応急処置はこっちでしておくから急いで車を



回して。場所は うん、そう。じゃ、よろしく」

居場所を伝え、電話切ると再びインデックスへと視線を向ける。

「お、おい氷室。今のって……」

「病院よ。当然じゃない」

「い、いや、それは不味いんだ。その子は……」

「IDを持たない“外の人間”でしょ？」

「なっ ……!？」

なんで、と目を丸くする上条にインデックスの傷の具合をより深く診察しながら、

「この状況下で救急車も呼ばず、人がいる場所にもいかず、むしろ避けるように行動しているなら答えは一つよ」

あなたが犯人なら話は別だけど、と語る氷室に、上条は必死になつて首を振り否定する。

「でも、それなら……」

「大丈夫。呼んだのはそういう“訳有り”でも対応してくれる病院だから。上に知られるのが不味いつていうならその存在も隠してくれるところよ。だから安心して」

確かにそれならば問題はない。上条は当初、とある事情により担任教師の小萌先生の家へ向かうつもりだったが、きちんとした医療施設に搬送できるのならそっちで治療してもらった方がいいはずだ。「てか、なんでそんな病院知ってるんだよ」

「親が務めてるところだから」

「お、親？」

「そう。……それより少し離れてて。止血するから」

「お、おう。何か手伝えることはあるか？」

「ないわ。むしろ邪魔。特にその『右手』がね」

「右手……?」

上条は自らの右手を見る。

その右手にはあらゆる『異能の力』を打ち消す力が備わっている。ついさっきまでその力を使い、インデックスを狙ってきた『魔術

師』を自称する男と戦ってきたところだ。

( けど、それが止血とどう関係するんだ？ いや、それ以前に )  
なんで氷室はこの『右手』の事知っているんだ、と首を傾げる上  
条の目の前で、あるうことか氷室はその手をインデックスの傷口に  
押し込んだ。

「うっ …!?」

「お、おい！ 氷室!？」

「黙ってて！ 少し痛いけど、我慢してね。すぐに血を止めて病院  
に連れて行ってあげるから」

優しく諭すようにインデックスに告げると、氷室は再び視線を傷  
口へと向け、集中する。

( 傷口の範囲は広いけどきれいに切られている。これなら止血して  
適切な処置を施せば傷跡も残らないわね )

心の中でそう呟きながら、意識を傷口全体に広げ、膜で覆うよう  
なイメージを思い描く。

すると、

「……血が、止まった?」

「ええ。このまま維持してれば、病院までなら何とか持つわ」

「で、でもどうやって……?」

氷室は上条と同じ『無能力者<sup>レベル0</sup>』のはず。何の能力も持たない、持  
つていたとしても現実に効果を及ぼすほどの力など持たない、無能  
な能力なはずだ。

「……私もね、上条君と同じよ。身体検査<sup>システムスキャン</sup>では検出されない能力者」

「検出されない……?」

再び上条は自身の右手に目を落とす。

『イマジンプレイカー  
幻想殺し』と呼ばれるその右手は、超能力であれ魔術であれ、  
それがたとえ神様の奇跡なんてシロモノであれ、一撃で打ち消す力  
を持つ。が、逆を言えばそれだけでしかない。拳銃から放たれた弾  
丸を防ぐことは出来ないし、燃え移った炎を消すこともできない。  
ましてや身体検査<sup>システムスキャン</sup>で用いられる機械には何の効果ももたらさないた

め、結果的に『無能力』の烙印を捺されるのだ。

「私の能力

『カウンターストップ

』抑止力』はね、『止める』能力なの」

「とめる？」

「そう。正確には『対象の持つベクトルに干渉し、その量を0にする』能力。ベクトル量が0になった物体は動くことができないから、結果的に『停止』することになる」

しかしその力は“初めから動いているもの”に対してしか効果を発揮しないため、静止した状態からの動きを読み取る身体検査では計測されることはない。それどころか計測器の動きすら『止めて』しまうために、値が0から動くことはなく計測不能となってしまう。故に結果は『無能力』判定。

「今はこの子の傷口の血を『止める』ことで血管に蓋をしている状態。だからもし上条君の右手が干渉すれば、その蓋は外れて再び出血が起きることになる」

だから邪魔なのだ。

その言葉に、上条は小さくうめいた。

自分の『右手』<sup>ちから</sup>は異能の力を打ち消すことは出来ても、不良からは逃げるしかなく、テストの点が上がる訳でもなく、女の子にモテたりする事も無い。ましてや瀕死の少女を救う事すら出来はしない。それに比べ氷室の能力は同じ『無能力』とされながらも、こうして少女の傷を塞ぎ、その命を繋ぎとめているのだ。応急処置とはいえ、それは確かにインデックスの事を救っている。今、まさに。

「卑下する必要はないわ。たまたま状況が合致しただけで、私の能力だつて“使えない”能力なんだから」

「使えない？」

なんで、と問いかける。今まさにインデックスの命を救っているのは氷室の能力によるものだ。それが“使えない”なんてもののはずがない。

「使えないわよ。ベクトル量を0にするって事は『止める』こと“出来ない”ってことだもの。加速することも減速することもで

きない。何かを生み出すこともできないし、操ることも不可能。あらゆる攻撃を防ぐことは出来ても、攻撃力は皆無。そんな力、こんな場面以外にどこで使えっというのよ？」

確かに『物を止める』という力が役に立つ場面はそれほど存在しない。例えばブレーキの壊れた暴走トラックを止めるのに使えるが、そんな場面に出くわす方がレアで、そんな限定的な場面にしか使えないのでは意味が無い。あらゆる攻撃を止めるというのも、攻撃を仕掛けてくる者を排除することが出来ない以上、ただ防ぎ続けるだけで、相手があきらめるのを待っていることしかできない。先に力尽きてしまえばその時点で殺られてしまう、その程度の力ではない。

今だって、インデックスの命を繋ぎ止めてはいるが癒しているわけではない。あくまでも延命であり、それ以上の事は他の者の手に委ねるしかない。

「だから今回は偶然状況が私の能力に適していただけで、異なれば立場は逆転していたか、どちらも役立たずで終わっていたはずよ」

「あ、ああ……」

そういう事なら上条だって理解できる。

お互いたったひとつの事に特化しているせいで、それ以外の事がなんらできないというだけの事だ。

これがもし何らかの『カウンターストップ異能の力』によってインデックスの命が脅かされているのならば氷室の能力ではなく上条の右手の出番となっただけだ。

「それと、このことは誰にも言わないでね」

「え？　なんでだ？」

無能力者の形見は狭い。能力者の街であり、学校の評価もそれに準ずる以上、最底辺に位置する『無能力者』は他の能力者から見下される事が多い。

それに能力云々を除いたって、力あるものが力なきものを虐げるのはいつの世も変わらない事柄だ。

しかし氷室にはちゃんとした能力が備わっている。例えその力が“使えない”能力だとしても、能力者であるという事実があれば彼女の地位は向上し過ごしやすくなるはずだ。

「必要ないから」

「必要ない？」

「だってそうでしょ？ スプーンを曲げるならペンチを使えば良いし火が欲しければ100円ライターで十分よ。テレパシーなんてなくてもケータイがあるし、テレポートなんて使わなくても自分の足で歩けばいいだけじゃない」

「まあ、そうだな」

それは昨夜、とある電気使いに上条自身が吐いた台詞でもある。エレクトロマスター

他の何かで十分代用可能ならば、わざわざ超能力を使うまでもない。ただ少し便利だな、程度のもので、その超能力だって1人1つしか持つことができないから自身の能力以外の事柄は、やはり何かで代用するしかない。

「普通に日常生活を送るだけなら超能力なんてものも必要ないのよ。だからそれで得られるものなんて『私は優秀なモルモットです』って評価だけよ」

バカバカしい、と吐き捨てる氷室に、上条は納得しながらもどこか薄ら寒いものを感じた。

『優秀なモルモット』。確かに違いない。ここは超能力を研究する街であり、生徒は『学生』の名を借りた超能力が使えるという『モルモット被検体』だ。その能力が向上するということは即ち『より優秀なモルモット』になったと言える。

だがそれを言ってしまうと

今も必死になってレベルを上げようとしている多くの能力者達がくせいの努力はどうなる？

『無能』の烙印を捺されて腐っていった者たちの嘆きはどうなる

？

そんなものに何の意味もないのだと、そういう事なのか？

「どいつもこいつも能力、能力……超能力がどれほどのものだっていうのよ。そんなものだけで人の価値が決まるわけじゃないでしょうに……」

なおも続く氷室の怨嗟。

そう、怨嗟だ。

それはまるで、過去にそういう扱いを受けたことがある様な、そんな過去に対する恨み辛みを吐き出すような言葉に、上条は氷室の中にある“何か”を垣間見た気がした。

上条にとつての氷室皐月という少女は、美人で、胸がでかくて、ノリのいい、物静かなクラスメイトだ。

普段は一人静かに教室の片隅で本を読むか窓の外を眺めているかのどちらかで、眼鏡をかけていればまさしく文学少女という言葉がぴったりと当てはまりそうだ。

かと思えば、今朝の一件のようにノリがよく、話してみれば決して悪い印象を抱くことはない。面倒見も良く、クラス委員長（女）と一緒に何かを手伝っている場面もよく目にする。

クラスのみならず学校中で密かな人気を博し、非公式にファンクラブまで発足しているという噂も耳にしたことがある。

見た目は文句なしの美人だし、スタイルもいい。特にその胸が。それでいて人柄もいいともなれば、多くの好感を集めるのは当然だろう。

頭もよくて勉強もでき、でも能力テストだけは最低得点のため補習の常連客。

それが上条がこれまでの抱いてきた氷室皐月というクラスメイトの人物像だ。

しかしそれは高校に入学してからのこと。中学は別の学校だったため、それ以前の彼女がどういう人物だったのかを上条は知らない。だからそこに人には言えないような“何か”があったとしてもなんなら不思議ではない。

だが同時に、今の氷室を見ているとそれを信じることは出来なかった。

およそ『無能力者<sup>レベル</sup>』であるということ以外に欠点なんて見当たらないこの少女が、これほどまでに悪感情を抱く“何か”があった难道見当もつかない。

身勝手ながらに上条は、彼女は人を羨むことも恨むこともないのだとさえ思っていた。

だけどそれは違った。彼女も一人の人間であり、ならば当然そういった暗い感情を宿すただの人なのだと、理解した。

(でも、なんで……)

怨嗟を綴る氷室の表情はどこまでも冷たく無表情で感情無しには語れないと示しているかのようでそれは彼女の抱える暗さがともまでも深く、底の知れない深淵の『闇』を連想させるほどに暗いものと表すようで

(なんでそんなに、悲しそうなんだよ……)

何故だか上条には、氷室が一人泣いているかのように見えた。

「上条君？」

ふと名を呼ばれ顔を上げると、氷室が不思議そうな表情で上条を見つめていた。

そこに先ほどまでの暗い冷たさは微塵も感じられない。いつも通

りの氷室皐月がそこに存在し、先ほどまでのが全て夢だったかのような錯覚を覚えてしまう。

(夢、だったのか……?)

今日一日いろいろとあり過ぎたせいで疲れているのかもしれない。

「えっと…悪い。で、なんだっけか?」

「だから秘密にしといてくれって話よ」

「あ、ああ。でも、それなら尚更バラしちまった方がいいんじゃないか?」

氷室の過去に何があったのかはわからないが、かといって『無能力者』であるより、無い方がやはり都合がいいのではないかと思う。「まあ、普通有能力だったらそっちの方が面倒がないでしょうけど……」

「何か問題があるのか?」

それはやはり“暗い過去”に関係するのだろうか、と上条は氷室の顔を窺ってみるも、眉を顰めてはいるものの先ほどの様な冷たい無表情ではなかった。

「問題、というか……希少なよ、私の能力は」

「まあ、そうだろうな……」

上条だつてすべての能力を知っているわけではないが、それでも『物を止める』だけの能力なんて聞いたことがない。逆ならば腐るほどあるのだが。

「勘違いしているみたいだから訂正するけど、『止める』ことが希少なことじゃないからね」

「へ? 違うのか?」

「ええ。問題なのはそれが『ベクトル』に干渉する能力だつてこと『ベクトル……?』そのどこが問題なんだ?」

物を止めるのならベクトルに関わるのは当然だろう。

物体は須らく何らかのベクトルを有しているのだし、動いているということはそのベクトルが作用しているという事だ。その作用を『止める』以上、ベクトルに関連するのは必然だと思っただが……。



「間接的にベクトルに作用する能力者は大勢いるわ。『サイコキネシスト念動力者』もある意味そうだしね」

物体に力を加えて操る彼らも間接的にベクトルを操っていることになる。

「でも直接ベクトルに干渉できる能力者は私以外にはこの学園都市に一人しかいないの」

「二人だけっ!? マジかよ」

「マジよ」

学園都市の人口は230万人とされ、その八割が学生＝能力者だ。つまり184万人もの能力者がいて、その中のたった二人しか存在しない。

確かに希少だ。

ちなみに『イマジンプレイヤー幻想殺し』はそれ以上の珍種<sup>レアモ</sup>のだが、本人に全くそ

の自覚がないためここでは捨て置かれている。

「しかもその能力者っていうのが、第一位なのよねえ……」

「トップだ、第一位って……、学園都市に7人しかない『レベル5超能力者』の第一位っ!?!」

学園都市における能力者はその力量により0から5の6段階に振り分けられる。

最底辺は言うまでもなく上条達が所属する『レベル0無能力者』。そこから一般的に能力者と呼ばれ始める『レベル1低能力者』、『レベル2異能力者』と続き、『レベル3強能力者』で一人前、『レベル4大能力者』ともなればエリートと認められる存在となる。

そして最高位の『レベル5超能力者』は学園都市に僅か7人しかない。その7人の中でもさらにランクがあり、その第一位<sup>トップ</sup>ともなれば正真正銘学園都市最強の能力者ということになる。

「そ…、だからわかるでしょ? 第一位最強の能力者と同じ系統の能力を、レベル0最弱である私が持っているなんて知れたら大騒ぎになるわ」

騒ぎにならないはずがない。大事だ。

「私は今の生活で十分満足しているの。それ以上もそれ以下も望んでいないから……」

「……わかった。誰にも言わない」

「助かるわ」

確かにすごいことであり、自慢できることではあるが、それをどうするかは本人次第だ。他人が持て囃したところで碌なことにはならない。

そもそも話したところで信じる者などいないだろう。氷室が『無能力者』であることはすでに『書庫』にも登録されている事実だ。その力が『身体検査』で検出されない以上、上条の『幻想殺し』同様、その評価が覆ることはない。

だが万が一、ということもある。

本人がそれを望まないのであれば、上条には面白半分でそれを風潮する気は微塵もなかった。

「……来たみたいね」

未だ鳴り止まない男子寮側のサイレンとは別の方角から聞こえてきたサイレンが近くで止まる。

すぐさまストレッチャーを連れた一団がこちらに向けて駆け込んできた。

「運ぶの手伝って」

「おう……って、大丈夫なのか？」

「直接効果範囲に触れなければ平気よ」

「わかった」

チラリと見たインデックスの容態はすでに虫の息だ。

ここからは時間との勝負となる。

「もうすぐ病院だからな。それまで死ぬんじゃねえぞ、インデックス」

冷たくなったインデックスの手を上条当麻は力強く握りしめた。

## 第02章 とある介入者の即興演出へインプロビゼーション

「妻の初産を待つ夫か、あなたは……」

インデックスが手術室の中に消えてからというもの、無意味に廊下を行ったり来たりする上条の様子に氷室はあきれたように声をかける。

「ちょっとは落ち着いたら？ あの傷なら手術を受ければ問題ないはずよ」

「いや、わかつてはいるんだけど……」

それでもじつとはしていられないと、立ち止まりはすれどソワソワと手術室のドアへとしきりに視線を向ける上条。

「はぁ……」

気持ちは分からなくもないが、いくらなんでも心配のし過ぎだ。

「こんなところで心配したってすでに償は投げられた後よ。上条君が執刀するわけでもないのだから、私たちに出来ることなど何一つないの」

そう割り切ったことが言えるは単に氷室がドライなだけか、それとも他人事だと思っっているからなのか。もしくは

「大丈夫。さっきの医者はこの学園都市で最高の医師よ。彼に救えない患者は誰にも救えない。だから安心して黙って座ってなさい」

「最高の、医師……？」

上条はインデックスとともに手術室に消えていった医者顔を思い出す。

失礼ながら、なんていうか潰れたカエルみたいな顔をしている初老の男性で、とてもじゃないが彼が最高の医師だなんて上条には思えない。

ましてやここは学園都市。最先端科学の結集するこの街において最高とは、即ち世界一の名医ということになる。

「……あれが？」

「ええ」

「いやいやいや。どう見ても上条さんの見立てでは田舎の小さな診療所で御老人相手に世間話ついでに診察を行っている方がよく似合っているといった感じなんですけど？」

「だとすればずいぶんとハイカラな田舎よね、ここ」

「ハイカラって……いつの時代の言葉だよ、それ」

「明治の後期から戦後にかけてね。でも今でもキチンと辞書に載っている列記とした現代語よ」

「いや、それはわかってるけど……、てか、マジでそうなのか？」

「ええ。疑う気持ちもわからなくないけど紛れもなくそうよ」

自信満々に頷く氷室からの様子に嘘をついている気配はない。

が、だからと言ってすでに「田舎の小さな診療所で御老人相手に世間話ついでに診察を行っている町医者」という認識が出来上がってしまったている上条には、どうにも信じがたい。

「……上条君。冷凍催眠コールドスリープって知ってる？」

「それってあれだろ？ 人間を氷漬けにして、後で解凍して蘇えらせるって言うヤツ。たしか有人での惑星間移動時に無駄に歳を取らないようにするための技術、だっけか？」

「ええ、不治の病とか死者蘇生の望みを繋ぐとかの理由で医療現場でも用いられることもあるらしいけどね」

「けどアレってたしか、冷凍する時に問題があって現実には不可能とか言われてなかったか？」

「そうよ。人体の6割から7割は水分で構築されているけど、『水』は他の物質と違って液体よりも固体の方が体積が大きくなる特殊な物質だから、冷凍時に細胞内の水が体積膨張を起こして細胞壁を壊してしまうの。だから解凍してもほとんどの細胞が死滅しているから、蘇生は不可能とされているわね」

「だよなあ……。で、それがどうしたんだよ」

少なくとも今のインデックスにそんな処置を施す必要などない。というか、蘇生が不可能ならそれはただの『人殺し』だ。他にどう

しようもなく、助かるかもしれないもしもの未来に一縷の望みを託すより他にない状況ならばともかく、それがいつになるのか、そもそも本当にそんな日が訪れるのかもわからないのに実行するヤツの気がしれない。

「あの医師はね、その不可能を可能にしたの。それもほとんど後遺症らしい後遺症を残すことなく、ね」

「なっ　、マジかよっ！　どうやって！」

「奇跡的に体積膨張が起きてなかったからね。ならば解凍するだけだったから大した問題ではなかったよ」

そう答えたのは氷室ではなく、手術室の中から姿を現したカエル顔の医師。

「先生！？　インデックスは！　手術はどうなっただんですか！？」

彼の顔を見るや否や飛びつくように上条が詰め寄る。

「安心していい。手術は成功。ただ失血が酷いからね。一、三日は絶対安静だよ」

「よかったあー」

「言ったでしょ、大丈夫だった」

はあ、と安堵の息を漏らし胸を撫で下ろす上条の姿に、笑みを噛み殺しながら氷室はその肩をそっと叩く。

「……にしても、よく言うわね。『解凍するだけだったから大した問題ではない』なんて言えるの、あなたぐらいでしょうに」

「そうかい？　確かに解凍時にも問題はあるけど、その問題さえ分かっているのなら“それに適した解決策”を用意して対応すればいいだけの話だ」

「その解決策がぶっ飛んでるっていうのよ……」

人の体は種類の異なる無数の細胞で構築されているため、熱の伝わり方が場所によってそれぞれ異なる。そのため均一に熱を加えた

だけでは解凍する速度にムラができ、例え正常に解凍できたとしても人体の機能に多くの問題を抱えた状態となってしまう可能性が高いのだ。

それをこの医師は、熱の伝導率毎に分けて解凍するという方法を取った。

要するに氷漬けの人体をバラして、解かして、再度繋ぎ合わせたのだ。

しかも後遺症を残さないために各部の解凍速度を調節し、手術の進行と併せるといふ荒業までやってのけている。

もしこの話を普通の医者が聞けば、まず信じないか、信じたとしても目を丸くして言葉を失うか、泡を食って倒れるかの何れかだろう。一般人ならまず正気を疑う凶行だ。

だが、どんな凶行であろうともそれで患者の命を救えるのであれば彼は何を犠牲にしてもそれを実行する。

法も、常識も、倫理も、道徳も、慣例も、その全てを無視し、一切の手段を問わず、ただ一つの目的と信念のために行動する。

患者を見捨てない。

医者としてごく当たり前の、しかし現実的には非常に難しい、ただそれだけのためだけに行動し、実行し、達成する。

それが彼にとっての“当たり前”であり、それが出来なければ彼は自分に『医者』を名乗る資格はないとさえ考えている。

どこまで行っても彼は医者であり、どんな時でも医者であり、どうなるうとも医者であり続ける。

そうしてこれまで多くの患者の命を救いだし、奇跡を起こしてきた。

それによりついた二つ名が『ヘブンキャンセラ冥土帰し』。奇跡の医師。

もっともその名の通りに死者を甦らせるなんてことはさすがの彼でも不可能だ。

先の冷凍催眠の例は、ただ氷漬けになって眠っただけだから可能だっただけで、もし冷凍された際に細胞壁が壊れていたのなら、さすがの彼も手の施しようがなかった筈だ。

しかし“死んでさえいなければ”彼は必ず患者を救い上げる。どんな手段を用いても。

それが彼という人間の存在意義だから。

「それはそうと、一つ聞いてもいいかい？」

「あ、はい。なんですか？」

喜びを噛みしめていた上条に『冥土帰し』<sup>〈フンキャンセラ〉</sup>が自身の喉元を指さしながら問いかける。

「あの子のここ、喉の奥の方に、なんだかよくわからないマークが刻まれていたんだけどね。君、何か知っているかい？」

「マーク？」

「そう。ちょうど星占いとかで使われているような、そんな形の印だよ。直接じゃなく、何らかの能力みたいなもので付けられているみたいんだけどね。よくわからなかったし、とりあえずは問題なさそうだったから放置しているんだけど……その様子だと何も知らなそうだね」

「はい……」

「わかった。一応こっちでも検査はしてみるよ。けど彼女、シスターみたいだから、何か宗教的な意味があって付けているのかもしれないけどね？」

「……………」

「じゃ、僕はまだやることがあるから、これで失礼するよ」

そう言って『冥土帰し』<sup>〈フンキャンセラ〉</sup>は踵を返そうとし、突如忘れ物でもしたかのように足を止めると「あ、そうそう」と言いながら氷室へと向き直る。

「君もあまり無茶はしないようにね？」

「……………わかってるわ」

「ならいいんだけどね？」

それだけ告げると今度こそ『冥土帰し』（ヘブンキャンセラー）は手術室の中へと戻っていった。

「……知らないけど、心当たりはある、って感じね」

『冥土帰し』の姿が見えなくなると同時に物思いにふけていた上条に、氷室が声をかける。

「あ、いや……」

「ウソ。おおよそあの子を襲った犯人に関連する事でしょう？ で、巻き込みたくないから話さない、ってどこかしら？」

「……すげえな。なんでこれだけの情報でそこまでわかんだよ」

（そりゃ、原作（みらい）を知ってますから）

感心する上条の問いに氷室は心の中で答えを返す。

無論、口に出すことはしない。出したところで信じてもらえないだろうし、何より氷室の持つ原作知識は完璧ではない。

元々原作が未完だったというのもあるが、色々（ストーリー）と記憶から抜け落ちていく知識が結構ある。

例えば今日が上条とインデックスの出会いの日であり、原作の開始日だったなどすっかり忘れていた。

夏休み初日という分かりやすい日であるにもかかわらず、氷室は覚えていなかった。

よって自信を持って言えるのはせいぜい主要人物のプロフィール（アウトライン）とあらずじ、それとおおよその時系列程度だ。

それ以外はこれらから読み取れる事象を氷室が独自に推測し、補間しているに過ぎない。

しかしそれでは不確定要素が多すぎるため確証に欠け、他人に伝えるなんてことできる筈もない。

それにすでに原作への介入を果たしてしまっている現状、それらの知識は参考程度にしか役に立たないだろう。



なんせ『氷室臯月』なる人物がすでに原作には登場しない『不確定要素』なのだから。

(問題は、できるだけ原作の流れを崩さずに、どこまで都合のいい結末を紡ぎだせるかね)

元々氷室は原作に介入する気などなかった。

それは最初から無理だと理解はしていたが、少なくとも今回の一件に関しては自分の出る幕ではないと判断していた。

しかしあの場であれ以外の行動をとる方が逆に不自然だ。自分にはその状況を解決できる術と人脈を持ち、それでいて何もしいななんてことできる筈がない。

それに個人的な心情で、インデックスを見捨てることができなかつたというもある。

無論、見捨てたとしてもそれならそれで原作通りに進んだかもしれない。

だが、そうならなかったかもしれない。

あの僅かな邂逅が、後の展開にバタフライ効果を及ぼさないとは限らないのだから。

なら関わったことを悔やむより、物語が破綻させてしまった責任を果たすべきだ。

介入を続け、流れを修正し、見届ける義務が氷室にはある。でなければ最悪の結末を迎える可能性もありうるから。

だからと言って原作通りに進めるつもりはない。それはすでに破綻しているし、あの物語も万事解決とは呼べる代物ではない。

しかし原作から離れすぎても今後の展開が読めずアドバンテージを失うことになる。

それになんだかんだ言っても原作の終わり方が最善であることも多い。

だがそこへ至る経緯が欠落している以上、慎重に事を進める必要

がある。

原作と現在の情報のすり合わせをし、どこでどれだけの情報を開示し、どれほどの介入をして、どれだけの修正と破綻を行えばいいのか。

それは単に原作をなぞるよりも難易度の高い『即興劇』だ。

始まりと終わり方だけが決まっただけで、後は演じる役者たちに全てが委ねられている。

しかし彼らは自分達が『即興劇』を演じているという自覚がない。だからそれぞれがそれぞれの思惑に従い、思うがままの行動をとり続ける。

そんな状況で氷室が果たすべき役割は役者兼演出家だ。

自覚なき役者たちの意図をくみ取り、先読みし、物語が破綻しないよう調整し、テコ入れをし、介入最良の結末へとこじつける。

それも決して自らが都合主義の神様にはならず、その場にいる者たちが自然とそちらへと向かってような、そんな演出を誰にも悟られず、極自然にこなしていかなければならない。

(どんな苦行よ、それ……)

目の前にそびえ立つ壁の高さを思うとくらくらと眩暈を覚えるが、偶然とはいえずに後戻りのきかない場所に立ってしまっている以上、やるしかない。

すでに債は投げられている。匙まで投げるわけにはいかない。

(とりあえずはこの先の展開へと介入する糸口、これを本格的に繋ぎ合わせるのが先決ね)

上条当麻は無関係な人間が関わるのをよくは思わない。できる限り遠ざけようとするだろうし、それが女の子であるならばなおさらだ。

朴念仁で無鉄砲で、後先考えない唐変木ではあるが、同時に生粋のフェミニニストでもある。後、無類のお人よし。

しかし頑固というわけでもない。理屈があれば理解はするし、流されやすく、人の話を鵜呑みにしやすいという欠点もある。

(となれば )  
数瞬の思考でとりあえずの道筋を立てた氷室は上条を真正面に捉え見つめる。

「……話して。何が起きているのか、あの子が誰に狙われているのか」

「いや、それはダメだ」

案の定、即座に首を振る上条。

「インデックスを助けてもらったのには感謝してる。でも、だからこそ、これ以上氷室を巻き込むことは出来ない」

どこまでも真摯に、率直に、当たり前前の言葉で申し出を拒否する上条当麻。

しかしそんなことは織り込み済みだ。

「勘違いしないで。別に進んで巻き込まれたいわけじゃないわ」  
「だったら」

「けど、嫌が応でもすでに巻き込まれている状態なの。言わなかった？ ここは親が務めている病院だって」

「……そういや、そんなことも言ってたっけ」

「ちなみにさっきの医者がその親んだけど……」

「……はあ？」

長い長い沈黙の後、シリアスも何もかもをぶっ飛ばして、上条当麻は間抜けな顔を晒した。

「……あれが、親？」

「そうよ」

「……冗談？」

「じゃないわよ」

「……………マジで、親？」

「そう言ってるでしょ」

「……………奇跡だ」

これぞまさに遺伝子の神秘。奇跡が起きたとしか思えない程、上条の目から見て二人は似てない。

似ている方を探すのが困難なぐらい似ていない。

逆間違い探し、それも世界最高難易度を誇る超難問と呼べるくらいに全く似て似ても似つかない。

「言っておくけど、血は一滴も繋がってないわよ」

「つてことは、連れ子か？」

「いいえ、『捨て子』よ」

「捨て、つ！？」

「チャイルドエラー置き去り』だから、私」

「……………！？」

今度こそハッキリと上条は絶句した。

『チャイルドエラー置き去り』とは学園都市が抱える特有の社会現象のことだ。

学園都市は入学した生徒の生活を最低限保証する制度が存在する。これは入学と同時に『開発』を受け『能力者』となることで、その存在そのものが学園都市の機密情報と化した生徒をむやみに外部に流出させないようにするための機密措置の一環として存在する制度だが、これにより学生たちは学園都市内の生活が保証されることとなる。

しかしこれを悪用し、手を付けられない子や育児を放棄した親が、入学金だけを支払って我が子を学園都市に放り込んだのち行方を眩ますという行為が頻発するようになった。

これに対し、学園都市側は入学時の審査を厳しくする等の措置を取ってはいるものの、大した効果はなく、かといって入学手続きそのものが正当に行われている以上、入学と同時に能力開発を行って

しまい、以後その子を外部へと放り出すこともできなくなってしまう。その上、何の保証もせずにいると治安の悪化を招くだけのため、保証はせざるを得ず、それに託ける無責任な親は後を絶たない。そのため有効な手段がとれぬまま年々その数は増え続けているという、厄介な連鎖が発生しているのだ。

そうして親に捨てられた子供の事を学園都市では『置き去り』と呼んでいる。

「驚くことじゃないと思うけど？ 学園都市じゃないして珍しくもないんだし」

「いや、それはそうだけど……」  
確かに珍しくはない。年々増加傾向にある『置き去り』が具体的にどれだけいるかなど上条にはわからない。だが、少なくともそれは知っている。

それに学園都市は外部の人間が立ち入るのを嫌っているため、親兄弟であっても中に入るには面倒な手続きと検査を幾重にも行わなければならず、頻繁に訪ねてくることはないし、外との連絡だってある程度の規制が設けられている。

そのため本人が『置き去り』だと言わない限り他の学生と何一つ変わらない生活を送っているため、区別をつけることはできない。だから偶然となり居合わせた子が『置き去り』だったとしてもなんら不思議ではない。

だがしかし、自分から『置き去り』だという者は珍しく、普通は隠すものだ。親に捨てられたなんてこと、他人に話したがるヤツはそうはいない。

しかも目の前にいる人気者の少女が『置き去り』だなんて、上条じゃなくても信じられないに違いない。

「少し前に大怪我を負ったことがあってね。その時、執刀してくれたのが彼で、その誼で保護責任者を買って出てくれたのよ」

「だから、『親』か……」

「そう」

氷室は一度だって『父』や『母』という言葉は使っていない。ただの『親』、それだけ。

それは父でも母でもなく、どちらでもあり、どちらでもない、自らを庇護する存在としての意味であり、それ以上の意味を持たない言葉だ。

だがそれでも『保護責任者』ではなく『親』という言葉を使うのは、その人物に敬意と感謝の気持ちを払っているから。

「だから、ここが戦いの場になるのなら、それは他人事じゃないの。……犯人、まだ捕まってるんでしょ？」

「ああ……」

インデックスを襲ってきた 本人曰く、傷つけたのは別の人間で、自分はただ『回収』しに来ただけだと言っていたが 魔術師は上条の一撃で気を失い倒れたものの、それだけで諦めるとは到底思えない。

かといって警備員ジャッジメントにそう易々と捕まるようなヤツでもおそらくはない。

ならまたあの魔術師はインデックスを狙って襲撃を仕掛けてくる。対策を練ったうえで、必ず。

「けどさつきも聞いた通り、あの子は二、三日ここから動くことができない状態よ。でも襲撃犯がそれを悠長に待ってくれるとは限らない。なら、ここは戦場になるわ。そしてこの病院とその患者に危害が加えられるのなら、私はそれを黙って見過ごすことはできない」

ここは病院だ。それなりの警備セキュリティは配備されているものの、あくまでも“それなり”であり、一般的な犯罪を想定したものでしかない。そもそも病院が襲われるなんてことはそうそうありえず、ましてや魔導師なんてふざけた連中が襲ってくるなど言うまでもなく予想外の事態だから、大した効果は期待できないと思っただけ。

その上、ここにはインデックス以外にも多くに入院患者が在籍し、彼らの面倒を見るため常時医師や看護婦などが詰めている。

そこが戦場になるということは、つまりそんな彼らにも危害が及ぶ危険性があるという事だ。

(くそっ、やっぱり病院は不味かったか……)

かといって当初の予定通り、小萌先生に頼つても結局のところ同じだ。どの道、無関係な誰かを巻き込むことになるのは変わらない。(だったら、どうすればよかったっていうんだよ!)

インデックスを見捨てて逃げればよかったのか?

そんなことはできない。できたのであれば上条当麻は魔術師なんてメルヘン野郎に挑みかかったりはしなかった。

なら今すぐインデックスを連れて逃げればいいのか?

しかし途中で容体が悪化した場合、またここに戻って来らざるを得なくなる。

だけどこのままここに置いておいても、無関係な誰かを巻き込んでしまう。

「大丈夫よ。こと防御に関してなら私の能力は完璧だから」

「……どうということだ?」

「こういうことよ」

そういうと氷室は持っていた空き缶を上条に向けて放り投げた。

上条は思わずとっさにそれを受け止めようと前が出る。

が、予測していた場所に空き缶は“落ちてこず”、勢い余つて前のめりに倒れ、

「あだっ!?!」

空き缶に盛大に頭をぶつけてしまう。

「大丈夫?」

「大丈夫って 狙ってやがっただろ、絶対!」

「そんなつもりはなかったんだけどね……さすがカミヤん。不幸に

は定評があるわね」

「いらねーよ、そんな定評！」

しかし上条当麻が不幸に見舞われるのは、物を投げれば地面に落ちるぐらいに当然の事なのである。

（物を投げれば地面に落ちるのが、当然？）

それは何の不思議もない事なのだが、ふと疑問に思い、上条は視線を上へと向けてみる。

そこにはさつき受け止め損なつた空き缶の姿。当然そこは空中で、何もなく、“普通なら”空き缶は床へと落ちる筈だ。

宙に浮かんだ空き缶を試しに左手で触れてみる　　が、ピクリとも動かない。

（これ、空中で『止まってる』んだ）

掴んで引つ張ったり、逆に押ししたり、握りつぶそうとしてみるもピクともしない。空中で完全に固定されている。

だが上条が『右手』で触れた瞬間、カランという甲高い音を立てあつけないほどに空き缶は床へと落下した。

つまりそこには『異能の力』　　氷室の『抑止力』カウンターストップが働いていた

という証だ。

「どつっ？」

「どつって……」

氷室は空き缶をただ投げただけ。投げた時点で空き缶は『停止』していなかっただのだから、上条に向けて飛んできた。

しかし上条が取るうとした段階で空き缶は空中に『停止』し、その結果目測を“誤らされた”上条が不幸な目にあつた。

「……つまり、氷室の能力は手で直接触れたりしなくても物を止めることができるってことか？」

「ええ。対象の位置座標さえ分かれば可能よ。ま、あの子の時は傷が深かったから手を入れて正確な位置情報を掴む必要があつたけど、基本的には目視の利く範囲なら可能ね。それに一度止めてしまえば能力を行使している限りどんなに力を籠めてもそれを動かすことは



できなくなる。これを壁や床、扉なんかにかけたらどうなると思う？」

その壁や床、扉は動かすことができなくなる。動かない、ということとは外からどんなに力を加えても動かすことができないという事だ。

「そ。それ以上に壊すことすら不可能になるわね。私の能力はあらゆるベクトルを対象とできるから、分子、原子単位での『停止』も可能よ。それらが動かないのなら、それらで構築された物体を壊せるはずがない」

「すげえ……」

硬度を上げるなんてレベルじゃない。破壊不能な物体を作り出すなんてこと、他のどんな能力にも不可能だ。

「つてことは、それを使えば病室をシエルターみたいなにできるつてことか」

「そ。たとえば核爆弾を落とされようとも、巨大隕石が降つてこようともビクともしないわね」

「いや、さすがにあいつらもそこまでではないと思うけど……」

「それに11次元ベクトルも止められるから空間移動テレポートによる侵入も防げるわ。『難攻不落』ですら生温い、まさしく『絶対不屈』の要塞よ」

「……確かに、それなら守りきれられるかもな」

「でも私の体力は無限には続かないから……」

「ただ閉じこもっているだけじゃ根本的な解決にはならない、つてことか」

「そういうこと。だから無駄な力を使わないためにも、向こうがどんな力を使ってくるのか知っておきたいの。それにあの子がどんな事件に巻き込まれているのかを知れば、戦闘を回避する手段を講じることできるかもしれないし、できなくても何らかの対策は練れるはずよ」

今、インデックスをこの病院から動かすことはできない。

かといって上条一人で病院や入院患者たちも含めて全部を守りきるなんてことは不可能だ。

イマジンプレイカー  
上条当麻の力は防衛戦には向かない。

『イマジンプレイカー 幻想殺し』の効果範囲は右手、それも手首から先の部分だけだ。その部分に触れた異能は須らく打ち消すことができるが、それ以外の場所は何の効果も持たない、ごく普通の高校生の肉体があるだけだ。

だから自分一人を守るのならばなんとかなるかも知れないが、その背に誰かを背負って守る盾とするにはあまりにも小さすぎると言わざるを得ない。

カウンターストップ  
一方で氷室の能力は彼女の言うとおり防衛戦に特化している。

破壊不可能、侵入不可能な『絶対不屈』の砦を築き、一切敵を近づかせない。

しかしその砦も永遠に機能し続けるわけではない。  
ならば

「手を組みましょう、って言ってるの。私はこの病院とあの子を含めた患者たちを守るための盾となる。上条君はあの子を守るために盾に阻まれ動きを止めた彼らを排除する矛となる。互いの利害が一致した理想的な布陣だと思っけど？」

「ダメだ、と言っても氷室は退かないんだろ？」  
「当然」

上条がインデックスを守りたいと思うように、氷室にも守りたいものが存在する。それを守るためなら、絶対に退くことはできない。退けば守りたいものを守れなくなるから。

そして両者の願いが重なり合うのであれば、協力した方が成功率は高くなる。

あらゆる異能を打ち消す『矛 幻想殺し』と、あらゆる攻撃を防ぐ『盾 抑止力』。この2つが揃えば、魔術師相手でも十分やりあえる。

「……わかった」

どの道、魔術師まじうしも一人ではないようだし、自分一人で全てを背負

えるほど上条当麻は偉くも強くもない。

協力者となってくれる者がいるのであれば、これほど心強いことはない。

「話すよ……と言っても、俺の知っていることなんてたかが知れているし、正直俺自身も信じられないようなことばかりなんだが……」  
「構わないわ。それならそれで、そこから推測していけばいいだけだから」

「そうだな。氷室は俺と違って頭はいいんだし」

上条一人では見るこの出来ないところも見えてくるかもしれない。  
い。

「あら、頭だけじゃなくて顔もいいでしょ？」

「……普通自分で言うか、それ？」

「上条君がブス専だとは知らなかったわ」

「なんでそうなるっ！」

「違うの？」

「違うっ！」

「残念」

「何がっ！？ 違くなかったらどうなってたんだ俺!？」

「中学時代のゴリマツチヨなクラスメート（女？）を紹介しようかと……」

「全力でお断りさせていただきますっ!？」

### 第03章 とある幕間の休息时间へブレイクタイム (前書き)

今回はちよつと短めで内容薄し。

次回から本格的に事件に踏み込んでいくつもりです。

……三話目にしてタイトル付けに難航中orz

### 第03章 とある幕間の休息时间へブレイクタイム

「要約すると、あの子 インデックスはイギリス清教のシスターで、10万3000冊もの魔導書の内容を記憶していて、それを狙った魔術師とやりに追われていると」

「ああ、ステイルとかいう赤髪の外国人だ。他にもカンザキって言うヤツもいるらしい。そっちがインデックスを斬ったみたいだけだな」

「で、本来ならあの子の来ていた修道服 『歩く教会』の絶対防御であらゆる攻撃を防げたはずなんだけど、上条君が幼女の裸を見たいがために壊しちゃって、それを知らずに向こうは思いつきり斬り付けちゃったものだから、瀕死の重傷を負うことになった、と」

「そくだ… って、違えええ！」  
思わずうなずいてしまった上条が、真っ赤になって否定の雄叫びを上げる。

「誰が裸を見たいがためだ！ 俺はそんなこと思ってない！ あれはアイツが俺の右手の事をバカにして信じなかったからで っ！」

「でも、見たんでしょ、裸」

「うっ」

「見ちゃったんでしょ、裸」

「……………」  
「無垢で敬虔な修道少女シスターの裸、見ちゃったんだよね？」

「……………」  
「上条君の変態」

「だあああ、そうさそうだよそうですよ、上条さんはバッチリインデックスさんの裸見ちゃいましたよ、わるかったですね！ 氷室さんはそんなに俺を貶めて楽しいですかこんちくしょうっ！」

「うん、ものすごく」

「いい笑顔で認めたしっ！」

不幸だ、と頭を抱える上条にサムズアップしながら微笑む氷室。話の内容は割とシリアスなはずなのに、そんな気配を微塵も見せないやり取りが真つ暗な待合室で繰り返り広げられていた。

一度集中治療室に移ったインデックスを見舞った後、改めて行われた情報交換　と言っても上条側からの一方的な事情説明だがは、往々にしてこんな感じで進んでいた。

ちなみに夜の病院でこれだけの大騒ぎをしていれば看護師が鬼の形相ですつ飛んでくるはずなのだが、未だ訪れる気配はない。

理由は氷室がこっそり『抑止力』カウンターストップで即席の制音壁を周囲に築いているからだ。

一定量以上の音波に対し『停止』を行うよう演算式を調節することで、どんなに騒いでも小声で話している程度の音量しか周囲には漏れ出ない空間を構築しているのだ。

見た目に反し、かなりの高等技術をサラツと使っている氷室だが、正直こんな事に能力を使うよりも声量を抑えて話すよう気を付ければいいだけで、能力の無駄遣いもいいところである。

「まあ、上条君のラッキースケベは今に始まったことじゃないし……てか、上条君ってそれだけは不幸が適用されないのよねえ」

原作でもたびたび女性陣の風呂を覗いたり、着替え途中に乱入したりと事欠かなかった気がする。

「いえ、常にその後とてつもない不幸が待ってるんですが……」

「それは自業自得。ラッキースケベとでプライマイゼロでしょ？」

「いや、絶対マイナスだと思う……」

頭を抱えたまま蹲る上条を冷めた視線で見下ろしながら、氷室は「ふむ……」と腕を組む。

「それにしても『魔術』、ね……」

「……まあ、信じられないのも無理はないと思うけどな」

上条だって未だに信じ切れていない。

いや、その右手に『イマジンプレイカー 幻想殺し』なんてものがなければ、絶対に信じなかつただろう。

科学万能のこの時代、しかもその最先端に位置するここ学園都市で、そんなオカルトの最たる存在を信じろというのが無理な話、のはずなのだが、

「なんで？」

「……へ？」

「だって魔術でしょ？」

「だって魔術だぞ？」

「うん。信じない道理はないと思うけど？」

「いやいやいや、普通信じないだろ！ どう考えたってオカルトだぞ！？」

「そうね」

サラリと上条の固定概念を真つ向から否定する氷室の態度は至極自然体だ。何の気負いも見られず、至つて『当然』といった感じだ。「前に言わなかつたつけ？ オカルトを証明するのが科学だって」  
「そういえばそんなことを言っていた気がするよ、芋蔓式に思い出した制裁の記憶に顔を青ざめながらも上条は頷く。

「確かに魔術はオカルトよ。少なくとも多くの人間がそう思っている。でも、だからと言って『存在しない』と決まったわけじゃないわ。もし魔術がオカルトと呼ばれているのであれば、それは未だ科学のメスが入っていないか、もしくは証明に至るだけの検証が十分なされていないだけ。第一、超能力だって一昔前までは立派なオカルトだったじゃない」

「まあ、言われてみればそうなんだけどさ……」

「そもそも科学の基盤となったのは中世に流行った錬金術よ？ あれも魔術の一環としてみれば、科学は魔術から派生したとも言えるものだもの」

「うーん……」

確かにその通りではあるのだが、だからと言って「はいそうです

か」とは中々割り切れるものではない。

科学と魔術は別物という概念が定着している上条にとって、理解はできても納得まではいかない事柄だ。

それをさも当然のように受け入れ、認めている氷室に上条は感心する。自分だったらそう簡単には納得できない。というか納得できなかったせいだ。某シスターをひん剥く結果となってしまったわけだ……。

もっとも、氷室にしてみればその事実を初めから知っている上に、この世界自体がすでにフィクションの産物だという認識があるため、大抵の非常識オカルトは許容範囲なってしまうというだけの話なのだ。

「ともかく、これ以上はあの子が目覚めるの待つしかないわね。情報量が少なすぎて、現段階じゃなんとも言えないわ」

「えっと、すまん……」

「上条君のせいじゃないでしょう？ 多分あの子も上条君の事、巻き込みたくないと思ってたからわざと突っ込んだ話はしなかったんだろうし……」

「そう、だよな……」

私と一緒に地獄の底までついてきてくれる？

今朝インデックスと別れた際、彼女にそう問われ、上条は答えに窮した。

思えばその時からわかっていたはずだ。

インデックス  
彼女が今、その地獄の淵に立っている、なんてことぐらい。

そしてその手を取らず、夏休みの補習補習を選択したのは上条だ。

置き忘れていったフードに気付いていながらも、探して届けようとせず「そのうち取りに戻って来るだろ」なんて安易な考えで放置していたのも上条だ。



その考え通り、取りに戻ってきたせいでインデックスが斬られた。これも上条のせいだ。なんせ彼女を守っていた修道服歩く教会を壊したのは他ならぬ上条だからだ。

つまり、全て上条当麻が巻き起こした『不幸』だ。

その『不幸』に一人の少女を巻き込んでしまった。ただそれだけのこと。

「っ」

ギリリと歯を食いしばり拳を固く握る上条に、氷室はそつとため息を吐く。

彼は自らを責めているようだが、決して彼が悪いわけではない。ただ本当に偶然に偶然が重なり『不幸』な結果が招かれたただけだ。けど、

(その『不幸』もアナタの仕組んだシナリオなのかしらね?)  
そつと窓の外へと目を向ける。

煌めく夜の建物達の向こうに見える『窓のないビル』。  
そこに居るとされるとある人物。

「……氷室？」

「え…あ、なに？」

「いや、なんか怖い顔して外を睨んでたけど、何かあったのか？」

「……なんでもないわ。それより上条君、これからどうするの？」

「どうって、そりゃ……」

インデックスを守る。それはもう決めたことだ。少なくとも彼女の身の安全が図れるまでは、上条当麻は逃げ出すつもりはない。

「そうじゃなくて、今夜はどこに泊まるのかって話。さすがに寮には帰れないでしょ？」

「あ……」

確かにそうだ。今や正体不明の火事。あのスタイルとかいう魔

術師の仕業だ　　により、消防車や警備員がこつた返している所だ。  
しかもちようど上条の部屋の前が<sup>戦場</sup>出火場所のため、帰ればいろいろと事情聴取に駆り出されそうである。

第一、一度襲撃を受けた場所にこのこと戻るほど上条はバカではないし神経も凶太くはない。

だがそうなると一転して、今度は上条当麻の行き場がなくなってしまう。何せ唯一の行き場たる自宅には帰れないのだから。

「まさしくホームレスね、今の上条君」

「……不幸だ」

「ま、ここで寝泊まりできるよう、掛け合ってあげるわ」

「ありがとうございます氷室様！」

さっきまで頭を抱えて蹲っていたのに、一瞬で自分の手を取り跪く上条の変わり身の早さに、氷室は若干頬を引き攣らせる。

「……どうせ私も泊まる気だしついでよ」

「へ？　氷室も？」

「当然でしょ？　おそらく今日はもう襲ってはこないと思うけど、だからと言って安心はできないもの。彼女が入院している間はこちらにいるつもりよ？」

「いや、そこまでしてもらわなくても……」

「しなくちゃ共同戦線を組んだ意味ないじゃない。私にとって彼女<sup>インデックス</sup>はあくまでついでなのよ？」

「……そうだったな」

建前上、氷室は病院とそこに努める関係者及び入院患者の保護のためとなっている以上、インデックスの事はついでだ。

もっとも入院患者のカテゴリにインデックスも含まれているため、どの道同じことなのだが。

「じゃ、そういうわけで……コレ」

「はい？」

おもむろに手渡されたものを見て上条は首を傾げる。

その手に置かれたのは髭面のおっさんが描かれた長方形の紙切れ

だ。

「あ、上条君には縁のない代物だった？」

「んなわけねーだろ！千円札ぐらい上条さんだって持ってるっつの！」

「そう？　じゃ、そのコンビニ行って夕飯買ってきて」

「パシリかよ！」

「だってしょうがないじゃない。こんなことになるなんて思ってもみなかったんだから、部屋に帰ってから食べるつもりだったんだし……」

「うつ……」

それを言われると上条に言い返すことはできない。

半ば強引に応急処置から病院への搬送・手術の手筈を整えたのは氷室だとはいえ、それで助かったのは紛れもない事実であり、上条にしてみれば（インデックスの）命の恩人でもある。

しかしそのせいで夕食を食べそびれているとなれば、やはりそれは上条のせいということになる。

「というわけで、カルボナーラと旬の彩サラダとデザートにプリンとクリームたつぷりロールケーキ……あ、それとスナック菓子を二、三袋とポッキーと、後ジュース類もお願い。病院で買うと割高だから、いっその事1・5ペットで3本くらい」

「って、ちょっと待て。明らかに千円じゃ足りないと思うのですが？」

「え？　足りない分は上条君が出してくれるんでしょ？」

「なんでだ！」

「誰のせいで夕食食べそびれたのでしょうか？」

「上条さんのせいではありません」

「ですよー。ってなわけで串焼き3本も追加ね。食べたいものがあつたらついでに買ってきていいから。無論、自腹で」

むしろ千円出すだけでも殊勝よねえー、と暢気にのたまう氷室を恨めしそうに睨みつけ、上条ははたと動きを止めた。

「あ、あー……氷室さん？」

「ん？ なに？ 500円だけで良いって？」

「いやいやそんなことは一言も言っていないし！ というかですね…

…」

「？」

ダラダラと汗を流しながらしどろもどろする上条の姿に、氷室は心底不思議そうに首を傾げる。

「実は今朝、上条さんはうっかりキャッシュカードを踏み碎いてしまいました、」

「いつもながらに見事なまでの不幸っぷりよね。いつそ感心するわ

……」

「で、今現在の手持ち残金が30円しかないのをごさいますっ！」

「……………」

(何だろう、悲しくないのに涙がでちゃう。だって不幸なもの……) 心底憐れんだ目で見られ、上条の瞳からポロリと雫が零れ落ちた。そんな上条に氷室はさらに高額紙幣を二枚追加で手渡し、その肩を優しく叩く。

「それで好きなもの買っていいわよ」

「その良心が心に痛い……」

「ちなみにトイチね」

「……って、利子取んのかよ！」

「10秒で1割」

「しかも暴利！ いまどき闇金の高利貸しだってもうちよつとマシだぞ！」

「いらぬならいいけど……キャッシュカードの再発行って確か最悪一週間ぐらいかからなかったっけ？ あと手続き費用も」

「ありがたく貸していただきます！」

背に腹は代えられない上条さんなのでした。

翌日の昼にはインデックスの容態も安定し、一般病棟へと移ることができた。

「にしても、ホント間一髪だったよなあ。助かったぜ、氷室。ほら、お前からも礼を言え」

「あ、うん。ありがとうね、サツキ」

「いいわよ。困ったときはお互い様でしょ？」

肩をすくめ、軽く笑って大したことではないと告げる。

ちなみに自己紹介はすでに済ませている。その際上条が未だインデックスに名を告げていなかったことが判明し、ひと悶着あったがそれも解決した後だ。

「うっん、そんなことないよ」

氷室の気遣いにインデックスは僅かに上気した顔を静かに振る。

熱があるのは体が体力の回復を凶っているため、特に問題があるわけではない。点滴と休息を続ければ数日後には普通の生活に戻るようになるだろうと、医師のお墨付きも出ている。

「サツキのおかげで誰にも迷惑をかけずに済んだから。普通の人に魔術を使わせるのはあまりよくないからね」

「そうなのか？」

「うん。魔導書つてのは、危ないんだよ。そこに書かれている『異常識なる常識』に『違法則違える法則』　そういう『違法則違う世界』って、善悪の前に『この世界』にとつては有害なの」

『違う世界』の知識を知った人間の脳は、それだけで破壊されてしまつとインデックスは言う。

コンピュータのOSに対応していないプログラムを無理矢理に走らせるようなモノなんだろうか？　と上条は頭の中で翻訳した。

一方で氷室は別の考えを抱いていた。

（『違法則違う世界』の知識……私の持つ『原作』もある意味それだけど……）

だとすれば、自身はすでに壊れているのだろうか？

少なくともその自覚はない。壊れていないとは決して言い難いが、それが『原作』知識のせいだとは呼べないと思う。

(でも、そう思っていないだけで、実際はどこか歪んでいるのかもね……)

自分の特殊性。『カウンターストップ』抑止力』という異常な能力。それらの根源が、もしかするとそこに由来するのだとすれば……。

(『この世界』にとっては有害、か……。そうかもしれないわね) 『氷室皐月』が居なくてもこの世界はキチンとまわり続ける。それこそ『原作』通りに突き進み、最後はなんだかんだでハッピーエンドが待っているのだらう。

未完のままこちらに来たためハッキリとは言えないが、でなければ読者が納得しないだらうし。

だとすれば、確かに『氷室皐月』は有毒な存在だ。

ハッピーエンド  
予定調和を打ち壊し、無用の混乱を招く、この世界の毒物。『お魔』イレギュラー

(だからと言って、遅きに失している。もう後戻りはできない) それに氷室だって望んでこの世界にやってきたわけじゃない。

どこの誰の仕業かも不明で、もしかすると誰のせいでもないのかもしれない。

単なる偶然。神の奇跡。

なのにそれを一方的に『有毒』だと言われるのは実に不愉快だ。

(なら毒を以て毒を制すればいいだけよ。毒は使い方次第で薬にもなるんだから……)

それを為すのが自分の責務で、存在価値。

そうでも思っていないければ、異世界トリップなんてやってられないと、一人密かに自嘲した。

「……私は宗教防壁で脳と心を守っているし、人間を越えようとす  
る魔術師は自らの常識げんかを超え、発狂たどりつくする事を望んでる。でも、宗教

観の薄い普通の日本人なら一度なら平気かもだけど二度目なら確実に、終わる」

つまり『死ぬ』と。

「ふ、ふうん……」上条は受けた衝撃を何とか表に出さないように、「何だよ、もったいねえ。折角なら誰かに錬金術とかやってもらおうかと思ってたのに。知ってんぞ錬金術。鉛を金に変えることができるんだろ？」

ちなみにその情報源は某女の子の錬金術師が主人公の道具調合R PGというのはもちろん内緒である。

「……、黄金アルス・マグナの変換はできるけど 今の素材で道具を用意するとこの国のお金だと……えっと、7兆円ぐらいかかるかも」

「……、超意味ねえ」

「残念ね上条君。そう簡単にわらしべ長者にはなれないってことよ。魂の抜け落ちた上条の呟きに、氷室も含み笑いを浮かべながら揶揄し、インデックスも弱々しく笑って、

「……だよ。たかが鉛を金に変換したって貴族を喜ばせるしかできないもんね」

「けど、あれ？ 冷静に考えてみたら、それって何なの？ どういう原理？ 鉛を金に換えるって、まさか鉛Pdと金Auの原子を組み替えるって、え？」

「よくわかんないけど、たかが14世紀の技術だよ？」

「ばっ……って事はアレか？ 原子配列変換って事でオツケーなの！？ 加速器使わなくても陽子崩壊起こせて馬鹿でかい原子炉なくても核融合を引き起こせるってか！？ ちょっと待て、そんな学園都市に七人しかいない超能力者レベル5だつてできるかどうか分かんねぞ！」

「あ、私できるけど？」

サラリと手を挙げた氷室の発言に、一瞬で場の空気が凍りついた。

「……………マジ？」

「やったことないけどね。要は原子核同士の『核力』と『クーロン力』の関係が肝だから、そのベクトルを『止め』て調整すれば理論上はたぶんできる、と思う」

「って、どこが攻撃力皆無だよ！ 思いつきり原爆レベルじゃねーか！」

「だから実際に試したことないし、やろうとも思わないわよ。ってか、どこで使えってのよ、そんな大破壊力オーバーキル」

「いや、けど……………」

理論上可能ってだけでも十分脅威だ。

今度から絶対に怒らせないようにしよう、と心に決める上条であった。

「と、とにかく、儀式で使う聖剣や魔杖を今の素材で代用するって言っても、限界があるんだよ？ ……特に神殺しの槍ロンギヌス、ヨセフの聖杯The Road、ゴルゴダの十字架なんていう神様関連の聖具なんかは1000年経っても代用不可能らしいんだか……………痛ッ……………」

興奮して一気に捲し立てようとしたインデックスは、二日酔いみたいにこめかみを抑えた。

「無理して興奮しちゃダメでしょ。病み上がりなんだから……………ほら、これ飲んで」

「う、うん……………」

妹を叱りつける姉の様な口調で注意する氷室の手から、インデックスは水の入ったコップを受け取り小さく肩を窄めながらチビチビと飲み干す。

「と、言いつつ悪いんだけど……………、いくつか聞きたいことがあるの。聞いてもいい？」

「う、うん。というか、サツキは私の事……………」

「うん。上条君からあらましは聞いたわ」

その答えにインデックスが目には剣呑な光を宿して、上条を睨み付



けた。

「とうま……」

「い、いや。だって俺一人じゃどうにもならないし、助けてもらった手前何にも話さないってのもな……」

「彼を責めないで上げて。私が無理矢理聞き出したようなものだし」

「でも、危ないんだよ？」

「知ってる」

「ホントにホントに危ないんだよ？ 殺されるかもしれないんだよ？」

「平気よ」

「なんで！ だって死ぬかもしれないんだよ！」

「そうね。でも私を殺せる『人間』はこの世界に“二人”しかいないから……」

「え……？」

何を言っているんだ、と目を丸くするインデックスに構わず、氷室はにこやかに微笑み、

「そして、私を殺していいのはこの世で“ただ一人だけ”よ」

その相手はずっと前からすでに決まっている。それは絶対に揺るがない決定事項だ。

氷室皐月はその人物以外に自分を殺させる気も殺される気もない。

「だから何の心配もいらないわ」

それが当然で、それが当たり前なのだと、何の疑問も気負いもなく答える氷室の姿に、残った二人はただ茫然とするしかなかった。

「だから聞かせて。貴女が抱えている事情を。貴女を取り巻く問題を。できる限りの力になりたいから……、ね？」

優しく、諭すように告げる氷室の姿に、インデックスは思わず『聖母』という単語を頭の中に思い浮かべた。

第04章 とある少女の諸々事情へサーカムスタンス (前書き)

ほぼ原作通り。

そして説明回のため、無駄に長い。

## 第04章 とある少女の諸々事情へサーカムスタンス

「とりあえず確認から……」

場が落ち着くの見計らって改めて氷室が話を切り出す。

「まず、貴女が10万3000冊もの魔導書を記憶しているってのは本当？」

「うん、ちゃんと10万3000冊記憶してるよ。でないとなんか『禁書目録』とは呼べないからね」

「ってことはエイボンの書、ソロモンの小さな鍵、無名祭祀書、妖蛆の秘密、食人祭祀書、金枝篇、エノクの書、断罪の書、ルルイエ異本、法の書、セラエノ断章、ナコト写本、野獣の咆哮の書、……なんて所も？」

「当然！ あ、でも死霊秘法は有名すぎるから亜流、偽書が多いくてどれが原本かわからないかも」

「……上条さんには最初から全部わかりません」

初っ端から置いてけぼりを喰らっている上条を無視し、二人の会話は進む。

「それが本当なら……貴女は完全記憶能力者ってことになるわね」  
「そう。だから私は『禁書目録』として選ばれたんだよ」

「あー、アイツもそんなこと言ってたけど、それってやっぱり珍しいのか？」

「当然よ。っていうか上条君、ちゃんと『記憶術』の授業聞いてたの、って、聞くまでもないか」

「悪かったな……どうせ、俺は氷室みたいに頭よくねーよ」  
「そういう問題じゃないんだけど……」

上条のふてくされた態度に氷室は頭痛を耐えるかのように顔を顰め、頭を押さえる。

「記憶には短期記憶と長期記憶って言うのがあってね、基本的にまずは短期記憶として見たり聞いたりしたことを覚えるのよ。でもこ

れはその名の通り『短期』的な記憶に過ぎないから普通はすぐに忘れてしまう。上条君が授業の内容を全く覚えていないのは、記憶の過程がこの短期記憶の段階で終わってるからね」

「……じゃあ、長期記憶ってのは？」

「こちらも文字通り『長期』に渡って継続する記憶の事よ。通常『記憶した』と呼ぶのはこつちね。記憶すべき事柄を何度も反復することで神経細胞の繋がりが強化され、短期記憶から長期記憶へと状態が移行するの。そして長期記憶となった記憶は基本的に失われることはないわ」

「そうなのか？ でも昔必死で覚えたことも、時間が経つと忘れてりするのだろ？」

「それは『忘れる』んじゃないくて『思い出せない』だけ。記憶の『想起』 『再生』か『再認』に問題が起きているからで、記憶自体はキチンと脳に刻まれたままよ」

「つまり再生機が壊れていても、記録装置にはキチンとデータが保存されている、って感じか」

「そういうこと。再生機を直してやればデータはきちんと再生されるでしょ？ だから『忘れてる』わけじゃないのよ」

「ちなみに上条君がテストで赤点取る原因は、長期記録に移行するために必要な反復が圧倒的に不足しているからよ。決して再生に問題があるわけじゃないから、勘違いしないように」

「ぐはっ！」  
痛いところをつかれた上条が胸元を抑えて呻くのを尻目に氷室は続ける。

「で、完全記憶能力者はこのプロセスを飛ばして一度で記憶を長期記憶に移行させるの」

「つまり物覚えがすごい、と」

「その代り無駄な情報も余さず覚えてしまつから一長一短ね。すぐに忘れてしまいたい記憶つても中にはあるでしょ？ それすら許

されず、全てを覚えてしまつのが完全記憶能力者よ」

「……………」

それはつまり『忘れる』ことができないということだ。

『忘れる』という行為は全て悪いというわけではない。

嫌な思い出や辛い記憶は『忘れる』ことで、以後の精神の安寧を保つことができるようになるのだ。

けど完全記憶能力者はそれが許されない。  
インテックス

許されないから、ずっと辛い記憶を抱えたまま苦しみ続けることになる。

「なんだよ、それ……………」

「ま、ある意味では能力者と似たような障害者だとも言えるわね」  
私たち

超能力も『誤った現実の認識』というある種の脳障害を利用して用いられる力だ。

そして学園都市における『開発』とは、その『障害』を人為的に誘発させることを意味している。

つまり能力者とは脳の障害者であり、学園都市はそんな障害者を量産する街だとも言える。

「えつと、よくわかんないけど、私は平気だよ。別にそれで困つたこととか全然ないし」

「でしようね。さっき上条君が言ったように記憶は時間が経つと自然と『想起』がし辛くなるように出来てるから。だから自然と『思い出せなく』なるものなのよ」

「じゃあ、別に『忘れる』ことが出来なくても問題はないんだな」  
「ええ」

人は『忘れる』ことはできなくても、『思い出さない』ようにすることはできる。

それを知って上条はホツと息を吐く。

もし昨夜の記憶を永遠に覚え続けているのなら、それは紛れもない『不幸』だと思っから。

けど、忘れることはできなくても、思い出せなくなるのなら問題ない。

彼女が辛い記憶のせいですつと苦しみ続けなくても済むのなら、それに越したことはない。

「けど、そもそもなんで『10万3000冊の魔導書』なんてもんを覚えてんだ？」

「それは私が『禁書目録』だからだよ」

「だから、それだよ。あのスタイルとか言うヤツは『悪い見本』だとかなんとか言ってたけど、正直その理由つてのがよくわかんねーんだけど……」

魔導書が危険なものだというのはこれまでの話でなんとなく上条にも理解はできてきた。

しかしだからと言って、わざわざそんなものを覚える必要がどうしてあるのかが理解できない。

たった一冊でも発狂するような代物を、10万3000冊も覚える、その必要性が上条には見当たらない。

その問いに対し、インデックスは少しだけ躊躇って、

「知りたい？」

そう、謝るように小さく問いかけた。

その静かな声は、いつでも明るいインデックスだからこそ、より一層の『決意』を思わせた。

正直な話、上条当麻にとってインデックスの事情なんてものはどうでもよかった。

どんな事情があるにせよ、上条当麻はインデックスという名の少女を見捨てる事なんてできはしないのだから。だから、とにかく『

敵』を倒してインデックスの身の安全さえ守れば、それでいい。わざわざ彼女の古傷を抉るような真似をする必要なんてない、と思っていたのに。

「私の抱えている事情、ホントに知りたい？」

もう一度問われ、上条はその場にいるもう一人の協力者へと視線を向けた。

その協力者は静かに頷き、無言で「任せる」と答えた。

だから上条当麻は再びインデックスへと視線を戻し、覚悟を決めるように、答えた。

「なんていうか、それじゃこっちが神父さんみたいだな」

なんていうか、本当に。 罪人の懺悔を聞く神父さんみたいに。

何でだと思う？ とインデックスは言った。

「十字教なんて元は一つなのに、カトリック プロテスタント旧教と新教、ローマ正教、ロシア成教、イギリス清教、ネストリウス派、アタナシウス派、グノーシス派。どうしてこんなに分かれちゃったんだと思う？」

「それは……」

いくら氷室に馬鹿だ馬鹿だと言われている上条でも、さすがにそこまで馬鹿じゃない。歴史の教科書を流し読みした程度の知識でも、その答えは容易に導き出せる。

だが、それを『本物』のインデックスの前で口に出すのは少し気が引けた。

そんな上条の心境を悟り、

「うん。それでいいんだよ」

インデックスは逆に笑った。

「宗教に政治を混ぜたから、だよ」

「厳密には完全に切り離さなかったから、と言った方がいいわね」  
インデックスの答えに氷室が注釈を加える。

「切り離す？」

「日本語で政治は別名『まつりごと』と呼ぶでしょ？　つまりは『お祭り』　五穀豊穡や地鎮のために神へと捧げる儀式。それを仕切ることが政治本来の役目なのよ」

「つまり元は一つだった、ってことか」

「ええ。信者の前シスターでこんなこと言うのもなんだけど……」氷室はちらりとインデックスを伺い、彼女が静かに頷いたのを見て、「昔の人は天災や飢饉と言った人の力ではどうにもならない現象に対し怖れを抱いた結果、それを『神様』の仕業だと結論付けたわけ。理由がわからないより、どんなに荒唐無稽であつても何らかの理由があつた方が人は安心できるからね」

未知への探求心は、同時に『未知』を『既知』とすることで、理解できない恐怖を払拭しようというある種の防衛本能に根差すものでもあるとも言える。

「そしてその理由に対し、今度は何らかの対処を試みた。天災を避けるために、神の怒りを鎮めるために、祈祷や供物、生贄なんてものを捧げるという手段だね。これが宗教の始まり」

生贄という言葉に上条は僅かに顔を顰めたが、そういったことが行われていたことは知っているため黙って先を促す。

「けど次第に人が増えてくると、祭りの規模も大きくなって皆がバラバラにやっていたんじゃないや收拾がなくなってくる。だからそれを取りまとめるリーダーが自ずと出来上がってきたのよ。村なら村長、街なら町長、そして国ともなれば」

「国王。つまり王様だね」

「そう。そしてリーダーとなった人物は祭りのみならず、その他の事柄にまで引つ張り出されるようになった。争いの仲裁や問題への対応、解決とかね」

これが政治の始まりね、と氷室は言い、

「一方で宗教は人心掌握の手段としての一面を見せ始めた。多くの人を取り纏めるには意識の統一が肝心だから。物事に対する規範ルールこれはよくて、これは悪い、なんていう尺度ルールを定め、その尺度を



破った者には不幸や災難、即ち『神の裁き』が下るとすれば、誰もそこから外れたくなくなるでしょ？」

「要は法律ってわけか」

「そ。でも必ずしも守られるわけじゃない。法があればそれを破る者が必ず現れる。故意か不慮かを問わずにね」

やむにやまれず法を犯す者が出るのは世の常だ。逆に進んで法を犯す者中にはいる。

「けど上条君じゃあるまいし『不幸』なんて普通は早々起きやしない。だから法を犯した者には現実に存在する誰かが罰を与えなければならぬ。それを与えるのは当然、纏め役であるリーダーの役割よ。でも、それって結局『悪事をなしても必ず神の裁きが起きるわけじゃない』と認めているようなものだから……」

「だから分離したのか」

「そういうこと。政治ってのは得てして綺麗事だけじゃ済まされなからね。時に悪事を以て事を納めなければならぬこともある。でも人心を取り纏めるのにそれじゃ誰もついてはこない。人は悪よりも善に魅かれる生き物だから。だから綺麗事だけを並べて成立する『存在』ってのが必要なのよ。それが教会やお寺なんかの宗教組織ってわけね」

「けど元は同じものだから……」

「裏では繋がったまま。政治の悪を宗教的な善で覆い隠し、民衆に政治の正当性を示し、また隠しきれない場合でもそこを抛り所にすることで人心の乖離を最小限に防ぐ。そうして政治を最小の被害で円滑に進めることができるシステムを、当時の人達は築いたわけ。けどいつしかそのシステムを利用して私利私欲に走る者が現れた。無論、それを否定する者もね」

「その結果、私達は分裂し、対立し、争い合って ついには同じ神様を信じる人さえ『敵』になって。私達は同じ神様を信じていながら、バラバラの道を歩く事になったんだよ」

それは人が人を支配する以上、必然的な事ではある。  
誰もが皆、博愛精神に溢れていれば、この世に争いなんてことは起きやしない。

けど現実には争いは起き、戦争が勃発し、それにより命を落とす者があつて、それに涙した者があつた者に対し恨みや憎しみを抱き、そしてまた争いが起きる。

歴史とは常にこの連鎖で成り立っている。そしてそれは今なお途切れることなく、世界各地で何時燃え上がるかも知れない火種として残されている状況だ。一部では現在進行形で燃え上がっている場所もある。

「……交流を失った私達は、それぞれが独自の進化を遂げて『個性』を手に入れたの。国の様子とか風土とか それぞれの事情に対応して、変化していったんだよ。ローマ正教は『世界の管理と運営』を、ロシア成教は『非現実オカルトの検閲と削除』を。そして私の属するイギリス清協は……」

インデックスは、そこで僅かに言葉を詰まらせた。

「イギリスは、魔術の国だから」それが苦い思い出のように、「……イギリス清教は魔女狩りや異端狩り、宗教裁判 そういつ『対魔術師』用の文化・技術が異常に発達したんだよ」

「そもそも魔術も神の奇跡も目に見える分には同じ非現実オカルトだからね。宗教家としてはそれを不当に扱う存在を野放しにはできなかつたでしょうし……」

自らの権威を守るため、神の奇跡を独占するため、理由は様々だろうが、無秩序に蔓延らせていては教会の存在意義に関わる事態となる。

必然的にそれらを排除する流れが作り出され、その過程で『対魔術師』用の文化・技術が瞬く間に発展していったのも当然と言えるだろう。

「イギリス清教にはね、特別な部署があるんだよ」

まるで自分の罪でも告白するかのようになり、インデックスはそつと言った。

「魔術師を討つために、魔術を調べ上げて対抗策を練る。必要悪の教会」ウエス

「ひつようあく？」

「そう。敵を知らなければ敵の攻撃を防げない。だけど、汚れた敵を理解すれば心が汚れ、汚れた敵に触れば体が汚れる。だから『汚れ』を一手に引き受ける必要悪の教会が生まれた。そしてその最たるものが……、」

「10万3000冊ってか」

「うん」インデックスは小さく頷き、「魔術つてのは式みたいなモノだから。上手に逆算すれば、相手の『攻撃』を中和させることもできるの。だから私は10万3000冊を叩き込まれた。……世界中の魔術を知れば、世界中の魔術を中和できるはずだから」

上条は自分の右手を見た。

役立たずと思っていた右手。不良の一人も倒せないし、テストの点も上がらなければ女の子にモテる訳でもない。ただ『異能の力』イマジンプレイカーを打ち消すことしか能のない右手の力。

だけど、少女はそこへ辿り着くために地獄を見続けてきた。

「けど、魔導書なんてヤバいモン、場所が分かかってんなら読まずに燃やしちゃえばいいじゃねーか。魔導書を読んで学ぶヤツがいる限り、魔術師は増え続けんだろ？」

「バカね。教科書テキストがなくても授業は可能でしょ？ 教師が口頭で内容を教えればいいだけなんだから。だからこの場合、『本』そのものに意味はないのよ」

「そう、重要なのは『中身』だから」

そういう人間は魔術師じゃなくて魔導師って言うだけだね、とインデックスは言う。

「それに読み取っただけでは魔術師とは呼べない。そこから自分なりにアレンジを加え、新たな魔術を生み出してこそその魔術師なんだよ」

「変異性の高い病原体ウイルスみたいなモノってことね」  
「なるほどな」

インフルエンザなんかを思い起こせば分かり易い。

インフルエンザの原因となるウイルスは変異しやすく、それでいて感染力が比較的高いのが特徴だ。

その歴史は古く、最古の記録は古代エジプト時代まで遡るとされている。

そして時々大流行しては多くの死者を生み出してきた。特に規模が大きいのは1918年頃に流行した通称『スペイン風邪』と呼ばれるインフルエンザだ。感染者6億人とも言われ、死亡者は4000万人を超えていると言われている。

その原因は先にも述べたとおり、その変異のし易さにある。

変異したウイルスはそれまでのものとは完全に別の存在となるため、過去に発症し生み出された抗体が役に立たない。そのため、免疫が十分に働かず、その強い毒性により、最悪死に至るケースが発生するのだ。

もちろんワクチンや治療薬も開発されてきたが、前者は効力が短期間でかつ培養に時間がかかるため、あらかじめ流行するであろう種類の予測と結果が異なれば十分な効果が認められず、後者はあくまでかかった後の対処法となるため場合によっては手遅れとなる事もある。

さらにそれに対応した新型も生まれ始め、結局のところイタチごっこことなっているのが現状だ。

それでいて新型が発生したからと言って過去のウイルスが絶滅するわけでもない。段々と種類が増え続けながらも、その根本的な解決策は今をもっても存在しないのだ。

かといって放置すれば死者の数が膨大に及ぶため無視すること  
できない。

だから常に新型の発生を監視し、予測し、研究し、早期に対処す  
ることで被害を最小限に収めるよう努力し続けるしかない。

インデックスの所属する必要悪の教会はそういった魔術ウィルスに対応す  
るための組織というわけだ。

そしてその研究に必要なサンプル集として生み出されたのが『禁  
ンデックス  
書目録』。

10万3000もの魔導書ウィルスを記憶させた研究資料。感染

「それに、魔導書はさつきも言った通り危険だから。写本コピーの処分  
さえ専門の異端審問官は両目を縫って脳の汚染を防ぐ。それでも  
5年は洗礼を受けないと『毒』は抜け切れないけど」

「だとすれば原典オリジンともなれば殆ど『死病』に近いわけね。筆者も大  
抵狂人とかそういう人物像で伝えられているし……」

とりわけ有名なのは狂える詩人アブドゥル・アルハザードだろう。  
彼は狂気の中で『死霊秘法ネクロノミコン』を書き記し、そのまま息絶えたと  
言われているくらいだ。

書く方も読む方も強烈な邪気と狂気の中に晒される。それが魔導  
書オリジナルの原典。

「そうだよ。だから世界に散らばる10万3000冊は、どうしよ  
うもないからこそ『封印』するしか道がなかったんだよ」

まるで売れ残った核兵器みたいだ、と上条は思った。

むしろまさしくその通りなのだろう。処分しようにもできず、誰  
にも触れられない場所に放置することしかできない厄介物シロモノ。

「チツ。それにしたって魔術ってな『能力者おれたち以外の普通の人間』な  
ら誰でも扱えるモンなんだろ？ だったらあつという間に世界中に  
広まっちゃうじゃねーか」

「それは平気。魔術結社の連中も、無闇に外へは持ち出さないから」

「？ 何でだよ？ 連中にしたら、戦力は多いに越した事ねーだろ？」

「だからこそ」、なの。鉄砲持つてる人がみんな友達だったら、戦争は起きないよね？」

魔術を知っているからと言って、その全員が仲間だと言うわけではない。

むしろその威力と危険性を理解しているからこそ、無闇に広めて『敵の魔術師』を作るわけにもいかない。

逆に言えば、広まってしまうと自身が窮地に立たされかねない代物でもあるというわけだ。

「つまりは、だ。連中はお前の頭ん中にある“爆弾”を手に入れたって訳なんだな」

「……うん。10万3000冊は、全て使えば世界の全てを例外なく捻じ曲げる事ができる。私達は、それを『魔神』って呼んでいるの」

“魔界の神”という意味ではなく、“魔術を極め、神の領域に足を踏み入れた人間”という意味での、『魔神』。

(……ふざけやがって)

上条は無意識の内に奥歯を噛み締めていた。

インデックスの様子を見れば分かる。彼女だって何も好き好んで10万3000冊を頭に叩き込んだ訳ではない。

彼女は少しでも魔術によって犠牲になる者を減らすために生きてきたっていうのに……。

その気持ちを逆手に取る魔術師も気に食わなければ、そんな彼女を『汚れ』と呼ぶ教会も気に食わなかった。

(どいつもこいつも人間をモノみたいに扱いやがって)

そしてインデックスはそんな人間ばかりをずっと見てきたはずなのに。

「……、「ごめんね」

それでもなお、他人の事ばかり考えている少女がインデックス一番気に食わなかった。

「つぎけんなよテメエ！」

上条は唐突に立ち上がると、パカンとインデックスのおでこを叩く。

「上条君！」

そんな突然の行動に、氷室も慌てて立ち上がるとインデックスを背後から抱きしめ、叩かれたおでこを摩りながら上条を睨み付ける。理不尽な悪意いかりから子供を守る母親のように。

しかし上条はそんな視線に臆すこともなく、逆に睨み返すように見返す。

「氷室は少し黙っててくれ」

「……………」

その有無を言わさぬ迫力にさすがの氷室も口を閉ざし、代わりにインデックスを抱き締める腕に力を込めた。

「そんな大事な話、何で今まで黙ってやがった」

「だって。信じてくれると思わなかったし、怖がらせたくなかったし、その…………あの、」

ほとんど泣き出しそうなインデックスの言葉はどんどん小さくなっていき、最後の方はほとんど聞こえなかった。それでも、

“嫌われなくなかったから”

という言葉を上条は確かに聞いてしまった。

「ぶ、ざけんなよ。ざっけんなよテメエ!!」

氷室の耳にブチリという幻聴が確かに届いた。

「ナメた事言いやがって、人を勝手に値踏みするんじゃねえ！ 教会の秘密？ 10万3000冊の魔導書？ 確かにスゲーな、とんでもねー話だったし聞いた今でも信じらんねえような荒唐無稽なお話だよ」

だけどな、と上条はそこで一拍置いて、

「たった、それだけなんだろう？」

その言葉にインデックスの両目が見開かれた。

彼女の身体は小刻みに震え、小さな唇が何かを紡ごうと必死に動くが、言葉は何も出てこない。

「見くびってんじゃねえ、たかだか10万3000冊を覚えた程度で気持ち悪いとか言うと思ってるのか！ 魔術師が向こうからやってきたらテメエを見捨ててさっさと逃げ出すとでも考えたのか？ ざっけんなよ。んな程度の覚悟ならハナからテメエを捨てたりしてねーんだよ！」

上条は口に出しながら、ようやく自分が何にイラついているのかを理解した。

悔しかったのだ。

上条は単にインデックスの役に立ちただけだ。何の見返りも求めず、ただこれ以上彼女が傷つくのを見たくなかった、それだけなのだ。

なのに、彼女は上条の身を庇おうとしても、決して上条に守ってもらおうとはしない。ただの一度さえ、彼女は「助けてほしい」と言った例がない。

頼ってほしいのに、頼られてはくれない。頼っていいのに、頼るうとしてくれない。

それは、とても悔しいことだ。



それは、とてもとても、悔しいことだった。

「……ちったあ俺を信用しやがれ。人を勝手に値踏みしてんじゃねーぞ」

たったそれだけの事なのだ。

例えばその右手に何の力がなくても、ただの一般人だったとしても、上条当麻には退く理由がない。

そんなもの、あるはずがない。

上条を突き動かすのは、インデックスを助けたい、と言う至極単純なただそれだけの理由からだから。

だから他に特別な理由とか、特殊な事情とか、そんなものは初めから必要ない。ただ助けたいと思ったから助ける。

人としてごく当たり前の感情と行動を、上条は思うままに取っているだけなのだ。

それは見方によつては単なる我俣に過ぎない。けど我俣だから、誰かに言われたからと言って退く理由にもならない。

上条当麻は己の我俣でインデックスを助ける。だからインデックスも遠慮なく、その我俣を受け入れればいいのだ。それが許されるのだ。

そんな上条の言葉にインデックスはしばらく呆けたように上条の顔を見上げていたが、

ふえ、と。いきなり、目元にじわりと涙が浮かんだ。

それは春の訪れとともに始まった雪解けのように、次から次へと溢れ出す。

嗚咽を隠すように唇を噛みしめ、インデックスは必死に涙をせき止めようとしていた。

しかし一度決壊した堰は元には戻らず、洪水となってベツトを濡らしていく。

おそらく上条の言葉だけが原因ではない。上条もそこまで自惚れてなどいない。

それはきつと、今の今まで溜め込んできたものが、上条の言葉を引き金として溢れ出してきただけなのだ。

そして今の今までこの程度の言葉すらかけてもらえなかったのか、と痛ましく思うとともに、それでもやっぱり上条は、ようやくインデックスの『弱さ』を見られたような気がして、少しだけ嬉しかった。

だが、やっぱり上条は女の子の涙を見ていつまでも喜んでいられるほど変態ではない。

というか、超気まずい。

何か言わなければ、ととっさに思考を働かせ やめた。

上条が何も言わずとも、インデックスを抱き締めていた氷室がその胸の中に彼女の顔を隠したからだ。

そのまま何も言わず、ただ黙って氷室はインデックスの背を撫で続ける。まるで赤子をあやす母親の様な笑みを浮かべながら。

そんな光景を前に、気の利かない言葉くたらないを投げかけるのは野暮というものだ。

病室に一人の少女のくぐもった嗚咽が響き渡る。

上条はそれが止むのをただ黙って見守り続けた。

## 第04章 とある少女の諸々事情へサーカムスタンス（後書き）

作中の説明は諸所を省きざつくばらん話として挙げています。

細かいところを突けば矛盾点も出るでしょうが、そのあたりはご容赦の程を。

次回からオリジナル展開が出始めて………くると思います。おそらく。

## 第05章 とある少年の多肢選択へマルチプルチョイス

「……なんか恥ずかしいね」

一通り泣き終えたインデックスは掛布団で赤くなった顔を半分隠しながら冗談めかきに呟いた。

目も少し腫れ赤くなっているが、それを指摘する者は誰もいない。

「あ、ごめんねサツキ。洋服、濡らしちゃって」

「平気よ。これぐらいならすぐに乾くわ」

夏だからね、と氷室は優しく微笑んでそつとインデックスの頭を撫でる。

「それより、もう少しだけ話を聞いてもいい？」

「あ、うん」

氷室の問いかけに姿勢を正したインデックスが小さく頷く。

「貴女を取り巻く状況は理解できたわ。10万3000冊の価値とそれを狙う者が居るってこともね」

「うん。だから何としてでも守らないと」

「殊勝な心がけね」

そう言つて氷室はもう一度インデックスの頭を撫でた。

それを猫みたいに擦ったそうにしながらも嫌がらずに受け入れるインデックス。

実に微笑ましい光景だと、上条は先ほどまでの緊迫した心が和らぐのを実感する。

( やっぱ女の子同士だからだよな…… )

男である上条ではこうはいかない。上条にできることと言えば、照れ隠しに彼女をからかつて怒らせ、感情を高ぶらせることで強引に忘れさせるぐらいだ。もちろんそれでも一応の効果はあるだろうが、その代償として上条には『不幸』が跳ね返ってくるだろう。お冠の少女から頭を丸かじりされるといふ貴重な体験貴重な体験と言つ形で。

「けど一つだけわからないことがあるの」

「なにが？ どこか説明が不十分なところでもあつたかな？」  
自らの不備を疑い首を傾げるインデックスに、氷室は静かに首を振る。

「いいえ、そうじゃない。貴女がイギリス清教の必要悪の教会ネセサリウスに所属していて、その組織内で重要な役割を担っているのは理解できてる。でも」

そこで氷室は一旦言葉を切り、インデックスを真正面から捉え、

「そんな貴女が、何故一人で日本にいるの？」

「あ、」  
氷室の問いに上条はようやく気付いた。

確かにおかしい。変だ。ありえない。

『インデックス禁書目録』なんてモン作った連中が、それをたつた一人イキで本拠地リスから遠く離れた島国ニホンに送り込むだろうか？

『インデックス禁書目録』を狙うヤツが居ると知っていて、一人にするだろうか？

するわけがない。普通ならば必ず護衛の一人や二人つけるはず。でなきゃ奪ってくださいと言っているようなものだ。

なのに、インデックスは一人で逃げ回っていた。魔術師の追っ手からたつた一人で逃げ回り、屋上から飛び降り、上条の部屋のベランダへと落つちて行き倒れるハメとなっていた。

だったら護衛はどうなった？ つけられているべき護衛は、一体どこで何をしているんだ？

少女が斬られ、『禁書目録』が奪われそうになってなお、その姿を見せないのはなんでだ？

「たぶんこの国いたんしゃに悪い魔術師が居て、それを狩るために来たんだと

思う」

「まあ、貴女の役割を考えればそうでしょうね。……けど一人で？」  
インデックスは10万3000冊の魔導書を抱えてはいるが、それを使うことはできないと言っていたのを上条は思い出す。

魔力を練ることができないかららしいが、そのせいで回復魔術は知っていても、それで自分の傷を癒すことすらできなかったのだ。

だから仕方なく、魔術を使うことができる人間　この学園都市で『開発』を受けていない数少ない『大人』である小萌先生を頼ろうとしたのだ。

そんなインデックスがいくら敵の魔術師の攻撃を中和する術を知っているからと言って、一人で倒すことなんてできるのだろうか？  
絶対防御力を持つ『歩く教会』があったからと言って、それは身を守るだけで攻撃にはなんの役にも立ちほしない。倒すためには攻撃する必要があり、そのための魔術をインデックスは使うことができない。

なら、使える人間と一緒に行動していなければおかしい。

それなのに、

「たぶんそうだと思う」

「……たぶん？」

曖昧な言葉に上条は思わず眉を顰める。

“たぶん”、“思う”。さっきからそんな推定を表す言葉ばかりが繰り返されている。

インデックスは完全記憶能力者だ。なら当然その事も覚えていなければおかしい。

いや、例えそんな能力を持っていなくても、普通は忘れない。忘れるわけがない。

だけどそれが分からないということは、つまり

「うん。1年前（一しちにきたとき）くらい前から、記憶がなくなっちゃってるからね」

インデックスは笑っていた。

完璧に、一切の曇りなく、笑っていた。

だから上条には、その裏にある焦りや辛さが見て取れた。

「最初に裏路地で目を覚ました時は、自分の事もわからなかった。

だけど、とにかく逃げなきゃって思った。昨日の晩御飯も思い出せ

ないのに、魔術師とか禁書目録インデックスとか必要悪の教会とか、そんな知識

ばっかりぐるぐる回ってて、本当に怖かった……」

「……じゃあ。どうして記憶を失くしちゃったのかも分かんねーって訳か」

うん、と小さく答えるインデックス。

上条だって心理学はサツパリわからないが、ゲームやドラマからの知識で記憶喪失の原因となるものぐらいは知っている。

記憶を失うほど頭にダメージを受けたか、心の方が耐えられない記憶を封印しているか　この何れかだ。

ちらりと視線を氷室へと向ける。

氷室は小さく首を振ってその視線に答えた。

(今は聞くな、ってことか……)

インデックスが辛い思いをしているのは氷室も理解しているのだろう。

だからこそ、今ここでそれを根掘り葉掘り聞き出して古傷を抉る様な真似をする必要はない。ただでさえ、ついさっきまでそんな惨いことをさせていたのだ。だからこれ以上は、少なくとも今するべきことではない。

氷室に頷き返し、胸の内で暴れ回る感情と一緒に上条は押し黙る。

「えっと、聞きたいのはそれだけ？」

「ええ、とりあえずは。そろそろお昼の時間だし、ずっと話しっぱなしで疲れたでしょ？　それまで少し休んでた方がいいわ」

「だな。あ、でも食事はあまり期待するなよ。病院食なんてどこも

マズイって相場が決まってるしな」

「むむ、失礼だとうま。出されたご飯はマズくてもちゃんと食べないと。でないとバチが当たるんだから。“もったいない”って、確かこの国の言葉だよな？」

すてきな言葉だよな、と笑うインデックスにもう一度氷室はその頭を撫でる。

「そうね。それに栄養バランスとか考えて作られているから、しっかり食べないとよくなるものもよくらないしね」

「だな。病人なんだから、食うもの食ってちゃんと寝てろ」

「病人じゃなくて怪我人だよ」

「どっちもたいして変わんねーだろーが」

上条も氷室にならってインデックスの頭をぐしゃぐしゃと撫でまわす。

その光景は第三者がこの場にいれば、病気の子供を見舞う両親のように映ったに違いない。

「じゃ、私は少し着替えてくるから……上条君、ちょっといい？」

「あ、ああ……。ちゃんと寝てろよ」

「むう、お子ちゃまじゃないんだからわかってるよ、そんなこと」

むくれるインデックスの姿に苦笑しつつ、上条と氷室は病室を後にする。

扉が閉まりインデックスが視界から消えると、氷室は徐に能力を行使し、周囲に防音の結界を築く。

それを見計らって上条は徐に口を開いた。

「知ってたのか……」

「記憶喪失の事？」

「ああ」

「可能性としてはね」

「なんでだ」



「気づいてると思うけど、彼女が一人つきりでいる状況なんて本来ならありえない」

「それはわかってる」

「けど現実として、彼女は一人きりで上条君以外に頼れる存在みかたがない。そして彼女自身それをおかしいとすら思っていないかった」

「だから、忘れている、と？」

「ええ。あくまでその可能性があるかも、ってレベルだったけどこれで確証が取れたわ」

「だからあえて問いかけたのだ。他に誰かいないのかと。彼女の味方となってくれる存在はいないのかと。」

「けど、そうだとすると少し事情が変わってくるわね」

「どうということだよ」

「あの子、思い出を綺麗サツパリ忘れてるのよ？ それでいて知識だけは残ってる。だからその知識だけを頼りに物事を判断してきたの」

それは普通の事ではないのだろうか。

上条は記憶を失ったことは『幸運』にも未だないが、知識だけが存在しないのであれば、それを判断基準として行動するしかない。そしてインデックスは訳も分からない状況のまま1年もの間逃げ回り続け、ようやく会えた最初の『知り合い』がたまたま、上条だっただけなのだ。

だから異常に嫌われるのを恐れ、傷つくのを恐れ、何が何でも守ろうとした。自分の身が危険にさらされる事を理解していながら、発信機の役割を持つ、未だ壊れていなかった『歩く教会』のフードを取りに戻ってきたのだ。

「くそつたれが……」

「気持ち分かる、とは言わないわ。途中から割り込んだ私には貴方とあの子の間にあるものを真に理解はできないから。でも、責める事だけはしないであげて」

「ああ。わかってるさ」

憤っているのはむしろ自分の方にだ。

そんなことも知らず、理解しようともせず、助けを必要としている事を理解していながら、そうしなかつた自分に対して憤っているのだ。

だからインデックスを責めるつもりなんて毛頭ない。必死になつて生きて、その必死さの中でも他人を気遣おうとしたインデックスを責める事なんてできる筈がない。そんな資格、上条にはない。

「それで？」

何とか気持ち落ち着け　それでも奥底では様々な感情が渦巻いている状態だが　、上条は先を促す。

「ええ。知識だけでしか判断できないあの子は、自分の持つ『禁書<sup>はく</sup>目録』を守らなくちゃ、という使命感だけで動いている。だから魔術師が近くにいれば当然逃げるっていう選択肢を選ぶわね」

「だろうな。そいつらが何のためにインデックスを必要としているのかはわかんねーけど、だからと言っておいそれと渡していいもんじやないからな」

「そうよ。でも、考えてみて。あの子に着けられていたはずの護衛つてのも、その魔術師つてやつなんじゃないの？」

「あー」

魔術師が狙つてきているのなら、魔術師を護衛としてつけるのは当然だろう。

けどインデックスには記憶がない。誰が護衛<sup>みかた</sup>で誰がそうじゃないかの判断が付けられない。

だから魔術師であるのなら、敵も味方も関係なく、須らく『禁書目録<sup>てき</sup>を狙う存在』として判断して逃げ出す。それが自分を守ってくれる存在<sup>みかた</sup>だとしても、だ。

「だから、あくまで可能性の話としてだけ……」そう氷室は念を押して、「そのステイルつて魔術師が彼女の護衛である可能性もあり得るかもしれないってことよ」

「なっ」

一瞬言葉を失った。しかし直後にそれを否定する。

「いや、ありえないだろう。もしそうならなんでインデックスを傷つける必要があるんだよ！」

味方ならそんなことする筈がない、と言う上条に、もう一度“可能性の話だ”と念を押し、

「今のあの子にとつて魔術師の語る言葉は自分を誑かす甘言に過ぎない。そう判断しないと、万が一本当に騙されていた場合、『禁書目録』を悪用されてしまうから」

だからあの子はひたすら逃げ続けるしかない、と氷室は続け、

「でも必要悪の教会側ネセサリウスからしてみれば、何が何でも彼女を『回収』しなくちゃならない。他の連中に奪われるわけにはいかないからね。記憶を失っているのなら尚更よ。だけど聞く耳を持たず逃げ回る相手を『回収』する術は、もう実力行使しか残されていないんじゃないかしら？」

絶対防御 『歩く教会』もあつたことだしね、と言って肩をすくめる。

確かに連中もインデックスの『歩く教会』が壊れていることを知らなかった。だから斬れるはずがないと思いついた可能性は大にある。

「けど、それでもあんなこととしていい理由にはならない。それにアイツは教会に行こうとしてたんだろ？ なら別に無理に回収しようとしなくて自然と戻って来るはずじゃねーか」

「そうね。でもそれを彼らが知らなかった、気づかなかったという可能性もある。それに万が一知っていたとしても、妨害する理由はあるわ」

「理由？」

「そう、……上条君。さっきの会話で教会にも色々種類があるって話は覚えてる？」

「ああ。さすがにそれぐらいは覚えてるさ」

そう答えて、そういえば、と上条は昨日の朝にしたインデックスとの会話を思い出す。別の教会に行っても門前払いを受けるとい

話だ。

だが、もし彼女が『禁書目録』だと相手側の教会が知ったら、門前払いでなく率先して保護しようとするかもしれない。それだけの価値がインデックスにはあるのだから。

しかしインデックスはキッチンと自ら所属するイギリス清教の教会を探していた。

ならまかり間違って違い教会の戸を叩くことはないだろうから、やはり力づくで阻止する理由にはならない。

そう言つと、氷室は「そうじゃない」と否定し、肩を竦め、

「十字教は元は一つだったのに分裂してバラバラになった。けどそれってもう終わった過去の事なのかしら？」

「それは……」

「うん。教会の歴史とかそういうのに限らず、人が作る組織つてのには必ず派閥つてものが存在するわ。権力の椅子は数が限られているからね。そして彼女は『禁書目録』、イギリス清教の切り札とも呼べる存在。そんな彼女を手中に収めれば、組織内での発言力、権力は揺るぎようのない、絶大なものになるんじゃないしら？」

「つまり、インデックスを手に入れてのし上がるうとしてるヤツが居るってことか？」

だとすれば上条にも理解できる。

インデックスの向かった教会の人間が自分の派閥の人間だとは限らないわけだから、確実に自分の手に入れるために強硬手段を取るのもわかる。

けど、だからと言って力づくでというのは許される行為ではないし、インデックスをそんな風に使おうとすること自体、上条には許せない行為だ。

「あくまで可能性の話よ。ステイルとかいう魔術師が組織とは無関係に個人的理由で動いている可能性もあるし、単に『禁書目録』に書かれた魔術を手に入れる事自体が目的の可能性もある。もちろん、敵対組織の人間である可能性もね」

けどね、と氷室は上条を真正面から捉え見つめる。

強い意志を感じさせる瞳に、上条は知れず唾を飲み込んだ。

「あの子は『禁書目録』よ。イギリス清教の切り札。その価値は彼女が『禁書目録』であり続ける限り失われることはないの」

つまり、

「彼女を手にした人物が魔術だけでなく、権力まで手に入れる事ができるって事実は永遠に付きまとうのよ」

「な、それじゃあ、インデックスがイギリスに帰れたとしても……」

「政争の具として使われる可能性は決して消えない。そして私たちもあの子自身も、誰が本当の味方なのかを判断することができない。いいえ、本当は味方なんて誰一人いない可能性すらある」

記憶を失ったインデックスに、組織内で誰が親しかったかと言う記憶は存在しない。いや、たとえ覚えていたとしても裏では利用しようとしていたのかもしれない。

そもそも『禁書目録』なんてふざけたシステムを考えるような連中だ。善人であるはずがない。

「ちつくしよお！」

ゴン、と近くの壁を叩く。

「なんだよそりゃ、ざっけんなよ！」

例え魔術師の手からインデックスを守り切れたとしても、守りきった先でまた別の誰かの思惑に踊らされることになる。

それじゃあ救われない。どうあってもインデックスは救われない。落ち着きなさい」

「これが落ち着けるかよ！ だってそんなのアリかよ。そんな事あっていいのかよ！」

「仕方ないわ」

「仕方ない？」

思わず上条は氷室の胸ぐらを掴みあげる。

「仕方ないってなんだよ！ 氷室はインデックスがそういう目にあつてもいいっていうのかよ！」

「よくないわよ」

「だったら！」

「だったら、私たちに何ができるといふの？ ネセザリウス 必要悪の教会の内情

なんて知らない、その存在だって今さっき知ったばかりの私たちが、その組織に対して何ができるっていうの？」

「　　っ！」

そう、何もできない。氷室も上条もただの高校生だ。能力者ではあるが、政治的な権力なんて何一つ持ち合わせていない、ただの一般人に過ぎない。

そんな自分たちが、異国の、それも常識すら異なる世界の、その最たる暗部組織に干渉することなんてできるわけがない。

それを氷室はわかっていて、わかっているからこそ「仕方ない」と割り切るしかないと理解している。“理解せざるを得ない”ことを理解している。

（そうだ、わかってる。わかっているさ、氷室だって辛いつてことぐらい……）

先の病室での光景を見れば、氷室がインデックスの事をどうでもいいと思っているなんて思える筈がない。

怒りにまかせ怒鳴りつけた上条を睨み付け、彼女を守るように抱き締めていた氷室が、インデックスをどう思っているかなど確かめるまでもないことだ。

それなのに

「くっそ　　」

自分の浅はかさに苛立ち、とりあえず氷室から手を離す。

それでもやりきれない気持ちを吐き出すために、無意味に壁を殴りつけた。

「なら、どうすればいいってんだよ。どうすればインデックスは救

われるんだよ……」

敵を倒せばいいと思っていた。敵を倒してインデックスを教会に連れて行けばいいと、そう思っていた。

それはよくあるRPGの勇者ヒーローのように、魔王を倒して捕らわれのお姫様をお城に返してハッピーエンド、そういう類の話だと上条当麻は思っていた。信じていた。

けど現実はそのじゃない。エンディングの後にもお話は当然のように続いていく。

お姫様は魔王に汚されていたとか言われて迫害を受けるかもしれない。魔物に荒らされ下がった国力を回復するためにクソツタレな隣国の王子と無理やり結婚をさせられてしまつかもしれない。

けどそれらに対し勇者にできることは何一つない。勇者の役割は魔王を倒してお姫様をお城に返すところまでだ。それさえ済んでしまえば用無しの穀潰しでしかない。

だから、上条当麻マサキにはインデックスを真に救うことはできない。これはそういうお話。

「一つだけ、方法がないこともないわ」

「ホントかつ！」

絶望に瀕した上条は、その一言に縋るように氷室へと食らいついた。

否、真実縋っていた。縋るよりほかになかった。

「教えてくれ氷室！ その方法つてのを。インデックスを救うために俺は何をすればいい。何が俺にできる。何でもする、なんだってやってやる！ だから」

「その言葉、嘘じゃない？ 本当に後悔しない？」

「するかよ！ アイツがこれ以上辛い思いをしなくて済むってんなら、なんだっていい。俺にできる事なら全部してやるさ！」

「そう」

上条の言葉に僅かに視線を伏せた氷室は、そのままゆつくりと顔を上げ、

「なら、上条君があの子を守りなさい。魔術師から、教会から、あの子に価値を見出す世界中の全ての存在から、あの子を一生かけて守り抜きなさい」

「  
上条の口からは何の言葉が出なかった。理解が追い付かなかったからだ。」

それを理解していてなお、氷室は続ける。

「言つとくけど、生半可な事じゃないから。誰が敵か味方かもわからない。いいえ、全てを敵とみなし排除するの。個人も組織も関係ない。立ち寄ったレストランで隣の席に座る人物も、街ですれ違っただけの御老人でも、その全て敵と判断して近寄ってくるなら須らく排除するの」

「すべて……」

「そうよ。あの子に価値を求めるのは何も魔術側の人間だけじゃない。この学園都市の科学者だって、異なる法則、異なる常識の存在を知れば、研究しようとする輩は当然いるでしょうね。そんなヤツがインデックスが10万3000冊の原典オリジナルスベル魔術を所持していると知れば、寄って集って手に入れようとするわよ？」

「そうだ。『開発』なんて面倒な事をしなくても能力者と同等、もしくはそれ以上の力を使える術があると知れば興味を持たないわけがない。」

「そんな奴からもインデックスは10万3000冊を守っているのに、そんな奴らに協力を申し出ることはできない。」

「学園都市は頼れない。他の教会や魔術結社も当然ダメ。だったら国か？ どの国？ その国がインデックスを利用しようとしないとどうして言いきれる？」



なら組織は頼れない。けど相手は組織だ。上条<sup>トウマ</sup>当麻一人の力で抗えるほど容易い相手ではない。いや、無理だ。不可能だ。

だったら組織に属さない誰かに協力を求めるか？ けどその人物が本当にインデックスを守ろうとしてくれるのか？ そいつもインデックスの10万3000冊を狙っていないとどうやって判断できる？

ああ、と上条は理解した。

氷室が問うた覚悟の意味を。憐れみの籠った視線の意味も。

ああ、と上条は理解した。

インデックスの現状を。今までどんな気持ちで彼女が逃げ回っていたのかを。

私と一緒に地獄の底までついてきてくれる？

(ああ、確かに地獄だよ。地獄の底だよ、ここは)

インデックスが居たのは地獄の淵なんかじゃなかった。インデックスのいる場所が常に地獄の底 中心なのだ。

だから彼女を守りたいのなら、助けていなら、自分もそこについていく必要があったのだ。ついて行って、ずっと付き従う必要があったのだ。

(はは、なんだ。アイツ最初からわかってたんじゃねーか)

それを上条は正しく理解していなかっただけ。気安く考え、安易な気持ちで“助けてい”なんて思っていただけだ。

“助ける”という言葉の意味を正しく理解しないまま、英雄<sup>ヒーロー</sup>を気取ろうとしていただけなのだ。

「言っておくけど、一番いい答えは今すぐイギリス清教に連絡を取って彼女を迎えに来てもらう事よ」

「ああ……」

「それで来たのがステイルとかいう魔術師でも、他の組織の人間であつてもよ？」

「っ、っ、」

「それが嫌ならロンドンまで一緒について行って、教会に直接引き渡せばいいわ。それですべてが終わる。あの子との関係もそこで切れる」

「……………」

「それでも嫌だというのなら、自分の一生をあの子に捧げなさい。世界中を敵に回して逃げ続けなさい。私はそこまで付き合えないから」

「……………ああ、わかつてる」

わかつている。もともと巻き込まれただけの氷室に、それ以上を求める義理はない。

インデックスの怪我を直してもらった。完全に回復するまで一緒に守ってくれると言ってくれた。

それだけでもう十分だ。それだけでもう十分すぎるのだ。

だから、そこから先は上条の問題だ。氷室にこれ以上迷惑をかけるわけにはいかない。

「決めるのは貴方よ。他の誰でもない、貴方が納得のいく答えを、貴方自身の意思で決めなさい」

「ああ……………」

「猶予はあるわ。退院は術後の経過観察と検査を含めて4日後。それまでは現状維持でも十分。私も約束通りあの子を守るわ。でも退院すれば、あの子はこれまで通り教会に保護してもらうために行動するでしょうね」

だから4日がリミットなのだ。

上条がどう思おうと、それを過ぎたらインデックスは教会へと赴く。そして上条の思いなど無視して、教会のために働くことになるだろう。それがただ利用されているだけなのだとしても、そこが彼

女がいるべき本来の場所なのだから。

「それと今の話はあの子にはしないように。すでにわかっているかもしれないけど、無用な心配をさせる必要もないでしょ？ それにそれで上条君が悩んでいるのだと知れば怪我しているのも構わずに姿を消すと思うから、あの子」

「だろうな……」

上条を巻き込みたくないうえに、自身の危険を差し置いてフードを取りに戻ってきたような人間だ。

自分のせいで上条が悩んでいると知れば、姿を消す。上条が悩む必要などどこにもないのだと言って。

「精々悩みなさい。悩んで、答えを出しなさい」

そう言うとき氷室は上条に背を向けて廊下の向こうへと歩き始める。そして数歩進んだところで、ふと立ち止まり顔だけを上条へと向けた。

「ああ、最後にこれだけは言っておくわ」

そう告げて、その一言が言い終わると躊躇うことなく氷室はその場から立ち去った。

その姿を見届けた上条は、もう一度だけ壁を殴りつける。

「わかってる。わかってんだよ、そんなことは」

氷室が最後に告げた言葉が上条の胸に深く突き刺さる。

全部思い通りになるなんて、そんな都合のいいことこの世には存在しないのよ。

「それでも……」

上条当麻には認められない。

インデックスを救う方法がこの世に存在しない、だなんて。

## 第06章 とある病室での異文化交流へカルチャースクール（前書き）

徐々に閲覧数が増えてきてうれしい限りです。

感想、ご指摘随時受付中です。

率直な感想をいただけるとやる気がアップするかもしれません。

また話中に出てくる魔術理論に関しては若干の独自解釈を行っております。

原作とは少し設定が異なるかもしれませんが、この物語の中ではそういうことだと理解していただけたらと思います。

## 第06章 とある病室での異文化交流へカルチャースクール

あれから3日が経過した。

インデックスの容態はすこぶる良好で、傷は完全に塞がり跡も残らないという。

体調もほとんど回復し、明日の検査結果次第では即日退院が可能だと、あのカエル顔の医師が言っていた。

それは大変喜ばしいことで、素直に喜ぶべきことだ。  
なのに、

「……………はあ」

真夏の炎天下の中、上条当麻は深いため息を吐いた。

インデックスの怪我が治ることは確かにうれしい。それは紛れもなく本心だ。

だが明日が退院と言うことは、上条にとっては今日が制限時間タイムリミットの最終日と言うことになる。

答えはまだ出ていない。いや、出る筈がないことは初めからわかっていたことだ。

どんな答えを選んだところでインデックスは救われない。

彼女の望みどおりに教会へ送り届けても、待っているのは道具として利用される運命だ。

かといって氷室の提案通りインデックスに近づく全てを上条が排除し続けても、それはそれでインデックスに罪悪感を抱かせることとなり、結局苦しませることになる。そして最後は上条が潰され、彼女をもつと悲しませるのだろう。

「けど、答えはださないと」

無論、上条が何もせずとも答えは出る。インデックスが退院すれば彼女は教会の門を叩き保護を求め、そしてイギリスへと帰ってい

くだろう。そして道具としての人生を生きることとなる。

しかしそれは上条の納得いく結果ではない。結果的にそうなったというだけで、上条が納得のいく答えとはなりえない。

それが正しい姿で、一番いい結果なのは上条とて理解できている。けど許せない、させたくない、と思っている以上、上条にとってその結果は受け入れがたい結末だ。

けど受け入れなくてはならない。受け入れるために、氷室はわざわざ悪役を買って出てくれたのだから。

正直な話、あの場でその事実を話す必要はまるでなかった。

話さずに、当初の予定通り敵を倒してインデックスを教会に連れて行けば万事解決、と言うことにしておいてくれていれば少なくとも上条は疑う事すらなく終わりを迎えていたはずだ。

けどあえて氷室はそれを言った。

それは後になって上条がその事実ことに気付き、後悔しないようにするため。

同じ悔やむのならば、取り返しのつかない状況に陥ってからではなく、まだ選択の余地が残されている内に悩んで悩んで、悩み抜いた上に出した答えのもと悔やんだ方がいい。そういう気遣いのもとに言ったのだ、氷室は。

それで上条から恨まれることも覚悟の上で、自分だって納得しきれていないだろうに、それでも一番ショックを受けるであろう上条を気遣って、話したのだ。

時間が経ち、冷静さを取り戻してからそれに気づいた上条は、本当に敵わないと思った。

頭がいいとかそういう話ではなく、人としての器が違う。

上条ではたとえその事実にまで辿り着けたとしても、同じ行動を取れるかどうかわからない。自分の事で精一杯で他人を気遣う余裕なんてきつとないに違いないと思う。

それをあの短時間で見抜き、決断し、実行するなんて上条には無理だ。

だから上条当麻は答えを出さなければならぬ。

氷室のためにも、上条自身のためにも。

後悔しないための、後悔の道を選ばなければならぬ。

気付けば病院の玄関へと辿り着いていた。

ここからインデックスの病室まではさほど時間はかからない。

答えはもちろん出てはいない。

しかしだからと言ってそれに悩む姿をインデックスの前に晒すわけにもいかない。

インデックスも自分より他人を優先して気遣う類の人間だ。上条がそんな姿を見せていれば、自分のせいだとすぐに察して無茶をするに決まっている。

上条がこうして外に追いやられたのもそれが原因だ。

氷室に、その辛気臭い顔を出直してきなさい、と暗に言われ、口実として買い出しを託されたのだ。

上条自身もできる限り表に出さないように心掛けていたのだが、やはり制限時間リミットが迫るにつれ、気付かないうちに剥がれてきていたのだろう。

「しつかりしないと」

気遣いばかりかけられている自身の不甲斐なさに喝を入れ、上条は病院の廊下を突き進む。

昼間と言うこともあってか多くの人が診察に訪れ、入院患者も多数行き来している。無論彼らの面倒を見る医師や看護師も忙しなく動き回っている。

美人な看護師さんのミニスカにちょっと目を奪われつつも、上条はこの3日間の事を思い返す。

昼の間は氷室と上条が出来る限りインデックスの病室で待機し、彼女の暇つぶし相手を務めつつ魔術師の襲撃に備えていた。

さすがに連中も人気の多い昼間の病院で襲つてはこないだろうと上条は思っていたのだが、インデックス曰く魔術には『人払い』というものがあるらしい。

文字通りその効果の及ぶ範囲内へと人が踏み込めないようにするものらしいが、強制的な排除ではなく無意識のうちにそちらを避けるようにする類なのだとか。薄気味悪い場所には近寄りたくない、つといった感じなのかと上条は解釈している。おそらくステイルと戦った際に寮に誰もいなかったも、その『人払い』が仕掛けられていたからだろう。

しかしそうだとすれば昼間でも意図的に人目のつかない空間を作れるということになる。故に警戒を怠るわけにはいかなかった。

夜は交代制で仮眠を取り、昼間どうしても用事がある際はどちらか一方が必ずその場に残る事にしていった。

ちなみに夏休みの補習に関しては氷室が小萌先生に直談判をし、インデックスが退院するまでは保留という事にしてくれた。もっともなくなつたわけではないため、事が済めば再び補習地獄へと戻らなければならぬのだが。

そしてそれが功を奏したのかはわからないがこの3日間、幸いなことに魔術師たちの襲撃はなかった。

氷室曰く「相手もインデックスが死ぬような事態は避けたいはず」との事で、今は彼女の回復を優先しあえて控えているのだろうとこの事だ。

確かにインデックスが死んでしまえば、彼女が記憶している10万3000冊は失われる事になるわけだから、その予想は間違つてはいないと上条も思う。

しかしもうほとんど回復し退院を間近にした現状、いつ襲われて



もおかしくはない。

病室へと辿り着き、一度深呼吸をし、気持ちを切り替える。

中からは少女二人の話し声が聞こえ、未だインデックスが無事であることに少しだけ安堵する。

そしてそんな少女の無事な姿をその目も確認するため上条は徐にドアを開け、

「じゃあただルーンを書いただけじゃ、魔術は発動しないのね」

「うん。オリジナルならともかく、ただの一般人が単に刻んだだけじゃ意味がないの。ルーンって普通にアクセサリーとかお守りとか、そういつたのに刻まれてお土産として売られてるでしょ？ そういつたものまで無闇矢鱈と力を発揮したんじゃ、危ないよね」

「でも、それだと市販のお守りには効果がないってこと？」

「ううん、そういうわけでもないんだよ。厳密には効果はあるけど大した力は持ってないの。サツキは偶像理論って知ってる？」

「類似したもの同士は互いに影響を及ぼしあう」、いわゆる類感呪術でしょ？」

「そう、教会の屋根にある十字架はゴルゴダの十字架って訳じゃないけど、それでも同じ力は宿ってる。もちろんオリジナルゴルゴダの十字架には遠く及ばないけどね。でも力の種類は同じ。同じ性質、同じ状態、同じ能力を秘めてるの。そしてオリジナルにより近いものなら、それだけ力も強くなるんだよ。これを私たちは『テレスマ天使の力』って呼んでるんだけど」

「確かその言葉の起源は黄金Sの夜明け団だったかしら？ クロウリーが所属してたっていう」

「近代西洋魔術の雛型となった魔術結社だね。今は分裂して『黄金系』と呼ばれる複数の結社が存在するだけだよ」

「つまり出力が足りないから書いただけでは意味が無いってことね。

……でもルーンを使った魔術は実在する」

「それは魔術師が足りない分の力を自らの魔力で補ってるからだよ。だから魔力を練る方法を知らない一般人が刻んでも意味はないけど、魔力を練って注ぐことができる魔術師なら、キッチンとその力を発揮させることができるの。もちろん刻むルーンもオリジナルに限りなく近くすれば、その分だけ必要とする魔力も減るし、同じ魔力の量ならその分威力は増す事になる」

「つまり魔力つてのは増強剤ブースターつて訳ね」

ふむふむと頷きながら氷室がノートに何かを書き込んでいく。

そんな様子を病室の入り口で間抜け顔を晒しながら茫然と見つめる上条の心境は、

(……さっぱりわからん)

何について話しているのかは理解できるが、そこで話されている内容となるとサッパリ理解不能だった。

元々無能力レベル0である以前に上条は学力においても『不良』である。にもかかわらず科学とは根本的な理論やら常識の異なる魔術を理解することは宇宙人と会話するに等しい難題だ。

まさしく異文化コミュニケーション。英語すらまともに離せない上条にそれを求めるのは無理があるというものだ。

とはいえ、全くの不利解であるわけにもいかない。

敵はそんな『違法則』『異常識』を用いる魔術師であり、それに対抗するには彼らの理論をある程度理解する必要がある。

例えば先の戦闘でステイルの放った炎弾を打ち消すことはできたが、その後に展開された炎の巨人インケンティウスは消すことが出来なかった。理由はそれそのものが本体ではなかったからだ。

イマジンプレイカー  
幻想殺しはあらゆる異能を打ち消すことができるが、触れた対象に現在働いている分の力にしか効果はない。

ステイルの『炎の巨人インケンティウス』は、周囲にばら撒かれた『刻印ルーン』によつ

て映し出された映像の様なものである。そのため映写機である『刻印』を排除しない限り、映像は何度でも蘇える。

あの時はインデックスがそれを指摘し、スプリングラーを発動させてインクを洗い流すという荒業で解決できたが、向こうも今度はそれに対する対処をして襲ってくるだろう。

そして毎回インデックスからの助言が得られるとは限らない。ならば事前に出来得る限りの情報を入手し、その場で自ら判断できるようにしておくのは必要な事だ。

(それは分かってたんだけど……、正直ついていけません)

10万3000冊  
世界中の魔術を記憶しているインデックスはもとより、オカルトの蒐集が趣味だと公言する氷室もかなり博識で、そんな両者による魔術談義は専門用語が続々と飛び交う内容はかなりのハイレベル仕様となっている。そこに魔術初心者の上条が加わったところで、用語一つ一つに注釈を入れてもらわないとサッパリ理解できない。

言うなれば今の上条は若者の会話についていけない御老人、と言った所だ。

妙な疎外感を感じ、思わず黄昏てしまう。

「あ、とうま」

「遅いわよ、上条君。缶ジュース一本に何時間かけてるのよ」

魔術談義がひと段落したことで上条の帰還に気付いた二人が上条へと振り返る。

そして相も変わらず手厳しい氷室の一言に上条はガックリと肩を落とした。

「おまえなあ……、こちららご所望の品を手に入れるため炎天下の中を延々彷徨うハメになつてたんだぞ。てか『宇治抹茶珈琲ガラナ風味』ってなんだよ。お茶なのか？ コーヒーなのか？ それともガラナ？」

「お茶でありコーヒーなのよ。しかもガラナ成分によりカフェイン

増量で徹夜したいときのお供に最適よ。微糖だからカロリーも控えめだし」

「いや、そういう問題か？」

どこからどう見てもゲテモノかはたまたネタとしか思えない飲み物だが、学園都市ではよくありがちな商品でもある。

学園都市は超能力の研究が基本ではあるものの、それに引きずられるように様々な分野での研究もおこなわれている、いわば『実験都市』でもある。

無数に存在する大学や研究所などで作られた『商品』の『実地テスト』として、街の至る所に生ゴミの自動処理オートメーションや自律走行する警備ロボットなどの『実験品』が溢れている。それは当然食品の分野にも及び、コンビニや自販機などにもそういった『実験商品』が立ち並び訳だが、

「訳だが、やはり学生達は同じお金を払って買っているんだという事実が何故偉い人には分からないのかと問い詰めた」

「普通の商品も売ってるんだから、嫌ならそっちを買えばいいだけじゃない？ てか、ぬるっ!？」

上条の手から買い物袋を引つたくり中を漁っていた氷室が、取り出した缶ジュースを前に眉を顰めた。

「しゃーねーだろ。この猛暑の中を歩いてればそりゃ温くもなるって」

「っっていうか、コレ受付横の自販機に置いてあったでしょ」

「売り切れてたんだよ。だからわざわざ外まで買いに行つたんだろーが」

希望を聞いた際に「間違ったら殺すから」とまで言われたら、さすがの上条も「ありませんでした」と引き下がるわけにもいかない。

あの時の氷室の目はマジだった。マジで殺す気だった。缶ジュース一本でどうしてそこまで思いもしたが、そんな理由で殺されてもしたら笑い話にもならないので、上条は真夏の猛暑日記録を絶賛更新中の外への買い出しを決断したのだ。

「……って、何故に飽きた目でみられてるのでせう?」

「飽きてるのよ、マリアナ海溝の底から」

「そこまで!?!」

「なかつたのならないって言いに来ればいいだけでしょ」

「いや、殺すとか言っただけじゃあ?」

「とうま。サツキは『間違ったら』って言ってたけど『なかつたら』とは一言も言っただけよ?」

「あー……」

言われてみればその通り。氷室の剣幕にビビッて早とちりした上条の落ち度である。

「温いと不味いのよね、コレ」

「んじゃ、飲まなきゃいいだろうに」

「飲むために買ってこさせたんだから、飲まないわけにもいかないでしょ」

そういうと氷室は徐に袋の中の缶を全て空中へと放り投げた。放り投げられた缶はそのままベットのの上には落ちずに、空中で停止する。

「うわあ! とうまととうま、何も無いのに缶ジュースが浮かんでるよ!」

「あー、それは氷室の能力だ。物を止める事ができるんだとよ」

「へえー」

まるで遊園地のショーを見ている子供のように目をキラキラさせたインデックスがしきりに手を伸ばし、宙に浮かんだ缶の周囲を探っている。

10万3000冊の魔導書とそこに記述された無数の魔術を知りながら、超能力による現象に目を輝かせる様は何とも不思議な感じだ。

(けど、逆の立場だったら俺も同じような反応をするかもな)

もっとも最初に魔術を目にした時 『歩く教会』の件は別として は、そんな事考えている暇もなかったため、そうはならな

つたが、もう少し落ち着いていた場面で、もうちょっと穏便な魔術を目にしていたら、純粹に驚き感動できただろうと思う。

そんなインデックスの反応にも興味を示さず、一人何かを観察するかのよう周囲を窺っていた氷室は、「うん」と一つ頷くと、「上条君。ちよつとその窓開けてくれる?」

「窓? ってか何する気だよ」

冷房の利いた病室の窓を開ければ当然のことながら外の熱気が入り込んで、室温は高くなる。

ついさっきまで茹だるような熱気にさらされていた上条にしてみれば、もう少しこの涼しさを味わっていたところなのだが、

「念の為よ」

「だから何の」

上条の問いに対し、氷室はニヤリと笑みを浮かべると指を一本突き立てる。

「おバカな上条君に問題です。物体の状態変化はなぜ起きるのでしようか?」

「いや、いくらなんでもそれはバカにし過ぎだろ。それぐらいわかるつーの。温度変化によるものだろ?」

今日日、小学生だって答えられる問題だ。高校生である上条がいくらバカだからと言って、そこまでバカにされると実に不愉快だ。

「じゃあ、何故温度が変化すると状態が変化するのでしょうか?」

「そりゃ……」

問題のレベルが上がったが、それでもまだ答えられるレベルだ。

上条は少しだけ時間を取り、考えをまとめると、

「……温度が上昇すると分子の運動が激しくなるから、だろ。分子同士の引き合う力よりそれが大きくなると分子が散らばるから気体になる。逆に温度が下がると引き合う力の方が強くなるから集まって固体になる」

「正解。つまり温度の変化は分子の運動量に比例するって事ね」

「まあ、そうだな。それが?」

再度上条が問いかけると、氷室はさらに笑みを濃くし、

「では最後の質問。分子の運動量が0になるとどうなるでしょう？」

「どうってそりゃ……」

分子は動かなくなるわけだから、それに比例する温度は当然下がる。それも最低値まで。

(……、最低値?)

氷室の能力は『物体に働くベクトルの量を0』にするという力だ。つまり分子の運動量を0にすることができる。

そして分子の運動量が0となった物体はその温度が最低値にまで下がってしまう。

つまり0度。ただし単位は<sup>セリシウス</sup>ではなく<sup>ケルビン</sup>K。

「ねえ、上条君。“絶対零度”って知ってる？」

「ちよ、ま」

止める間もなく、氷室はパチリと指を鳴らすと、その瞬間病室の中が真っ白な煙で覆われた。

「ひゃい!? な、なにこれ、冷たい!？」

冷たいというよりむしろ寒い。外では絶賛猛暑日記録更新中なのに、ここだけ南極大陸のど真ん中にいるみたいに寒い。

(真夏に凍死なんて冗談じゃねーぞ!?)

上条は慌てて窓に噛り付き、開け放つ。

同時に物凄い勢いで突風が舞い込み、上条が盛大に吹き飛ばされたが、程なくして部屋中を覆っていた冷気の煙は綺麗サツパリ姿を消した。

「何しやがる、氷室!」

「少しは涼しくなつたんじゃない?」

「涼しい通り越して凍死するわ!」

「だから窓を開けてって言ったんじゃない」

「事前に説明しろよ、そういうことは!」

「でも頭は冷えたでしょ？」

「……………」

上条は言葉を返すことが出来なかった。

どうやら病室の前で切り替えたつもりだったが、切り替えきれていなかったらしい。

そんな上条の頭を完全に切り替えさせるために、氷室はこんな茶番にしては命がけだった様な気もするが　　を演じたようだ。

ニヤニヤと笑う氷室に眉を顰めながらも、“また” 氣遣われたことに不甲斐なさを感じ、上条はガシガシと頭を掻く。

「それより、ハイ」

そう言っただけで投げられた缶ジュースを受取るうとし、

「って、ちよつと待て！」

直前で手にするのを止めた。

ギリギリのところまで止めたため、缶はそのまま地面へと落ちるかと思われたが、才覚ある氷室によって即座に『止められた』ため事なきを得ている。

それよりも、だ。

「“絶対零度”<sup>そんなせいでん</sup>に触れたら手が張り付いて取れなくなるだろーが！」

「あんだバカあ？」

心底飽きた、と言った風に半眼を投げかけ、氷室は手に持った『宇治抹茶珈琲ガラナ風味 - 微糖 -』を開け口に含む。

「張り付くはずなら、そもそも投げられないでしょうに」

「あ……………」

氷室が投げ渡したということは、それが張り付いてしまうほどの低温では無いという事だ。

例に指先でつついてみると、確かに冷えてはいるが張り付くことはない。

「うわあ、ホントに冷たくなってる。ねえサツキ。これもサツキの超能力なの？」

「厳密にはその応用ね。さっきの話は聞いてたわよね？」



「うん。温度はブンシっていうのに比例するってやつだよな」

「ええ。分子っていうのは物体を構成する粒子の様なものよ。物体はその粒子が集まってできてるの」

「わかる？ と科学側の事情に疎いインデックスに講義を開始する氷室。」

その生徒であるインデックスが頷くのを確認し、

「温度 熱って言うのは隣り合う2つのもの間に差があると、自然と両者を平均の値にして保とうとする性質があるのよ。だから温かい部屋の中に氷の塊を置いておくと、温度の高い空気が低い氷に熱を分け与え、氷は温度が上がって溶ける。逆に室温は熱を奪われるから低くなるの。さつき部屋の温度が下がったのはそのせいよ」

「つまりサツキが超能力で氷を作ったから、部屋が冷たくなったってこと？」

「そう。そして上条君の懸念はこの缶自体を氷にしたと思ったから。でもそれだと飲めなくなっちゃうでしょ？ だから私が凍らせたのは缶ジュースじゃなくて、その周囲の空気の方。それもほんの少しだけ凍らせたのよ」

「それであんな風に真っ白になっちゃうの？」

「なっちゃうの。私の能力は『運動量を0にする』ことしかできないから、これで物を凍らせると必ず - 273 . 15 にしかならないのよ。この温度は“これ以上下がることのできない温度”だから、大量の熱がそこに奪われて、周囲の空気に含まれる水蒸気が一気に氷になっちゃうの」

「つまりさつきの煙は、煙じゃなくて霧なんだね」

「そういうこと」

「すごいね、と素直に感心し、手にした『練乳紅茶 - 糖分控えめ -』を口にするインデックス。しかし直後に「うえ〜」と強烈な甘さに舌を出して音を上げた。さすがに糖分控えめと謳っていても練乳の甘さは緩和しきれていなかったらしい。

一方上条も手に取った緑茶（こちらはごく普通の緑茶だ）を口に

しながら、ふと感じた疑問を投げかけた。

「確かにすごいけど、なんだか面倒臭くないか、ソレ」

「面倒よ、すごく面倒。ベクトル量を自由に操ればこんな手間か  
けずとも冷やすことはできるのに、0にしかできないから“周囲の  
気体をクツシユンにして低下度合いを調節する”なんて回りくどい  
方法を取らないといけないのよ」

その結果が、真夏の凍死未遂というのはさすがに笑えない話だが。

「氷室もいろいろ苦労してるんだな」

「そうね。できればこんな能力じゃなく、普通に発火能力とか念動  
力とかでよかつたのに」

「何の能力が発現するかなんて、『開発』してみなきゃわかんねー  
もんね」

「上条君の場合は、天然でしょ？」

「ああ、生まれつきみたいだな。もつともそうだと知ったのは学園  
都市に来てからだけど」

異能の力にしか反応しないため、その力が存在しない一般の生活  
の中ではまず気付くことのない能力である。むしろ、能力自体を持  
っている事すら気づくことができない類だ。

「原石、ね」

「げんせき？」

再び見知らぬ言葉を聞き、インデックスが首を傾げた。

「天然ものの超能力者の事よ。学園都市では薬物とか電気刺激とか  
で人為的に『開発』することで能力者を“作り出し”てるけど、世  
の中にはそんな方法に頼らずとも稀に超能力を手にする人がいるの  
よ。それを私たちは『原石』と呼ぶの」

「もつとも“居るだろう”ってレベルの噂だけだな」

「あら、原石はちゃんと存在するわよ？」

「そうなのか？」

「ええ。でなきゃそもそも超能力の研究なんて行われる筈がないじ  
ゃない。『開発』の方法はその研究の過程で生み出されたものなん

だし」

「言われてみれば……」

「それに上条君自身がそうなんだから、それを否定するってのもどうかと思うわよ?」

「あー、そういわれてもそんな実感とかあんなないしな……」

「まあ、そうでしょうけど……」

そう締めくくると、病室内に束の間の静寂が訪れる。

特に誰かが何かを話そうとするわけでもなく、ただ全員が自らの手にする缶ジュースに口をつけチビチビと飲み干していく。

それが不思議と気まずくなく、むしろ穏やかとも呼べる心地よさを感じるぐらいだ。

『宇治抹茶珈琲ガラナ風味 - 微糖 -』なんてゲテモノを平然と飲む氷室。

『練乳紅茶 - 糖分控えめ -』の過激な甘さに舌を出しつつも飲むのをやめようとしないインデックス。

そんな有り触れた平和な光景を見ると、このまま時が止まればいいのに、とそんな埒もないことを上条は感慨深く思ってしまう。

だがそれが叶わぬ望みであることなどわかりきっている。時を止めるなんてこと超能力でも、おそらく魔術だって不可能だ。神様だってそんな事できないかもしれない。

だからいつかは終わりが来る。

そしてその“いつか”はもうすぐそこまで迫っているのだ。

( 出さないとな、答え…… )

終わりが来る、その前に

第07章 とある女医と秘密診療へシークレットサージェリー（前書き）

今回、作りこみが甘いです。

もしかすると後で改訂するかもしれません。

## 第07章 とある女医と秘密診療へシークレットサージエリー

ゆっくりと流れる穏やかな時間。

時折、何気ない雑談を交わし、笑みをこぼし合い、度々黙っては  
その余韻を噛みしめるように味わう。

しかし時は確実に流れるもの。そして始まりがあれば、必ず終わ  
りは訪れる。

平穩を打ち破ったのは、病室の扉を叩く小さなノック音だった。

「……………」  
即座に上条と氷室は視線を交わし合い、事前に取り決めていた互  
いの役割を確認する。

上条がインデックスに悟られないよう注意しながら彼女の傍に寄  
り添い、氷室がそれとなく入り口近くに陣取る。

この配置の理由は上条よりも氷室の方が防御力に優れているから  
だ。

『カウンターストップ  
抑止力』には氷室自身が自らの意思で能動的に使用する他に、  
無意識の内に常時発動している『リアクティブ・アーマー  
反応停止』と呼ぶ自動防衛能力が  
ある。

これは全身の体表面上を覆う保護膜と言う形で展開され、自身の  
身に害を及ぼすとされるベクトルがその膜に触れた際、それらを自  
動で感知し、接触と同時に即時『停止』させるといったものだ。

これにより何時如何なる状況で奇襲を受けても、氷室は傷一つ負  
うことなく相手の攻撃から身を守ることができる。

もつとも『魔術』という異能の力にどれほど効果があるのかは氷  
室自身も未知数だ。しかしそれでも右手にしか効果のない上条より  
かはかなりマシなはずである。

その上条にしてみれば女性を矢面に立たせるのに強い抵抗がある。男は女を守るもの、という前時代的な考えではないが、それでも女性の後ろで安全を貪っているのは、あまりいい気がしない。

だから当初は「自分が前に出る」と頑なに主張していたのだが、氷室から『リアクティブ・アーマー反応停止』の話聞き、その後の罵詈雑言のドS発言込み説得によりあえなく陥落。現状戦力で一番理想的かつ合理的な配置という事で、納得させられていた。

無論、それで完全に納得したわけではない。

だからいつでも飛び出せるよう態勢を整え、もしも場合の備えを怠らない。

上条からしてみれば氷室は自分達の事情に巻き込んでしまった人間だ。いくら本人がそれを望んでいるとはいえ、それを理由に全てを託す事など出来ようはずもない。

いざとなれば文字通りその身を盾にしても、上条は氷室とインデックス、この二人を守るつもりでいる。

互いに準備が整ったことを確認し、扉の向こうで待つ来訪者に向けて氷室が口を開いた。

「……どうぞ」

氷室の応答にゆっくりと扉が開かれる。

病室の中に緊張が走る。

上条はその脳裏にあの夜戦った赤髪の魔術を思い描き、さらに腰を落とす。

氷室は即座に能力を発動できるよう扉付近の座標を演算領域に捉え、警戒を強める。

そしてついに扉が完全に開かれ

「あ、いたいた　　皋月ちゃん、こんなところにいたのねえ」

「……………はい？」

現れたのは一人の女性だった。

底抜けに明るい表情を更に笑顔で輝かせ、呑気に手を振ってまでいる。

白衣を着ていることからこの病院の関係者　　おそらくは女医

だと思われるが、なぜかその下にきているのはショッキングピンクのナース服。しかも胸元が大きく開き、スカート丈が極端に短いぶつちやけるとコスプレ衣装っぽい格好だ。それも風俗仕様の。

「えっと、……………誰？」

「この病院に勤める医師」

「医者あ！？」

「……………一応」

一応が付くんだな、と上条は小さく呟きながらも、なんとなくその理由を察していた。

何しろ第一印象からして軽い。軽すぎる。

医者という雰囲気はまるでなし。貫録もなし。

そもそもまずもって病院に務めていること自体が間違っていると感じるハイテンションっぷりだ。

とても医者だとは思えない。見た目の恰好通り、裏通りのネオン街に務めていると言われた方がまだ納得が行く。

もしこれで本当は、インデックスを狙ってきた刺客まじゅつしなんです、なんて言われたら、上条は魔術師という存在のあり方を根本的に考え直さなければならなかっただろう。

それぐらい目の前の女性はいろいろと場違いな存在だった。

「ってか、また何でそんな恰好を……………」

心底疲れたといった様子で氷室が肩を落としガツクリと頂垂れる。  
「えー、可愛くない？」

「可愛い可愛くないの問題じゃありません。歳考えろ、四十路」  
「四十路っ!？」

氷室の痛烈なツツコミの内容に思わず声をあげる上条。

格好もそうだが、見た目からしてよくて20代前半、ともすれば  
10代後半にも見える容姿だ。とても倍近くあるとは思えない。

「正確には42」

「いやん 歳は言わないでえ」

自身の体を抱き締め身をくねらせる御年42歳独身女性現在彼氏  
募集中の姿に、頭痛を覚えた氷室は頭を抱え眉間に深い皺を刻んだ。  
「大体ナース服って……」

「えー、看護婦さんってえ、女の子の夢じゃない？」

「夢じゃない! ってか、あんた科学者だろ、本業はっ!」

「それは元。今は悩める患者さんの心を癒す、白衣の精神科医よん  
」

「白衣で何故ピンクナース!？」

「だってそれは……」

「それは？」

「女の子だもん」

「黙れ、行き遅れ」

「いやん 今日の臯月ちゃんも相変わらず絶好調に冷たい」

「……………もう、いいです」

(ひ、氷室が言い負かされてるっ!?)

よるよると力なく壁にもたれ込んだ氷室の姿に、上条の目が驚愕  
に見開かれる。

「ってか、ホント誰なんだよ、この人？」

「夢野由夢先生。私の主治医よ。遺憾ながら……」

「あらん？」

上条の問いかけに、ようやくその存在に気付いた夢乃が徐に上条



に近寄り、上から下までを舐め回すような視線を向けた。

「ははあん……、ふーん……、なるほどなるほど……」

一通り観察を終えた夢乃はニヤリと意味ありげな表情を浮かべると、くるりと氷室へと振り返り、

「さっ、つき、ちゃん」

「物凄く聞きたくないですけど……、なんででしょう？」

「もう、こういうことは真っ先に言ってくれないと　いやはやよ　うやく皐月ちゃんにも春が来たのねえ」

「とりあえず軽く絶対零度を体感してみますか？　今年の夏は猛暑らしいですから、ぜひとも院内の省エネエコ活動にご協力していただきたいのですが。っーか、しゃがれ」

「いやん　そんなことされたら私……、」

うふふふ、と夢乃は怪しげな笑みを浮かべ

「……濡れちゃいそう」

「いや、濡れる前に凍るから！　むしろ死ぬからソレ！　てか、もしかして濡れるってソッチの意味！？」

「ねえ、とうま。ソッチってどっち？」

「18歳未満わいせつは聞いちゃいけませんっ！」

インデックスの素朴な疑問に、即座に反応した上条が青少年に対する情操教育的有害物質から彼女の身を守らんとその両耳を塞ぎ、視線を余所へと強制的に向けて遮断する。

それに対し氷室は心の中で「グッジョブ！」と親指を立てたのは言うまでもない。

「で、何の用ですか、夢乃センセ？　遊びに来ただけなら即刻帰ってくださいませんか？　てか、仕事しろ」

「あらやだ。そのし・ご・とで来たのよ」

「仕事？」

もはやツッコむ気すら起きない氷室は、夢乃の馬鹿げた言い回しを華麗にスルーしつつ問い返す。

「そうよ。皐月ちゃん、忘れてるでしょ」

「何を？」

「し・ん・さ・つ」

「あ……」

しまった、と頭を抱えた氷室に、夢乃が「ほらね」とばかりに笑顔で氷室を責めたてる。

「もう、ダメじゃない。臯月ちゃんはいろいろとデリケートな患者さんなんだから、そう言ったことはちゃんとしてくれないと……」

「……すみません」

先ほどとは打って変わって医者らしい口調と指摘に、自らの落ち度を認める氷室は素直に頭を下げた。

「キチンとベットの用意をして、いつ来るかいつ来るかって楽しみにしてたのにく。全然来ない上に、ナースの子に聞けば病院には来てるっていうじゃない？」

だから探しに来たのだと。

「あー、いろいろと立て込んだもので……」

「まあ、彼氏が出来たのならそっちを優先したい気持ちは分かるけど……」

「か、彼氏い！？」

「そこに幼女が一人いる状況で、どうしてそういう答えが出るのか、一度脳ミソ診てもらった方がいいんじゃないですか？ むしろいっそ冷凍してみますか、完全に？」

辛辣な言葉とともに夢乃をギロリと睨み付けるつけるも、向けられた夢乃はニヤニヤと嫌らしい笑みを浮かべるだけ。

ちなみに『幼女』と呼ばれたインデックスは上条の隔離政策によりなおも耳を塞がれている状態のため聞き取ることが出来ず、氷室の暴言に非難の声を上げることはなかった。

「とにかく、後で伺いますから、とつとと失せていただけませんか？ てか、失せる」

「もう、そんな冷たい態度ばかり取っていると彼氏に飽きられちゃうわよ？」

「先生には物理的にも冷たくしてあげましょうか？」

わなわなと右手を掲げ睨み付ける氷室にも動じず、上条に「こな子だけどよろしくね」と何故か投げキッスのオマケまでして、夢乃は病室を後にした。

「……………はあゝ」

夢乃の姿が見えなくなると同時に、深いため息をついた氷室が汚れるのも構わず床へと座り込む。

「え、えっと……………」

「何も言わないで、お願いだから」

「お、おう」

相当な精神的ダメージを負ったらしい氷室の様子に、上条は彼女の新たな一面を垣間見た気がした。

しばらくして立ち直った氷室は、ヤケクソ気味に残った『宇治抹茶珈琲』を飲み干し、

「ああ、もう！」

鬱憤を晴らすかのように吠えた。

「あの人は、アレスえなければ優秀なのにつ！」

どうして私の周りにはあんな変人しかいないのか、と愚痴をこぼす。

「あー、氷室？ 結局なんだったんだ、今の」

「別に大したことじゃないわよ。ただの予後観察ついでの定期健診よ」

「それって前に言ってた大怪我ってヤツのか？」

「そ、」

「けどあの人が、精神科医って……………」

精神科医、つまり脳や心に関する病気を専門に扱う医者だということだ。

とてもそうは見えなかったが、嘘を言っているようにも見えなかったし、言う理由もないだろう。

となると氷室には、そういう病に関する何かを患っているという事になる。

「まあ、少しばかり脳にも影響があったからね。殆ど問題はないんだけど、一応念の為、ってやつよ。大げさな理由なんてないから、心配しなくても大丈夫よ」

「そう、なのか？」

「そうなの」

キツパリと言い切る氷室だが、上条は何故だかその言葉を完全に信用できなかった。

目の前にいる少女が、脳や心に障害を負っているようには見ええない。

しかしあの女医（？）は氷室の事を『デリケートな患者』と呼んでいた。

もしかすると、目には見えないところに何か重大な問題を抱えているのではないか、そういう風にも見て取れる。

この数日間、一緒にいることでより深く氷室皐月と言う少女を理解し始めた上条だが、それでも彼女に関する謎は多い。

むしろ付き合えば付き合うほど、よく分からない部分が増えていく。それはまるで掴む事の出来ない蜃気楼のような存在だと、そんな錯覚をふいに覚える事があるのだ。

もしかすると彼女は、その奥に何か重大な秘密を隠しているのかもしれない。

鈍いと揶揄される上条だが、この件に関しては理由もなく確証に近い、そんな予感を抱いていた。

だとすれば、自分に何ができるのかわからないが、力になりたい、と上条はそう思う。

インデックスを助けてもらったことに始まり、こうして共に彼女の護衛をし、上条を気遣って憎まれ役まで買って出てくれたクラスメイト。思えば自分は貰ってばかりで、何一つ彼女に返すことが出

来ていない。

そのことに気付き、上条は自分の至らなさを再度自覚する。

(といっても、無理に聞き出すのもなあ……………)

隠したいと思っているものを無理に暴き出すのもそれはそれで失礼な話だ。少なくとも上条と氷室の間にはそこまでするほどの縁も義理も築かれていない。

(だけど、もし、氷室が助けを求めてきたら……………)

その時は迷うことなく力になる。

受けた恩を返すために。増えすぎた借りを返すために。

いや、そんなものがなくとも上条当麻は必ず力を貸すだろう。それが上条当麻と言う人間の在り様だから。

「それより、いい加減解放してあげたら？」

「……………へ？」

心の中で並々ならぬ決意を固めていた上条に、氷室の何気ない指摘が飛ぶ。

「そのままだと寝てないのに寝違えるわよ、彼女」

「うわあ！ すまん、インデックス！」

氷室に指摘され、あわてて上条はインデックスの拘束を解く。

「うう〜、とうまヒドイ」

「いや、ホントすまん。けどあの場合はああするしかなかったというか、ああするのが正解と言うか……………」

しどろもどろに言い訳を募る上条に対し、インデックスはその柔らかな頬をめいっぱい膨らませ、

「私、お子ちゃまじゃないもん」

「いや、だから……………」

「お子ちゃまじゃないもん」

「えっと……………インデックスさん？」

「立派なレディだもん」

「……………レディ？」

上条の頭上に思わず疑問符が飛ぶ。  
同時にその脳裏にはこれまでのインデックスの行動がハイビジョ  
ンで再生される。

ベランダで布団よろしく干されたまま、行き倒れを主張するイン  
デックス。

差し出されたヤキソバパンを上条の腕ごと丸呑みするインデッ  
クス。

とりあえず部屋に連れ込めば笑顔で脅迫しつつ食事を要求するイ  
ンデックス。

腐りかけの野菜で作った炒め物を拙い箸の持ち方でかつ込むイン  
デックス。

裸を見られ、合宿時の蚊のごとく全身くまなく上条に噛み付くイ  
ンデックス。

「……………ぶっ」

「その含み笑いはなにな、とうま？」

「いやいや、実に見事な淑女レディっぷりだと思ひまして」

「……………そこはかとなく馬鹿にしてるね」

「いえいえ、そんなことは……………」

「……………そこはかとなく馬鹿にしてるね」

「……………」

伏し目がちでプルプルとし始めたインデックスに、上条の脳内警  
報がけたたましいサイレンを鳴らし始める（もう遅い）。

これはヤバいと、助けを求め氷室の方を向くと、

「今のは上条君が悪い」

助けはなかった。まあ、わかりきっていたことだが。

「とうま……………」

「え、えっと……………、弁解の余地は？」

「……………」

ですよー。

「許可します。インデックス、やっちゃいなさい！」

「了解ーっ！」

「不幸だあー！」

「じゃ、ちょっと行ってくるから、インデックスの事よろしくね」  
そう言っつてインデックスに頭を丸齧りされている上条を残し、氷室は病室を後にする。

そのまま勝手知ったる病院内を奥へ奥へと進んで行き、辿り着いたのは関係者ですら滅多に立ち入ることのない、病院の一番奥まった場所にある、とある一室。

「来たわね」

部屋へと入ると、コンソールを弄りながら夢乃が歓迎の声を上げる。

明らかに先ほどの病室とは態度の異なる夢乃だが、そんな事は気にせず氷室は部屋の中へと入って行く。

「とりあえずこれに着替えて。その間にいくつか質問させてもらうから」

「どうせいつもと同じ質問でしょ？」

暗に回答を拒否しつつ、氷室は手渡された貫頭衣へと着替え始める。

「そういうわけにもいかないのよ。デリケートな作業なんだから、今の貴女の状態を正確に知っておく必要があるの。わかってるでしょ？」

「はいはい」

気のない返事を返しながら、ブラウスのボタンを外し脱ぎ捨て、近くに置いてあった籠の中へと放り投げる。

その様子を見ながら夢乃は両手にカルテとペンを持ち、

「じゃあ、一つ目の質問。体調の方はどう？」

「問題なし」

「睡眠は？ちゃんと取れてる？」

「ぼちぼち」

「ちなみに昨日は？」

「三時間ぐらい、かな？少し徹夜してたから」

「そう……。食事はちゃんととってるわよね」

「もちろん」

「前回から何か変わったことは……って、彼氏が」

最後まで語る前に氷室が投げつけたスカートによって強制的に口をふさがれた。

「次」

「……もう、ちよつとした冗談ジョークじゃない」

「つ、ぎ！」

「はいはい」

やれやれといった具合に肩を竦め、投げつけられたスカートを籠の中へと放り、夢乃は質問を再開する。

「最近特に気になる事とか、何か変化が起きたとかは？」

「絶賛トラブル進行中。内容はプライベート保護のため話せません」

「また厄介事に首を突っ込んでるのね……」

はあ、と深々とため息を吐く夢乃を心外だとばかりに氷室は睨み付ける。

「失礼ね。それだと私が率先して厄介事トラブルに関わってるみたいじゃない」

「違うの？」

「違う！　ってか、誰のせいだと……」

「……そうね。ごめんなさい」

「……いいわ。今のは私の失言だったから」

小さく謝罪して、氷室は貫頭衣を被り、その裾を正す。

とそこで一旦手を止め、



「……やっぱり下着も？」

「当然」

「はあ……」

ため息をつきつつ、いそいそとブラとショーツを脱ぎ捨てた。

「出来たわよ」

「じゃあ、そのベッドに横になって」

「了解」

指示されたベッドに横たわり、備え付けられたヘッドギアを手に取り取る。

そして、そのままいつも通り被ろうとし、

「あ、ちよつと待って」

「……なに？」

いつもならこのまま『診察』が始まる予定なのだが、今日に限って夢乃は何かを言いたげに氷室を見ていた。

「なんなのよ、一体」

「うん。えっと、その……最後の質問、がまだだったから……」

「最後？」

いつも通りの質問は、先ほどので全部終わっているはずだ。

「ええ。最後にひとつだけ聞かせて」

「だから、何を？」

急かす氷室に、夢乃は一瞬だけ躊躇ったのち、

「ねえ、皐月ちゃん」

ゆっくりと、何かを恐れるように、だが同時に何かを期待するような目で、氷室を見つめ、

「私の事、恨んでる？」

「何をいまさら」

即答だった。

「愚問ね。質問にすらならない」

「そうね……」

氷室の答えに何かをゆっくりと噛みしめるかのように呟き、夢乃はベット脇の装置へと手を伸ばす。

「どうしたのよ一体」

そんないつもと少し違う夢乃の様子に、氷室は眉を顰める。

「別に大したことじゃないのよ。ただ、なんとなく聞いてみたかっただけ」

そう呟きながら装置のコンソールを素早く叩き、何かを入力していく。

氷室もそれ以上問う気はなく、いつも通りにヘッドギアを被りベツトへと体を預けた。

しかし、

「ねえ、皇月ちゃん。私がここで何かを仕組んだりするんじゃないかって思わないの？」

「ホント愚問ばかりね、今日は。するんならとつくにしてるでしょうに」

「そうよね。でも……」

それでも納得がいかないのか。最後のボタンに手をかけたまま夢乃は立ち止まる。

「何を考えてるのか知らないけど、あの人が貴女に任せたの。私も貴女以外に適任者がいるとも思えないから、後は言われるままに従うだけよ」

「そう……。信頼してるのね、彼の事」

「当然でしょ？ 恩人だから」

「そうね。恩人、ね」

夢乃は感慨深げに言葉を繰り返すと、気持ち切り替え「はじめるわ」と装置のスイッチを押す。

それに応える形でベットの上にガラス製の蓋がされ、中が完全に密閉されると、氷室の被るヘッドギアが忙しなく明滅を繰り返す始めた。

これで氷室の五感は外界と切り離された。

それこそ地震が起きようが全身耳なし芥子に落書きをされようが、彼女はそれを感知することはできない。故に装置が止まるまでの間、その身は完璧に無防備な状態。彼女を常に守っている『リアクティブ・アーマー反応停止』すらこの状況では機能しない。

だからもし、この場で夢乃が氷室を殺そうとしても、何もそれを阻むものは何もない。

「バカね……」

ポツリと呟いたその言葉も今の氷室には届かない。

それが分かかっていてなお、夢乃の独り言は止まらない。

「なんで私なんかのこと、信用できるのよ……」

自分がそれに値しない人間であることは、夢乃自身が十分承知している。

特に目の前で無防備な姿をさらす少女には殺されたっておかしくないのだ。いや、殺されるべきだとすら感じている。

それほどの事を夢乃はこの少女にしてきたのだから。

ふと手元に置いたカルテを手に取る。

そこには先ほどの質問の回答が記されているが、それは氷室が答えたものとは若干内容が異なっていた。

特に顕著なのは『睡眠』に関する項目だ。

昨夜の睡眠時間を氷室は『3時間』と答えたが、夢乃の書いたカルテにはその上に『合計』の文字が付け足されている。

聞き間違えたわけじゃない。夢乃が自身の判断で意図的に付け加えたものだ。

おそらく一回当たりの睡眠時間はおよそ10分、最長でも30分は下回ると予測している。それらを合計してようやく3時間。

しかもこれは今回だけでなく、毎回の事だ。そして毎日がそんな

のだろう。

夢乃はもう一度、ベットに横たわる氷室へと目を向ける。  
今は顔半分を覆うヘッドギアに隠されて見えないが、その下の目元には尋常じゃない程の隈が出来ているはずだ。

氷室はそれを特殊メイクさながらの化粧で隠し、他人にはそうと悟られないようにしていることを夢乃は知っていた。そしてそのプロ顔負けのメイク技術はこのためだけに磨かれたと言っても過言ではないことも。

事情を知らない者が聞けば、「どうしてそこまで」と首を傾げるだろう。

だが彼女にとっては必要不可欠な事なのだ。

夢乃は再び視線を移し、今度はベット脇のサイドテーブルに置かれた缶ジュースへと目を向ける。

『宇治抹茶珈琲ガラナ風味』と銘打たれたソレは、氷室が常日頃から愛飲して止まない飲み物である。

それこそ三食には必ずと言っていいほど常用し、それこそ1日の水分をそれだけで賄うかのように飲み干しているくらいだ。

しかしこの商品は一度事件を起こし、訴えられている。

その理由は大量に含まれているカフェイン。

抹茶、珈琲、ガラナはいずれもカフェインを多く含むものであり、『宇治抹茶珈琲ガラナ風味』はそれを前面に押し出したと言っても過言ではない商品である。そのため受験生や寝る間も惜しい研究者の間で強力な眠気覚ましとして根強い人気を博している一方、幼い子供が飲用し急性中毒で搬送される事件が続発したことや、コレのせいで不眠症になった患者まで出たことで裁判沙汰となり、一時は製造中止の危機にまで陥った過去もあった。

そんなある種毒物とも取れる飲み物を湯水のごとく暴飲する事も

彼女のとある思いを表している証拠と言える。

「怖いよね、寝るのが……」

もつとも単にそれだけならば、他にも同様の患者は大勢いる。

夢乃は精神科医だ。そういう患者をこれまで多くその目にしてきた。

しかし氷室のソレは彼らとは一線どころか遥かに隔絶した異常とも呼べる症状だ。常軌を逸して狂気に達してるとも言えるほどの執念で睡眠を拒絶している。

無理もない、と夢乃は瞑目する。

そして同時に襲い掛かる罪悪感に胸を締め付けられる思いをする。

その原因を作り出したのは、他ならぬ夢乃自身だ。

一人の少女から『眠る』と言う人間の基本的な行為を奪い、安息の夜を得られない状況へと陥れた。

それがどれほどの罪なのか、当時の自分はまるで理解していなかった。理解しないまま目的のために、“あの”処置を施してしまった。

しかし後悔してたところでもう遅い。彼女が“目覚めて”からこれまで、安息の時間を取り戻すことなんてできない。時間はどんな超能力を用いても、巻き戻すことなんてできないのだから。

「でも、まだ間に合う」

過去は取り戻せずとも、この先の未来は作り出すことはできる。

奪ってしまった安息の時を、再び彼女の手に戻すために夢乃はこうして治療を続けているのだから。

「待っててね皐月ちゃん。絶対に解いてあげるから……」

その身にかけられた『呪い』を。自らがかけた恐るべき『悪夢』

を。

(そしてそれが終わったら……)

そこまで考えて夢乃は頭を振り、もう一度夢乃の姿を目に焼き付けた後、再び装置のコンソールへと手を伸ばす。

ディスプレイに表示された無数のデータを目で追い、軽やかな指使いでキーを叩き細かな調整を付け加えていく。

その表情には、あの病室で見せた軽さは一切見当たらない。

むしろ重苦しいと感じるほどの重圧を周囲に放ち、夢乃はただひたすらに作業へと没頭し続ける。

それが自分に出来る唯一の『罪滅ぼし』であると信じて。

第08章 とある甲夜の急展開へサドンリーク（前書き）

ようやく話が動き出します。

ちなみに『甲夜』とは夜を5つに分けたうちの第一の夜。午後7時

〜9時頃のことを指す言葉です。

## 第08章 とある甲夜の急展開へサドンリー

「サツキ、遅いね……」

「検査に時間がかかっているんだろ？」

インデックスのお怒りも収まり、再び穏やかな時を取り戻した病室だが、一人減っただけでなんだか寂しく思える。

必然と両者の会話は減り、病室はシンと静まり返る機会が多くなつた。

元々出会って間もない二人の間にはそれほど共通の話題が多くあるわけでもない。ましてや上条は魔術側の事情に疎く、逆にインデックスは科学側の事情に疎いと、それぞれの分野が完全<sup>せかい</sup>に食い違うため、何かを語り合っても微妙なズレが生じて会話のキレが鈍くなるのだ。

それを思うと魔術側にも科学側にも相応の見識のある氷室の存在はこの二人を繋ぐ『潤滑油』的な役目を担っていたのだと、いまさらながらにその重要性に気付かされる。

（ダメだなあ。完全に氷室に頼りきりじゃないか、俺）

むしろ氷室の方が出来過ぎているわけなのだが、比較対象が彼女しかいないため上条はそれに気づかない。

「……つと、すまんインデックス。ちょっとトイレ」

徐に尿意を感じ、上条がそう断りを入れるが、

「もう、とうま！ そういう事はレディの前で気安くそういう事言うべきじゃないと思うんだけど」

デリカシーなさすぎかも、とインデックスは頬を膨らませて上条を睨み付ける。

「そうかあ？ 普通じゃないか、これくらい」

「そういうところが、デリカシーがないっていうんだよ！」

「そういうものなのかねえ……」



男である上条にはそう言った女性的な機微と言つのはほとんど理解の及ばない領域だ。それこそがデリカシーの無さなのだと彼が気付くのは、はたしていつになるのだろうか？

「とにかく行つてくる。ちゃんと大人しくしてろよ？」

「もう！ 子供じゃないって何度言つたらわかるの！」

「はいはい。子供じゃないんなら大人しくできるよな」

「バカにして、バカにして……もう一回頭噛んだ方がいいかも」

「ご遠慮させていただきます」

即座に頭を下げた上条は、すぐさま戦略的撤退を兼ねたトイレタイムのために病室を後にする。

(……つて、インデックス一人残すことになるけど、大丈夫だよな) トイレはすぐそこにあるし、そう時間がかかるものでもない。

(すぐに戻れば平気か)

そう考え、上条は少し小走りにトイレへと直行する。

だから気付かなかつた。

柱の陰に赤髪の男が潜んでいたことに。

だから気付かなかつた。

それが風雲急を告げる事態の幕開けになるなどと

「お疲れ様」

ベッドを覆っていたガラス蓋が開くと同時にむくりと起き上がった氷室に、彼女が“お気に入り”の『宇治抹茶珈琲』を差し出しながら夢乃が声をかける。

「気分はどう？」

「自覚が出るようなものでもないでしょ？」

ヘッドギアを外した氷室は開口一番から皮肉な台詞を吐きつつ、受け取った『宇治抹茶珈琲』のプルタブを開け、一気に啜る。

「それはそうだけど、もし気分が悪かったりしたら再調整し直さないといけないじゃない」

「問題ないわ。いつも通りよ」

「そう。それならいいんだけど……」

氷室の言葉は信用ならないとばかりに疑いの眼を向けるが、ベッドから立ち上がった彼女の様子に特に違和感を感じられない。むしろ処置前よりしっかりしているくらいだ。

「……ちゃんと、眠れたみたいね」

「……おかげさまで」

氷室が安心して眠れる機会は、月一回のペースで行われるこの処置を行っている数時間だけだ。

それ以外は本当に短い睡眠時間しか取れず、『眠る』と言うより『休める』といった程度でしかない。

夢乃にしてみれば、もう少し頻繁に機会を設けたてあげたいのだが、機械の調整やそれに用いるデータの作成などに時間を要するため、それもなかなか叶わない状況なのだ。

(ままならないわね……)

一刻も早く解放してあげたいところだが、焦れば逆効果を及ぼす可能性も多く、下手をすれば最悪の事態すら考えられるとあっては是が非でも慎重にならざるを得ない。

「それで、今回はどんな感じなの？」

苦悩する夢乃を尻目にさっさと着替え始めた氷室は、下着を身に着けながら処置の内容について問いかける。

「とりあえず覚醒条件の緩和を試みてみたわ。今までみたいにちよつとの刺激で覚醒めめることはないはずよ」

「そう。けど、どこまで効果があったかは相変わらず試してみないとわからないんでしょうけど」

「ごめんなさい……」

「責めてるわけじゃないわ。下手を打たれるよりマシだし」

「ええ。それだけは避けるよう、気を付けてるから」

「かけた時には全く考慮してくれなかったけどね」

「……………」  
「冗談のつもりなのだろうが、夢乃にしてみれば胸に痛い言葉だった。」

「ま、気長にやりましょ。それに、完全に居なくなられても困るし……………」  
確かに、と夢乃はその言葉に頷く。

氷室を侵す『呪い』はその身を“蝕む”と同時に“守る”役割も担っている。それを完全に失うと、今度は別の意味で彼女は眠れぬ日々を送らなくてはならなくなってしまうだろう。

完全に解くのもダメ、焦り過ぎてもダメとなっては氷室の言うとおり気長にやっていくしかない。

だがその『気長』が一体いつまで続くのか。それを思うと夢乃の心はどんよりと重たい雲に覆われていく。

自業自得とわかってはいても、過去の自分を恨みたくなる瞬間だ。  
「ところで夢乃センス？」

「な、なに？」

暗い気持ちを見捨てるかのような気安い呼びかけに動揺しながらも、夢乃は氷室へと振り返る。

既に下着をつけ終えスカートのホックに手をかける氷室は、首だけで振り返り夢乃の姿を上から下へと眺めると、

「やっぱりその格好、やめた方がいいと思いますよ？」

「そ、そう？」

「うん。特に襟元は締めといた方が……………」

大きく開いた胸元は青少年にとっては目に毒だろう……………本来ならその“まな板”じゃ、失望させるだけでしょように……………」

残念ながらその名に反して夢乃の胸には夢がない。“ゆめのゆめ”ならぬ“ひらのむね”だ。

「ひ、ひどくっ！人が気にしてること言うなんてえっ」

「気にしてるなら隠せよ、寸胴」

「女は見せることで磨かれるのよっ！」

「良いこと言ったつもりでしょうけど、残念ながらその胸に夢や希望が詰まる余地は欠片もありませんから。あるのは絶望だけ」というか絶壁？」

「うわぁーん」

よほどシヨックだったのか半ばマジ泣きし始めた夢乃を無視して、元凶たる氷室は淡々と着替えを再開する。

と、その背後からスクツと手が伸び、

「どうせ皐月ちゃんみたいに大きくないわよ！」

「つて、ちよ、まー！」

脇の下から延びた夢乃の両手が氷室のたわわな果実を鷲掴みにし、揉みしだく。

「ええい、こんなもの！　こんなものお！」

「や、まっ…、ちよっと、ホントにやめてって　！？」

「この、この、この　！」

執拗なまでに恨みを込めて揉みしだく夢乃の行為に、能力を使う事も忘れて氷室が暴れるが、いつそ執念とも怨念とも取れるしつこさで夢乃はけして放そうとはしない。

それどころか、

「……皐月ちゃん、また大きくなってる？」

「なって、ない……」

「ウソっ！　絶対1カップは大きくなってるでしょ！　この前測った時はEだったから……Fですつてえ！？」

驚愕し、恐怖に慄き、さらに執拗さを増す夢乃の攻撃。バイモミ

「巨乳が何よ！　巨乳が何よっ！　おっぱいなんてデカくても、歳とつたら垂れるだけじゃない！」

「と言いつつ、恨めし気な顔をしないでくださいっ！　私だって好きで大きくなっただんじゃない！」

「巨乳なヤツはみんなそう言うのよお！　ついこの間まで同じつるぺたすとーんだっただのに、何が原因なの！　教えなさい！」

「いつの話をしてるんですか！ あとやっぱづらやましいんじゃないかっ！」

「そうよ！ だから、ソノニクヲワケロ」

「ああ、もう！ いい加減にしないとぶっ飛ばしますよっ！」

「ワケロオー！」

もはや妖怪ムネニクワケロと化した夢乃には人間の言葉は通用しないらしい。

しかしきゃいきゃいと戯れる二人の姿は、傍から見れば背後に百合の花が散りばめられているかのように映るに違いない。

そう、その光景を、

「ここかっ！」

ガラッ

「ひむ、」

こんな風に、

「……………る？」

第三者が目撃すれば。

「……………」  
「……………」

秘密の診察室に嫌な沈黙が落ちる。

勢い良くドアを開け姿を現したツンツン髪の少年は茫然とその場に立ちつくし、

少女の胸を弄っていた童顔の熟女女医は、その手をピタリと止め冷や汗を流し、

そして半裸の状態で辱めを受けていた少女は

「き、」

「き？」

「キヤアアアアア！！」

「すんませんでしたあー！」

「で、遺言は？」

「またいきなり死刑宣告ですか！」

「なにか？」

身だしなみを整え、少年に正座を強いた少女の視線はどこまでも冷たい。それこそ昼間に体感した絶対零度を彷彿とさせる冷たさだ。

「なんでもありません。全て上条当麻わたくしめが悪いのです」

「ええ。責任を取れなんて言わないから、潔く死になさい。駅前の広場で全裸で」

「ぜ、ぜんら……？」

「安心して。腐らないように凍らせといてあげるから」

「それなんて放置プレイっ！」

ニッコリと極上の笑顔（ただし目だけは笑ってない）で死後なお続く羞恥プレイまで宣告された上条は、いつそ責任を取れと言われた方がマシかもしれないと涙した。無論、責任を取らされるのもそれはそれで問題なのだが。

「というかそれ以前に、そもそも何でこんなところに上条君がいるのよ。……インデックスは？」

打ち合わせでは、どちらか一方が所用で居なくなる場合は必ずもう一方がそばに張り付いている手筈となっているはずだ。

「！ そうだ、インデックス！」

「……何があつたの」

とたん立ち上がった上条の切羽詰まった表情に、氷室の顔が険しいものへと切り替わる。

「居なくなっただんだ！ ちょっとトイレに行ってたうちに、病室から！」

「っ！」

上条の衝撃発言に、氷室は息をのみ、

「バカ！ どうしてそれを先に言わないのよ！」

「す、すまん。けど病院中を探したけどどこにもいなくて……」

「窓は？ 病室の窓！」

「……開いてた。ってことは外かつ！」

「探しに行くわよっ！」

「お、おう！」

その場にいた夢乃に別れも告げず、氷室と上条は部屋を飛び出し駆け出す。

「ホント、スマン」

「謝るのは後よ。それに私にも責任はあるし……」

“診察”なら延期する事も可能だった。むしろ状況的に見ればそうするべきだった。

「いや。それは違う」

自責する氷室を上条は即座に否定する。

あくまでも彼女は、上条達の事情に巻き込まれ付き合っているだけの存在だ。それに彼女の身に何か異常があるのなら、そちらを優先するべきだと上条は判断する。

「責任の在り所を問うのは不毛ね。とにかく今はあの子を……」

「ああ。きつとどこかに魔術師マジックが潜んでただ……クソッ」

ちよつとの間だからと、あの時病室を離れていなければ、と後悔したところでもう遅い。

二人並んで夜の街を駆け抜けるが、時間が経っているためインデックスがどこに逃げたのかの当てもない。

それどころか、

「人が、いない……？」

夜の8時近い時間帯とはいえ、これだけ走っていて一人の人ともしれ違わないのはおかしい。

「なあ、氷室。これって……」

「『人払い』よ」

氷室は足を止め、言葉とともに手近な壁に貼られたカードを一枚剥がす。

「それは……」

「ステイルとか言うルーン魔術師のものでしょうかね。水害対策にラミネート加工を施して耐水性を上げてきたか……。意外と近代的だけど、なるほど合理的ね」

台紙自体の強度も増す上、取り出しやすく、携帯しやすく、使い勝手も増すと一挙で何得も得られる対策と言える。

「使用されているルーンは『Opilia』。その意味は『土地』。このカードを貼った空間の内側を自らの所有地とすると、他の人間が立ち入るのを防いでいるって所ね」

「さすがだな。ってことは……」

「ええ。近くにいますよ」

人の立ち入りを禁じたという事はその空間内で魔術を使用するという意図を意味している。

つまり『人払い』がされている空間内にステイルと言う魔術師が存在するという事。そして彼は今現在インデックスを追っているという事。

「二手に分かれましょう」

「ああ。じゃあ、俺は向こうに」

「わかったわ。合流は……、上条君携帯は持ってきてる？」

「わりい。うっかり踏み砕いちゃって、壊れてんだ」

相変わらずの不幸体質っぷりに、氷室は少しばかりげんなりしつ、

「……しょうがないわね。学校近くの個室サロン、わかる？」



「ああ。使ったことはないけど……」

「その702号室。私の名前を出せば開けてくれるはずだから、  
そこで合流しましょう」

「？」

氷室の言葉に上条が疑問符を浮かべる。

個室サロンとは学園都市特有のサービス業の1つで、普段学校や  
ら寮やらで何かと監視の目が常日頃から付けられストレスを感じる  
事の多い学生が、完全なプライベート空間を得るために時間貸しで  
部屋を借りることの出来る。言うなれば子供たちのための『秘密基  
地』だ。

無論、商売であるため時間あたりに相応の金額を支払う必要があ  
る。それもこの学園都市<sup>まち</sup>ではそう言った娯楽関連のものには高めの  
税金がかけられているため、決して安いとは言えない金額だ。しか  
も普通は使った際に支払いをするシステムのはず……。

「年間契約で借りてるのよ。運営会社の株を持ってるから、その特  
典と割引だね」

「うわぁ……」

こんなところにも上条は氷室との格差を感じ、呆けてしまう。

「そんなことより、」

「っと、そうだった。わかった。そこに行けばいいんだな」

「とりあえずは。あとは臨機応変に、ってことで」

「わかった。気をつけるよ」

「そっちこそ」

そう言って二人は背を向け、振り返ることなく走り出す。

今は一時の時間も惜しい状況だ。一刻も早くインデックスを見つ  
け出し、保護しなければならぬ。

大通り方面に走って行った上条に背を向け走り出した氷室は、そ

のまま“空中を駆け上がり”手近なビルの屋上へと駆け上る。空気を『停止』させ足場とすることで、即席の階段としたのだ。

そのまま眼下に広がる夜の街を見下ろす。

人気のない夜の町並みは、どこか寂しく、そして恐ろしいものに感じる。

（　　なんてね）

クスリと状況に合わない笑みをこぼし、氷室はゆっくりと息を吐く。

（とりあえずここまでは“予定通り”。思いの外、うまくいったわね）

そう、この状況は氷室の『演出』<sup>しかけ</sup>が功を奏した結果だった。

あの夜、氷室が上条達と出会ったことで、現在の状況は原作とは異なる展開となっている。

その最大の違いと問題点は『場所』とそれによる『環境の差』だ。

原作では上条達は小萌先生の自宅たるおんぼろアパートへと押しかける事になっていた。

そしてそこで彼女の手を借り、魔術を用いてインデックスの傷を癒し、そこを拠点に物語は進んでいくこととなる。

一方この世界では、氷室の手筈によりインデックスの傷は科学的な医療によって塞がれ、拠点も設備の整った清潔感溢れる病室で、三食昼寝付の悠々自適な生活を送れる環境にある。

そのため、外に出歩く必要性はなく、籠りっきりの生活を続けていれば問題ない状況となってしまうていた。

しかしそれでは原作で起きうるはずの事件が起きなくなってしまう。

それも物語を加速させ、終局へと導くために重要な要素を含む事件が、だ。

それを解決するためには、如何にかして魔術師たちを再び舞台へと上げる必要があった。

だが、病室内で上条と氷室が常に待機しては、向こうも無闇に手を出すことができない。

手を出させるためには、双方が病室を離れている状況を作り出す必要がある。それもごく自然に、誰にも疑われずに、だ。

まずは氷室自身の理由付けたが、こちらは大した事はしていない。単に前もって予定していた『診察』を忘れたふりをし、夢乃に迎えに来させればそれでいい。

後はそれを理由に病室を退出すればOKだ。

問題は上条だ。

取り決めとして「どちらか一方が所用で居なくなる場合は必ずもう一方がそばに張り付くこと」としている以上、氷室が部屋を離れば上条は彼女が戻ってくるまで待機せざるを得ない。

とはいえ、取り決め自体は何の不自然さも無い、むしろ当然の事のため、これを覆すには上条が止むに止まれず部屋を出る必要がある状況に追い込まなければならなかった。

そこで氷室は一計を案じ、まず上条に外へと買い出しに行かせた。無論、最初から外へと行かせたのでは不自然さが残るため、手近な場所で購入する筈のものを買えない状況とし、仕方なく自発的に外へと出るよう仕向けた。具体的には病院内の全ての自販機にある『宇治抹茶珈琲』を予め買い占めておき、その上で脅しをかけて絶対に買ってくるよう厳命したのだ。

それにより、上条は遠く離れた場所まで買い出しに行くハメとな

り、買ってきた『宇治抹茶珈琲』は途中で温くなってしまふ。

そしてそれを指摘し、絶対零度による冷却を行いつつ、それによって生じた霧に乗じてこっさり上条用の飲み物を事前に用意していた別のものへとすり替えたのだ。数時間後にトイレに行きたくなくなるよう成分を調整した利尿剤入りのお茶へと。

後は夢乃が到着するのを待ち、氷室は『診察』を受けに行き、それが終わりに近づいた頃、彼は尿意を感じてトイレに行くために病室を後にする。

これで魔術師たちが付け入る隙の完成、というわけだ。

そしてこれまで手を出したくともできなかった彼らが、その“作られた”隙を逃すはずがない。

案の定、そこを突いて病室を襲撃し、インデックスは“思惑通り”窓から外へと逃げ出した。

（まあ、向こうの動きは半分賭けだったけど、うまく動いてくれて助かったわ）

動かなければ明日の退院後にまた別の方法を考えなければならなかったところだ。

（けどこれで条件はクリアした。上条君の方には間違いなく神裂がぶつけられるはず……）

原作でもおんぼろアパートにはない風呂を求めて銭湯に向かう途中、上条は彼女の襲撃を受けている。

あらゆる<sup>まじゆっ</sup>異能を打ち消す事の出来る上条でも、彼女相手にはそれも通用しない。それを向こうも理解しているだろうからこそ、その対戦カードは覆らないとみていいだろう。

そして、そんな状況を作り出すのが、今回の目的であった。

（そこで彼はインデックスにかけられた『呪縛』を知ることとなる）  
それこそがこの事件を終局へと向かわせるために必要な<sup>キ</sup>鍵。

それを手に入れてもらうために、上条には戦って傷ついてもらわ

なければならぬ。

（我ながら残酷ね。いくら殺されることはないとはいえ、確実に大怪我を負う事になる戦いに向かわせるんだから……）

それでも物語を進める上ではなくてはならない一戦だ。なんと罵られようとも、これだけはこなして貰わなければならぬ。

（さて、その間に私は……）

氷室も氷室で仕込まなければならぬことがある。

ただ原作をなぞるだけではなく、出来る事ならば穩便に事を済ませたいと願っている。

そのために解呪に必要なピースを“彼ら”にも手に入れて貰わなければならぬ。

「……と、その前に、」

周囲に意識を巡らせる。正確には今現在自身に干渉している『違和感』の正体に、だ。

その原因はステイルが展開している『人払い』<sup>Opilia</sup>によるもの。

このルーンは展開した場所を所有地 即ち『私有地』とするこ  
とで他者が無意識の内に他人の財産を冒さないようにしようとする  
心理を利用した魔術だ。そのため、“初めから他者の財産を冒そう  
とする者”には効果は薄い。

しかし、だからと言って全くないわけではない。今の時代に生きて  
いる者ならば幼少期の頃から多かれ少なかれ『他人の物を奪って  
はいけません』と躡けられ、無意識に自覚している。そのため『奪  
おう』と強く意識していても、心のどこかで『それはいけないこと  
なのだ』という無意識の罪悪感が発生して『人払い』<sup>Opilia</sup>の影響を受け入  
れる事になる。

そしてそれに強く反発しようとするれば無意識下の領域に大きな齟  
齬が生じ、無意識下で能力を制御している能力者にとっては、その

演算制御を乱す効果を生み出してしまふのだ。

それは氷室の身を守る『リアクティブ・アーマー反応停止』の効果を大きく減らす事へと繋がる。

(けど、それが解っているのなら話は簡単)

一部の能力者　とりわけ高位能力者はその能力を使うに当たり、自らの能力に則った対象を観測する力も併せ持っている事が多い。

たとえばエレクトロマスター電気使いなら電磁線の可視化や電気信号の読み取りなど、バイロキネシスト発火能力者ならば周囲の温度・熱量の感知・計測といった具合だ。

そして氷室もそんな観測能力を持っている。

彼女の能力『カウンターストップ抑止力』はベクトル干渉系の能力だ。当然それを扱うためには『ベクトル』の観測が必須となるため、意識を向ければそれがどんな方向に、どれぐらいの力で働いているのかを直感的に読み取ることができる。

故に『Opriia人払い』と言う魔術の力が自身に影響を及ぼそうと向ける『干渉ベクトル』を解析し、逆算し、それを『リアクティブ・アーマー反応停止』のフィルターに追加してやれば、干渉を止め、影響を防ぐことができる。

それは言うなれば『魔術』という名の新たなクリアランス制御領域の拡大の取  
得だ。

この世界に存在するもう一方の側面への介入。そして、その力は氷室がこの先の未来を切り抜けていくために必ず必要となってくるものでもある。

そう言った意味ではこの事件に介入を行ったのは、彼女にとって偶然とはいえ僥倖だったと言えるだろう。

氷室は自らの行動によって得られるものを何一つ無駄にはしない。  
また無駄にするだけの余裕もない。

無駄な行動をとり続けられる程、彼女を取り巻く環境は易くはない。もんだい

だから常に意図を持ち、意味を持たせ、思考を続け、行動し、最良の結果を求め続ける。

そのためにはなんだったって利用する。誰だって活用する。

(だから、盗らせてもらうわ魔術師。あなた達の領域を)クリアランス

『違和感』が晴れた。これで『人払い』Opiliaによる無意識への干渉は行われない。

けどまだだ。まだこの程度では足りない過ぎる。

意識を拡大し、干渉領域を『人払い』Opiliaの仕掛けられた空間全てへと広げていく。

『抑止力』カウンターストップに距離の限界はない。対象の位置情報さえ取得できれば、例え地球の裏側でも干渉は可能だ。

もっとも処理能力の問題から現実的には実行は難しく、即応性を考えれば精々目測が可能な視界範囲が限界だと言える。それ以上の距離はできないとは言わないが、一筋縄では行かない至難の業だ。しかし、ただ『観測』するだけならば、距離の限界はさほど問題にはならない。

そして今回観測するべきベクトルは“空気の流れ” 『気流』だ。

人が動けば空気が攪拌され気流に乱れが生じる。その乱れを観測し、その原因となっている存在を逆算して辿れば、現在逃亡中のインデックスとそれを追うステイルの居場所を割り出すことができる。もっとも普段は多くの人が行き交うため、この方法で目的の人物を割り出すことなど不可能に近い。よほど特徴的な“乱れ”を生み

出すような存在ならともかく、ただ単に歩いている、走っている程度で生じる“乱れ”となれば全ての人がある条件に合致し、かつそれらが互いに干渉しあって複雑化してしまうため実際には不可能だ。しかし現在、この周囲は『人払い』<sup>Opria</sup>によって無関係な人物が排除されており、自分と上条、そしてインデックスと魔術師達しか存在しない空間と化している。ならその元凶の数は限定されており、その何れかが目的の人物であるとわかって以上、彼らを特定し補足するのはそう難しい話ではない。

だから上条のように馬鹿正直に地道に地べたを駆けずり回る必要は氷室にはないのだ。

「……見つけた」

氷室はニヤリと唇の端を持ち上げ、躊躇うことなく夜の街へと飛び込む。

『魔術』という名の異能が存在する新たな領域へと。<sup>クリアランス</sup>



## 第09章 とある夜街の魔術師戦へウィザースバトル（前書き）

長いため一度途中で切ってます。続きは明日にも更新予定です。  
また今回ノタリコンをルビに振っている関係上、携帯の機種によっ  
ては見辛いかもかもしれません。

## 第09章 とある夜街の魔術師戦へウィザースバトル

「Purissaaupiz Geedo  
巨人に苦痛の贈り物を！」

轟！ という音とともに灼熱の炎剣がインデックスの背後から迫りくる。

それを前方に飛び込むかのようにさけ、即座に立ちあがると振り返ることなく再び駆け出す。

「ふむ、怪我の方は完全に回復したようだね」

冷静にそんな事を述べながら彼女を追うステイルは再びその手に炎剣を生み出し、振るう。

それをインデックスは真横に飛んで避け、そのまま狭い路地を転がるように切り抜け少し開けた大通りへと飛び出す。否、飛び出してしまったと言うべきか。

（いけない……！）

敵の目を欺き逃げ延びるには、死角の多い狭い路地を抜けていくべきだ。障害物も多く駆け抜けるには不都合が多いがそれは相手側も同じことが言えるため、うまく利用すれば追撃の速度を遅らせ、距離を引き離すことができる。攻撃も手近な障害物を盾として利用すれば防ぐことがある程度なら可能だ。

しかしこうして開けた場所ではそれらを活用することはできない。その上、ただでさえ今までその身を守ってきた『歩く教会』は壊れ、その絶対防御力は失われている状況だ。しかも病室からそのまま抜け出てきたため、着ているのは入院患者用の貫頭衣。それに防御力なんてものはなく、一撃でも攻撃を受けてしまえばほぼ間違いなく敵の手に落ちてしまう。

（急がないと……）

すぐさま立ち上がり別の路地へと逃げ込もうとし、

「Purissaaupiz Geedo  
「巨人に苦痛の贈り物を」

「TITL  
「左方へ歪曲せよ！」

背後から響いた声に対し、とつさに声を張り上げる。

それは『強制詠唱』と呼ばれる魔術を使うことの出来ないインデックスが敵の魔術からその身を守るために使用する対魔術師用の護身術の1つだ。禁書目録から相手の術式を解析し、高速詠唱ノタリコンによる割り込みをかけ、その発動を止めたり誤作動を引き起こさせるといふもの。その魔術が自律行動を取る類の物ならば効果はないが、相手の意思により遠隔操作が行われているものならば、割り込みをかける照準を逸らすことができる。

その『強制詠唱』に従い、インデックスを飲み込まんと一直線に迫っていた炎は軌道を左へと逸らし、すぐ傍のアスファルトを砕いて爆ぜた。

「きゃあ！」

その爆風と飛び散る破片に煽られたインデックスの体はそのまま大通りの中央へと吹き飛ばされる。

「選択を誤ったようだね。君らしくもない」

逸らすのなら『左』ではなく、爆風を受けても路地へと飛び込むことの出来る『右』を選択するべきであった。

「焦っているのかい？」

「っ！」

凶星だった。

病室の入り口に魔術師スタイルの姿を捉えた瞬間、思い浮かんだのはあの夜、自らを助けるためにこの魔術師へとその右手一本で戦いを挑み見事殴り倒した少年の姿だった。

トイレに行くとして行った彼がもしこの場に居合わせたのなら、きつとまた戦うことになる。インデックスを魔術師の手から守るために。

それはダメだ、とインデックスは即座に首を振った。いくら彼の右手にあらゆる魔術を打ち消す力が宿っていようとも、それだけで100%勝てるほど魔術師という相手は容易くはない。ましてや自

分を庇いながら戦うなど、ただでさえ低い勝率を更に下げる事になる。

いや、それ以前に自分の事情にこれ以上無関係な彼を巻き込みたくない、という思いが即座に窓から逃亡するという選択をインデックスに取らせていた。

しかし、だからこそきつと彼は誰も居なくなった病室を見て、何があつたかを悟り追いかけてくるだろう。

その前にこの魔術師から逃げ延び、どこか遠くまで行かなければならない。

もう傷は癒えている。後はイギリス清教の教会を見つけ出し、ここで保護してもらえば終わりだ。これ以上、魔術とは無関係な彼らを巻き込む必要もなくなる。

だから遠くへ。この魔術師からも、あのとうまという少年からも、手の届くことのない、どこか遠くへ。

だがその焦りが冷静な思考を阻害し、判断力を鈍らせ、逃げ場のない窮地へと自らを追いやる結果となってしまった。

「君の気持は解るよ。僕だってできる事なら一般人を巻き込みたくはないからね。だからこそしてこのあたりに『人払い』をかけさせてもらっているわけだし……」

これだけ派手に逃げ回っているにも関わらず誰も駆けつけてこないのは、そのせいだ。

それはインデックスにとっても都合はよかったが、だからと言って安心できるものではない。そんな「人払い<sup>かこい</sup>」すらあの少年の右手は打ち消してしまい、ここへと辿り着く道を開くことになるだろう。彼は来る。きつと、絶対に。でなければあの時すでに逃げ出していたはずだから。何より、彼自身がそう口にしていたではないか。でもだからこそ巻き込めない。巻き込むわけにはいかない。

「けど、向こうからやって来るならこっちとしても対処せざるを得

ないからね。どうだい？ 君が大人しく僕らとともに来てくれれば、そんな事にもならないんだが……」

「お断りだよ」

即座に否定した。確かに彼らに従えばあの少年は戦わずに済む。しかしだからと言って10万3000冊の魔導書を彼ら魔術師の手に明け渡すわけにはいかない。

まだ逃げる術は残されている。だから絶対にあきらめるわけにはいかない。

「そうかい。なら」

スタイル 魔術師の手に再び炎が宿る。

(あの攻撃を逸らして目晦ましにして、それから路地へと逃げ込む)

方針を立て、必要な『ノタリコン強制詠唱』を頭に思い浮かべ、

「インデックス！」

その背後からやってくる少女の姿に両目を見開いた。

「サツキ つ！」

あの少年と同じく、自分を助けてくれた少女。血止めをし、病院を手配し、姉のように、母のように優しく接してくれた聖母のような少女。

インデックスを大事に思ってくれる、インデックスが巻き込みたくない、もう一人の少女<sup>しゅいっほんじょ</sup>。

「やれやれ。困ったね、これは……」

「ダメ、サツキ！ 来ちゃダメっ！」

とつさに拒絶の言葉を発するが、駆け込んでくる少女は止まらない。

「“また”巻き込んでしまったみたいだね」

そう言うやいなや、スタイル魔術師はその右手に掲げた炎を少女へと向け、

Purissaaaupiz Gedd. 巨人に苦痛の贈り物を！」

「ダメえええええ　！」  
インデックスの叫びもむなしく、放たれた炎は少女の体をあつけなく飲み込んだ。

「……………」

「これが現実さ。君にもわかっただろう？」  
懐から煙草を取り出し、火をつけながら魔術師ステイルがそんな事を言うてくる。

それはインデックスの耳には届いていたが、しかし彼女の意識は燃え盛る炎の中に消えていった少女へと向けられていて心にまでは届かない。

それでもなお魔術師ステイルは紫煙を吐き出しながら続ける。

「追ってきたのが彼女だったのは意外だったけど、さすがにあの少年のような奇跡ことはないだろうさ。あんなバカげた奇跡ちからが2つも3つもあったら、魔術師なんてやってられない」

あらゆる魔術を打ち消す力。それは魔術師たちの存在を否定する力だ。魔術が通用しないなんて、魔術師たちは何のために発狂する思いをしてまで力を求めたのかわからなくなってしまう。その原理や理屈は不明だが、その存在は紛れもなく魔術師たちの天敵となり得るだろう。

「さあ、これでわかっただろ？　君がどんなに彼らを思って逃げ出そうが、彼らはそれを無視して追いかけてくる。そういえば、もう一人の少年の方は、今どうしているのかな…………？」

「！？」

サツキがここに来たという事は、やはりとうまもインデックスを探しに来ているという事だ。

「ま、彼の相手は神裂に任せる事になっているから、僕が考える事でもないんだけどね」

そう言って深く紫煙を吐き出し、

「神裂は『聖人』だよ。君にならわかるだろ、その意味が」

「！？」

スタイル 魔術師の言葉にインデックスは言葉を失った。

「そう、アレの『右手』がどんなものであれ『聖人』相手に勝ち目はない。もしかすると今頃すでに始末されているかもしれないな……」

「とうま！？」

インデックスは衝動的に駆け出そうとした。しかしスタイル魔術師がそれを阻むように立ちふさがる。

「どこに行く気だい？ 無駄だよ。君が行った所で結果は同じさ。それよりここで大人しく投降してくれば、“まだ生きているかもしれない”彼を助ける事も可能かもしれないけど？」  
それはまさしく悪魔の囁きだった。

今、とうまを襲っている『聖人』が彼の味方なのならば、この場ですぐに連絡を取り合う術も持っているだろう。そしてインデックスが彼に投降すれば彼らの目的は達成され、とうまをこれ以上傷つける意味はなくなる。彼を助ける事が出来る。

しかしそれは魔術師の手に10万3000冊を明け渡すという意味に繋がる。世界を須らく改変するだけの力をもった恐るべき『禁書目録』を、だ。

「さあ、どうする？ 彼を見捨てて『禁書目録』10万3000冊を守るかい？ それとも罪のない仔羊を助けるためにその身を捧げるかい？ なに、

どちらを選んだところで責めはしないさ。どちらも君の職分だしね」  
インデックスはイギリス清教に仕えるシスターだ。上条当麻は信徒ではないものの、この世の全ての人間は神のより造られ、その祝福を受けるべき存在だ。そして教会の徒であるインデックスには、そんな彼らを導き、救う義務がある。たとえその右手が神のご加護を打ち消すような代物であっても、いや、だからこそ神の僕たる自らが救わなければならない存在だ。

同時にインデックスは『禁書目録』を守る義務がある。それは世

界を須らく改変するだけの力をもつ危険な代物であり、それを魔術師に奪われる事は世界を危機に陥れる事に繋がる事になる。それを防ぐことは世界とそこに住まう多くの人々を救う重要な役目だ。

自身を案じ助けようとしてくれている一人の少年か、上条当麻はたまた見ず知らずの世界中の人々か。赤の他人

どちらかを選べと言われれば、後者を選ぶべきだとわかつてはいらぬ。1を救うために9を犠牲にするなんてことは許されない。せざるを得ないのであれば逆だ。世界を救うためにとつまを見捨てるべきだ。

だけど……、

「悩んでいる時間はないと思うけど？ こうしている間にも彼の命は刻一刻と死に近づいているわけだしね」

まだ死んではない、ステイル、そう魔術師が暗に告げたことに気付きホッと安心するも、同時にその命が今にも失われそうになっている現実を理解し、インデックスは自らの身を抱いた。

わかっている。見捨てるべきだ、と理性が叫んでいる。ここでとつまを助けたところで、この魔術師の目的如何では再び彼を窮地に陥れる可能性があることも。

それに彼自身が言っていた通り、上条当麻の右手は魔術師にとって天敵となる。そんな存在を知りながら、わざわざ生かしておく通りはないことも。

けど、もしここで素直に従って、この場だけでも彼の命を救う事ができたのなら。

『禁書目録』はインデックスの記憶の中にのみ存在し、それを知るためにはインデックス自身がその口で語らない限り手にすることが



できない代物だ。直接記憶を覗く術もあるが、それが魔術であるならば『禁書目録』を使って防ぐこともできる。だからまだ間に合う。たとえ自分が彼らについて行ってもそこで最悪を迎えるわけではない。

「さあ、答えは出たかな？」

魔術師ステイルの問いにインデックスは頷きかけ、

「答えはノーよ」

それを発したのはインデックスではなく、魔術師ステイルの背後で燃え盛る炎の中からだった。

「な、な」

ギクリ、ステイルの動きが固まり、錆びたブリキのおもちゃのようなきこちない動きで振り返る。

その視線の先で燃え盛る炎が、その中に佇んでいた“少女の右手によって打ち払われた”。

「悪いわね。そんなバカげた奇跡ちかひが2つもあって」

「馬鹿な……」

ありえない、とステイルは現実を否定した。認めたくなかったから。認めるわけにはいかなかったから。

しかしそれは紛れもない事実だ。少女の右手が振るわれた瞬間、炎は初めから存在しなかったかのようにかき消され、その姿を失った。

それはあの夜、あの少年が見せた奇跡と全く同じ光景だった。それをステイルはその目でしかと見ている。そんなバカげた奇跡ちからがこの世に存在する事実を認めている。

（馬鹿な！ だからと言ってそんな力が2つも3つもあってたまるか！）

しかし目の前で起きた現象はそれを肯定している。

目の前に立つ少女はあの少年ではない。性別すら異なる全くの別人だ。

だが起こした現象は同じ。魔術を打ち消す、魔術師の存在を否定する天敵たる力。

（いや、待て。そんなことは“ありえない”。そう、何か別の方法で、“そう見せているだけ”だ）

現実を直視したくない感情がステイルにそう判断させ、天敵の存在を否定する。

「はは！　すごいな。どうやって防いだかは知らないけど、無策で飛び込んできたわけではなさそうだ。けど、悪いが君にかまけている時間はないんだよ。申し訳ないが、全てを忘れ帰ってもらえないかな？　僕としてもこれ以上無関係な人間を殺さなければならぬなんてしたくはないからね」

「問答無用で攻撃してきた割にはお優しい言葉なこと。なら遠慮なく帰らせてもらうわ　その子と一緒にね」

「うい、と顎でインデックスを示し不敵な笑みを浮かべる少女に、ステイルは首を振った。

「いやいや。それは遠慮してもらえないかな。僕はこの子に用があるんだ」

「ふん。こんな人気のないところで幼女を追い回す必要がある用つて……、わかった」

少女は何かを会得したかのように深々と頷き、

「貴方ロリコンなのね」

「、、」

ステイルの額に井型の血管が浮かぶ。

「悪いが用があるのはこの子の頭の中にある10万3000冊の魔導書の方だよ。それと　僕はこの子と同じ<sup>おなじ</sup>14だ！」

「その老け顔で？　しかも喫煙までしていて、歳をごまかそうだな

んで無理があるでしょ。……安心しなさい。別に幼女趣味ロリコンだからって私は差別しないから。区別はするけど……」

「いっそ憐れみを込めるような視線を向けられ、額の血管がさらに太さを増す。」

「違う！ 本当に僕は14歳だ！ それに14だって煙草は吸えるだろ！」

「未成年者の喫煙はこの国でも認められていないはずだけど？」

「法に縛られていたら魔術師なんてやってられない！」

「つまり自分が法を犯してるって自覚はあるわけね」

「余計なお世話だ！」

「いよいよもってヤバ気になってきた額の血管を抑えつつ、ステイルは話が逸れ始めている事に気付き、大きく息を吐いて気を落ち着かせる。」

「もういい。君に退く気がないというのなら仕方がない」

「変態相手に退く理由なんてないと思うけど？」

「あくまで自分を幼女主義者ロリコンにしたいらしい少女の言葉に、ぶちりと何かが切れる音を聞いたステイルは、

「ふふ、いいだろう。そこまで言うのであれば Fortiss9

31」

声を張り上げ徐に両手を掲げる。

「『強者』？」

「そう。魔法名だよ。あの少年から聞いてはいないのかい？」

「殺し名、だったかしら？」

「そうさ！」

ボウ！ と両手の掌に炎が灯る。

AhstoAsh Dusttoddust  
「灰は灰に、塵は塵に」

燃え盛る紅蓮の炎剣と化したそれを大きく振り上げ、

「Ucraemihethood  
吸血殺しの紅十字！」

力ある言葉と同時に放たれた二本の炎剣が、十字を刻んで少女へと襲い掛かる。

先ほどの炎よりも威力も範囲もある攻撃だ。まず避けられない。避けられたとしても耐えきれぬわけがない。

そうたかを括るステイルの目の前で、少女は右手を差し出し

「なるほど……、これが『魔術』ねえ」

交差した炎剣の中心を受け止め、握りつぶした。

「  
今度こそ、ハッキリとその光景を目にしたステイルは言葉を失う。  
もう否定はできない。逃避することも不可能だ。」

理由は分からないが、目の前に立つ少女の『右手』にも、あの少年と同じ『魔術を打ち消す力』がある。

（……まさか、）

偶然であるはずがない。偶然が同じ場所に二人も存在し、魔術師達に向けられてくるなんてことあるはずがない。

だとすれば、それは意図的なものであり、この少女もあの少年も学園都市に所属する人間だ。

なら答えは一つ。

（学園都市は“魔術への対抗手段”を完成させたというのか！）

それがこの『魔術を打ち消す右手』だというのであれば、危険だ。魔術側の世界を脅かす要因になりかねない。

今現在、魔術と科学は世界を二分し、それらが互いの領分を冒さないことでその均衡を保っている。

しかしそれはあくまでギリギリの線で踏みとどまっているだけで、決して両者が仲良しこよしで手を取り合っているわけではない。天秤の針が僅かにでも振れれば即座に戦争へと発展しかねない危険を常に孕んでいる。

だからこそ、科学側の筆頭たる学園都市が魔術への対抗手段を模索するのは当然と言える。

しかしそれが現実のものとなり、それがこんな非常識な代物であるのであれば、

天秤の針はもう、振り切らざるを得ない状況となる。

魔術と科学は互いにぶつかり合い、世界を巻き込んだ一大戦争が勃発する。

動揺を隠せないステイルを尻目に、少女は何かを噛みしめるかのように、

「なるほど。火種と可燃物は魔力によるものだけど、『燃える』という現象そのものは物理法則に則ったものなのね」

「だ、だからなんだって言うんだ」

「別に、ただの確認よ。……それよりまさかこの程度で終わりってことはないでしょうね、『強者』さん？」

「一步、何気なく踏み出されたその足にステイルの足も一步下がる。(な、恐れているというのか！ この僕が！)」

「一度その力に敗れた身ではあるが、だからと言って怖気づく程のものではない。」

「そう、すでにその敗北から学び、対策は練つてある。」

「世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ」

「問題ない。そう思いながらも止まる事のない嫌な汗を無視しながら魔術師は朗々と声を上げる。」

「それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり、それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅する凍える不

幸なり。

その名は炎、その役は剣。

顕現せよ、我が身を喰らいて力と為せ

ッ！

ステイルの修道服の胸元が大きく膨らんだ瞬間、内側からの力でボタンが弾け飛んだ。

轟！ という炎が酸素を吸い込むと同時に 服の内側から巨

大な炎の塊が飛び出した。

それはただの炎の塊ではなかった。

真紅に燃え盛る炎の中で、重油のようなドロドロとしたモノが『芯』になっている。それは人間のカタチをしていた。タンカーが海で事故を起こした時、海鳥が真つ黒な重油でドロドロに汚れたような そんなイメージを植え付けるモノが、永遠に燃え続けている。

「それが、『イノケンティウス』」

「そうだ。その意味は 『必ず殺す』」

「『必殺』とは大きく出たわね。……けど、その名は返上するべきじゃない？ 一度敗れてるわけだし」

確かに、あの夜、あの少年の手により『魔女狩りの王』は打ち破られた。

しかし、

「残念ながらすでに対策済みさ。刻印はラミネート加工を施し、周囲二キロに渡って結界を刻んである」

ましてやここは屋外。スプリンクラーなんて代物は使えず、雨でも降らない限り水で洗い流すなんて荒業は使えない。そしてたとえ雨が降ろうともラミネート加工された刻印のカードは水を弾き、インクが滲むなんて事もない。

「君のその『右手』に魔術を打ち消す力があるうとも、この『魔女狩りの王』は刻印そのものを消さない限り消える事はない。そして使用枚数は16万4000枚。その全てを一度に排除することなんて不可能さ」

だから結果は変わらない。『必殺』の理は揺るがない。

しかしそれを聞いてなお、目の前に立つ少女は、

「ふーん……なら、試してみる？」

揺るがない。超然とした態度を崩さず、不敵な笑みを浮かべ挑発してくる。

「強がる必要はない。死にたくないのならすぐさま逃げるべきだ」

「この期に及んでお優しいこと。それとも自信がないのかしら、『必殺』する自信が？」

「言っただな、能力者」

退く気はない、と。

ならば取るべき行動は一つだ。

「殺<sup>や</sup>れ、イノケンティウス！ あの女を焼き殺せ！」

ステイルの命を受けたイノケンティスの手に炎の剣が握られる。

いや、それは剣ではない。人間でも礫にするような、2メートル以上の巨大な十字架だ。

それを両手に握り、少女に向かって勢いよく振り下ろす。

少女は動かない。『必殺』の結果を受け入れるかのように、摂氏3000度もの炎の十字架が振り下ろされる様を見続け、

ドガンツ！ と言う轟音をが鳴り響き、砕けたアスファルトの破片が漆黒の夜空に高く舞い上がった。

## 第10章 とある魔術師の心理戦へサイコバトル

爆煙に包まれたその場所を見つめながら、ステイルは少女の命が潰えたことを確信する。

「これで終わりだな。なんだかあっけない終わりだったけど……」  
もう少し抵抗があるのではないかと思っただけに、あっけない幕切れに肩透かしを食らった気分となる。

その虚しさを紛らわすためにもう一本煙草を取り出すと、火をつけ暗い夜空に真っ白な白煙を吐き出す。

「さて、これで」  
わかつただろうと、とインデックスへと向き直ろうとし、

「これで、何？」

「死んだはずの少女の声を耳にし、口にした煙草を取り落した。」

「無言のまま振り返る。」

そして見た。

轟！ と燃え盛る『イノケンティウス魔女狩りの王』の脇に立つ“殺したはずの少女”の姿を。

無然とした態度で腕を組み、その長い黒髪を先を掴んで弄ぶ五体満足の少女の姿。

「さすがは切り札って所かしら。一歩間違ったら危なかったかもね」  
おかげで毛先が焦げちゃった、と何の気なしに呟く少女の様子に、ステイルは叫ばざるを得なかった。

「毛先が焦げただと！ ありえない！ イノケンティウスは摂氏3000度の炎だぞ！ それに毛先を焦がすだけで済むはずが」  
そこまで言っただけで気が付いた。

毛先どころではなく、少女の身に何一つ変化がないことに。



そしてその彼女の傍に立つ『魔女狩りの王』イノケンティウスが微動だにしないことに。

「な、何をしているイノケンティウス！ その女はまだ死んでいない！ 早く殺せ！」

そんなステイルの叫びにも『魔女狩りの王』イノケンティウスは反応を示さない。

いや、反応はしている。だが、

「イノケンティウス！」

「無駄よ。この子はもう動けない」

まるで狭い空間にでもおしこめられたかのように身動きする術を奪われた『魔女狩りの王』イノケンティウスは、轟々と燃え続ける事しかできない。

「何を、した……」

打ち消すわけでもなく、かといって何かをしたようにも見えない。しかし現実として『魔女狩りの王』イノケンティウスは拘束され、その力を封じられている。

そんなステイルの問いに、少女はクスリと笑みを浮かべ、ポケットの中から1枚のカードを取り出す。

そのカードには見覚えがあった。無いはずがない。それはステイルが『魔女狩りの王』イノケンティウスを生み出すためにバラ撒いていた刻印ルーンのカードの1枚。

「イノケンティウス 使用されているルーンは『松明』Kaunnaazと『神』Ansuuz。意味は『炎の神官』って所かしら？」

ひらひらと手に持ったカードを振りながら、そこに記された刻印ルーンを解説する少女。

「その名は15世紀末、魔女狩りや異端審問に力を入れた第213代ローマ教皇イノケンティウス8世の事ね。そして魔女の処刑は火炙りと相場が決まっている。これは炎が『浄化』の意味を持っているから。そんな彼の所業と炎による悪意の浄化 即ち敵性体の排除を組み合わせた魔術……と言った感じかしら？」

「ぐっ……」

少女の指摘にステイルは呻いた。

魔術を嗜んでいる者ならば、その刻印<sup>ルイン</sup>を目にすればこの程度の事は容易く読み解くことができる。

しかしそれを読まれたところでステイルにとっては大した痛手にはならない。

『<sup>イノケンティウス</sup>魔女狩りの王』の厄介なところは無数の刻印<sup>ルイン</sup>を以てそれを発現させていることだ。

ひとつの刻印<sup>ルイン</sup>だけで構築されたのであれば、その一つを排除されればその時点で終わってしまう。しかし無数に存在する刻印<sup>ルイン</sup>を一つ一つ排除するにはかなりの時間を必要とするため、その間に『<sup>イノケンティウス</sup>魔女狩りの王』が敵を捕らえ確実に排除する。

無論、そのためには準備にも相当な時間を必要とし手間がかかるというデメリットはあるが、元々『<sup>イノケンティウス</sup>魔女狩りの王』は拠点防衛用の魔術だ。その目的を考えればそれほど問題とはならないし、看破された程度で即座に如何にかなる代物でもない。むしろあの少年があの短い時間の中で、それを可能とする手段を構築したの方が異常なのだ。

それより問題なのは、それを見抜いたのが“学園都市に所属する人間”であるということだ。

科学側の人間が魔術に理解があるはずがない。それがこの世界における常識だ。無論、一部の 上層部に位置する人間はその存在<sup>超</sup>自体を知ってはいるが、内容までは理解してはいない。せいぜい自分<sup>能力</sup>達とは異なる異能である、その程度の認識だ。

しかし目の前の少女は正しく『魔術』を理解していた。

それはつまり『魔術』について相当な知識を保有しているということである。

いよいよもってステイルの中で、「学園都市が魔術を無力化する力を開発した」説が有力になってくる。

「ま、そんな事はどうでもいいんだけど……」

興味がないとばかりに少女は手にしていたカードを投げ捨て、  
「さすがにこのクラスの切り札を二枚も三枚も持っていないだろうし、コレも一体しか出せないみたいだしね。もうさすがに打ち止めでしょ？」

そう言っつて静かに近づいてくる少女にステイルは無言を貫く。

確かに少女の言葉通り、ステイルの持ち得る手札はもうほとんど切られている。他にも手札がないわけではないが、それらは補助的なものばかりで攻撃に用いるような手札は炎剣と『魔女狩りの王』<sup>インケンティウス</sup>だけであるのには変わりはない。そして今から新たにカードを作り出すなんて暇はない以上、魔術師ステイルにこれ以上の切り札は存在しない。だが、切り札がないことが「手段がないことには繋がらない。」

(なら、直接叩き込めばいいだけだ！)  
その手に炎剣を取り、近寄ってきた少女との距離を一気に詰めて襲い掛かる。

(とつた つ！)  
少女が反応できないうちに振るわれた炎剣は、確実に少女の身を焼き切る はずだった。

「な、」

振るわれた炎剣は確かに少女の体へと斬り付けられた。

しかしその切っ先が少女の肌に触れた瞬間、ピタリと停止しその肌を焼き切る事は叶わない。

( 違う。剣が止められてるんじゃない。止められているのは )

「残念無念、また来週っ！」

「~~~~ッ!？」

ステイルがその答えにたどり着く前に、大きく蹴り上げられた少女の足が男の急所を正確に捉えた。

その壮絶なる痛みに、思わずステイルは股間を抑え前かがみとな

って蹲る。

そんな苦悶に喘ぐ姿を、元凶たる少女は「ふふん」としてやりとりと言った笑みを浮かべ見下ろしている。

ちなみに、その少女も以前は同じ男であり、その痛みの何たるかを理解しているはずなのだが、そこに一切の遠慮も躊躇も存在しなかった。むしろだからこその一撃とも言える。

『変態には死を！』とでも言いたげな表情を浮かべた少女は、徐々にステイルの顔を覗き込み、

「まず詫びとくわ。私は上条君みたいに道理も理屈もすっ飛ばして魔術を打ち消すなんてデタラメな力は持ってないの」  
そう告げた。

「私の能力は『ベクトルの停止』。この世のあらゆるベクトルの量を0とし、『止める』ことの出来る能力。『燃える』って現象は、要は酸化反応だから。それによる発熱と発光が人の目には『燃えている』と認識されているわけ。なら『酸化』そのものを『止めれば貴方の魔術を打ち消すことができるって訳よ」

奇しくもステイルが最初にした予測は当たっていたのだ。

そしてその説明を裏付けるようにステイルの体はピクリとも動かない。動かそうとしてもその力を『止め』られる。

あらゆる力の停止ベクトル。そんなものが実在するのかと、ステイルは慄く。

「な、ならイノケンティウスは！」

酸化を止めているのであればイノケンティウスも消えているはずだ。消えて、そして新たに復活するはずだ。

「ああ、この子は単に消しただけじゃすぐに復活するみたいだから？ 周囲の気体を『止めて』、ちよつと籠の鳥になってもらっているだけよ」

酸素の流入自体は止めず、そこから『魔女狩りの王』が抜け出そ

うとしても即座にその穴を塞いで『止め』、外への脱出を防いでいるのだと語る。

それがどれほどの事なのかを正確に理解することは能力者でないステイルには不可能だ。しかし容易い事ではないことぐらいは予想がつく。

少なくとも目の前の少女の口調のように気安いものでは決してないはずだ。

「さて、そっちの質問に答えただから、今度はこっちが質問する番ね」

「質問、だと……」

「ええ、そうよ。必要悪の教会の魔術師さん」

「っ！？」

その言葉にステイルは思わず背後を振り返った。

それがその言葉を肯定することだとわかっていても、それを“あの子”に聞かれるわけにはいかなかったから。

「ビンゴ」

そんな声を聴きながら振り向いた先に見た光景にステイルは再度慌てる事になる。

視線の先には確かにインデックスが居た。しかしその体は冷たいアスファルトに倒れピクリとも動かない。

「ああ、安心していいわ。ただ気絶してるだけだから」

「な、に……」

「呼吸をね、ちょっと止めさせてもらったのよ。聞かれないんでしょ？」

そのために窒息させ気絶させたのだと。

(いつの間に！？)

思えば途中から彼女の声が聞こえなくなっていた。

インケンティウス

『魔女狩りの王』を出した時にも、その前の『紅十字』を放った

際にも。

「まさか、最初から……！」

「だと言ったら、どうする？」

だとすれば、今までの行動は全て彼女の手の手で踊らされていた結果だということになる。

ステイルを執拗なまでに挑発していたのも、魔術を打ち消した力をあの少年の『右手』だと錯覚させたのも、『インケンティウス魔女狩りの王』まで出させ、その全てを尽く防いだのも、インデックスを気絶させたことに気が付かせないための陽動だ。

そしてそれは全て先の問い　ステイル＝マグヌスが必要悪のネセサリー教会の魔術師である事を確認する、そのためだけに仕組まれたことなのだという事になる。

言い知れぬ怖気を感じ、ステイルは震えた。

“あらゆる力を止める能力”。確かにそれは恐ろしい力だ。正直すぐには対抗策が見当たらない。

しかし彼女の真の恐ろしさはそこじゃない。本当に恐ろしいのは、それを十全に活用し、自らの目論見を一切悟らせることなく、相手を意のままに操るその脳力だ。

魔術師同士の戦闘とは、得てして手の内の読み合いと駆け引き行う心理戦となる。

相手の魔術の正体を看破し、その弱点を探り、そこを正確に突く事で無力化し、敵を打倒する。これが魔術師同士の戦闘だ。

それ故、相手の意図や目的を探るのは基本中の基本となる。ましてや自分が誘導されている事に気付かないなど、魔術師として失格とも呼べる事態だ。

しかしステイルは気付けなかった。魔術師でもない、能力者風情に、気付けぬまま良いように踊らされたのだ。

目の前の少女をインデックスを助けに来た一般人と誤解し、その

後はあの少年と同じ力をもつ天敵だと錯覚させられ、その意識をすべて彼女に向けたまま、背後で起きていたことになど見向きもしなかった。させようとすら思わなかった。

言い訳をするのであれば、助けに来たはずの人物がまさか助け出すべき対象の身動きを奪う事なんて考えもしないことだ。

しかしその前提がそもそも間違っていたのなら？

この少女の目的が“インデックスの救出”ではなく、“ステイルに問いかける事”だったのならば。

その行動の全てに納得がいく。

そして少女は最初からそのつもりで動き、企み、実行し、ステイルをその手の上転がしていたのだ。

気付いた時にはもう遅い。全てが終わった後にようやくそうだったと気付かされるレベルの心理誘導。むしろこうして態々ネタ晴らしをしてくれなければ今を以ても気付けなかっただろう。

そしてステイルは今度こそ打つ手はなくなった。

身動きは一切取れず、僅かにでも動こうものなら即座に『停止』させられるだろう。『インケンテイル魔女狩りの王』も封じられ、その気になればインデックスにしたように呼吸を止めて気絶させられる。

いや、それができるのならそのままその先　文字通り『息の根』を止める事すら可能なのだ。

「化け物が……」

視線一つで、意識一つでいとも容易く人の命を奪い取るそれは、もはや人の領域を超えた力　化け物が持つべき力だ。

「そんな目で睨まれても、ね……」

少女はそう言って眉を顰めたが、ステイルは構わず睨み付ける。それ以外に出来ることなど何一つないのだから。

「まあ、いいわ。それより質問よ」

「質問、だと……？」

それは先ほどの問いで終わっているのではないか、と思ったステイルだが、すぐさま思い直した。

確かに少女はステイルをカマにかけ必要悪の教会の魔術師であることを知りえた。しかしそれはどちらかと言えばすでに知っていた事実の確証を得る行為であり、“質問”として投げかけられたものではない。

だとすれば、この少女が<sup>バケモ</sup>ここまでして聞きたい“質問”とはなんなのか。

僅かに興味がわいた。

「答えてくれる気になったみたいね」

まるでこちらの心を読んだかの様な言い回しに、ステイルの顔が苦々しくゆがむ。そう思うように仕向けられたのだと気付いたからだ。

この場合は完全にこの少女<sup>バケモ</sup>によって支配されていた。

苦し紛れにその顔に唾を吐き出すが、それは少女の肌に触れるより前に『止められ』、虚しく地へと落ちる。

そんな行為にも動じない少女は自らの喉元を指さし、

「あの子のここ……喉の奥の方に何か魔術的な刻印がなされているの、貴方知ってる？」

「こくいん、だと……！？」

ステイルの目が驚愕に見開かれる。

「知らないみたいね。見つけたのはうちの医者よ。私も見させてもらったけどルーンじゃなく、木星<sup>ユピテル</sup>を示す刻印だった。あの子と同じ必要悪<sup>ネセサリウス</sup>の教会の魔術師なら、何か知ってるのかと思っただけど……当てが外れたわね」

そんなものは知らない。そもそも喉の奥なんて場所、よほどの事がなければ見る必要もない場所だ。あえて覗こうとも思わなければ、一生目にする機会などありはしないだろう。

（そんな場所に、魔術的な刻印だと　？）



もし本当にそれがあるのであれば、教会が何らかの意図をもってつけたものに違いない。でなければ、わざわざそんな場所に施す必要なんてない。

「おそらくは『首輪』の類だと思っただけ……、知らないならどうしようもないわね」

「首輪？」

首輪、と言う聞き捨てならない言葉にステイルは思わず問い返していた。

「ええ。首輪よ」

「なぜ、そう思っただ……」

「なぜって、決まってるじゃない」

そう言っって少女は不敵に笑い、

「金の卵を産むガチヨウを野放しにする馬鹿はいないでしょ？」

さも当然といった様子で、ステイルにとって衝撃の事実を言い放った。

「放し飼いにするなら『首輪』の1つでもつけているはずよ。万が一、裏切ったときの保険にね」

そう言っって少女は通りの先に倒れているインデックスへと目を向ける。

「おそらく一定期間を過ぎると発動し、あの子に何らかの苦痛を与えるか、さもなければ物理的に頭を吹っ飛ばすとか……、そんな類のものじゃないかしら？」

「な、！？」

「驚くほどの事じゃないと思うけど？」

驚愕に声を失ったステイルに少女はさもあらんとばかりに答える。「万が一敵の手に落ちて『禁書目録』の知識を奪われでもしたら大変じゃない。そんな事になるくらいなら、いつそ……、なんて考えてもおかしくないと思わない？」

もしかすると遠隔操作も可能かもね、と少女は肩を竦めながら話を締め括った。

その内容にステイルは動揺を隠せない。

ありえない、なんて言えない。むしろ十分にありえる事だ。

『10万3000冊の魔導書の原典』なんて狂気の代物を、幼気な少女一人に記憶させ背負わせた連中なら、そんな残酷な方法を取る事など微塵も厭わないだろう。

完全記憶能力者はあの子一人ではない。ならば万が一、自らの手で失う事になっても、その時は別の完全記憶能力者たれかを使って新たな『インデックス禁書目録』を作り出せば済む話だ。多少の手間と時間がかかるが、敵の手に落ちるよりマシだと言える。

だが、もしそうならば。

ステイルはその事実を知らない。あの子に何かを仕掛けているなんて話は聞かされていない。

だが聞かされていないことが「仕掛けられていないことにはならない。

そして、そんな物騒なものが本当に仕掛けているのであれば、それを自分達に話すはずがない。

だとすれば、もしかすると。

「真偽の程については任せるわ。ヤバくなってもこっちには『イマジン殺し』があるしね」

「イマジン、ブレイカー？」

「『右手』の事よ、上条君の。わかってるでしょ？」

上条、と言うのがあの少年の事だとすれば、その意味は理解はできる。

ステイルの魔術を打ち消し、法王級の『歩く教会』すら破壊したその『右手』<sup>ちから</sup>ならば、あの子にかけられた『首輪』<sup>インデックス</sup>も破壊できるかもしれない。

だがそれを解っていないながら、わざわざステイルに問いただした理由は、

「ま、言いたいことは言えだし、そろそろ向こうも気になるから

」

そう言っただけ少女はニヤリと笑い、

「ごきげんよう、ステイル」マグヌス。またお会いしましょう？」

その右足がステイルの頭を撃ち抜いた。

(クソッ、初めから『コレ』が目的か……！)

薄れゆく意識の中で少女の真の目論見をようやく知ったステイルは、視界を掠めた黒い布地を臍気に捉えながら、闇の中へと意識を落としていった。

「あー、スカートで蹴りはマズかったかなあ……」

とりあえず地に伏せ気を失ったステイルの頭部を踏みつけながら、氷室はポリポリと頭を搔く。

とはいえ人並み程度の腕力しかない氷室では、一撃で彼の意識を刈り取ることなど出来ない。そのため頭を能力で固定したうえで、腕の3倍の筋力を持つ脚による一撃をお見舞いしたのだ。その結果はご覧のとおり。しかしスカートの中身を盛大にさらす事となったのは全くの誤算だった。

「うーん、やっぱ『超電磁砲』<sup>レールガン</sup>みたいに短パンでも履くべき？」

なんだかそれはそれで負けたような気がするのよね、と現状とは似つかないどうでもいい事を考えつつ、さらにもう一度ステイルの頭を蹴り飛ばしてから、ゆっくりとインデックスの元へと向かっていく。

そして倒れているインデックスがキチンと息をしていることを確

認し、ホッと安堵の息を吐くと、そのまま両手で抱え上げ、なんと気なしに遠くを見つめた。

「あとは上条君がしっかり聞き出してくれるか、ね……」  
既に終わっているのなら回収に向かう必要があるだろう。

取り合えずインデックスを病室に寝かし、それからかな、と今後の方針を立てつつ、氷室は夜の街をゆつくりと歩き出す。

そこでふと立ち止まり、

「期待してるわよ、ステイル」マグヌス。私が求める『回答』<sup>ピース</sup>を持って帰ってきてくれることを、ね」

倒れ伏すステイルにそれだけ告げると、今度こそ病院に向かい夜の街へと消えていった。

第11章 とある聖人と地獄円舞へエターナルロンド (前書き)

長いです。これまででおそらく最長です。

その上、原作とほぼ変わりません。

なので原作既読者は呼び飛ばしても問題ないと思います。

## 第11章 とある聖人と地獄円舞へエターナルロンド

「何度でも問います」

その言葉とともに『斬撃』が飛ぶ。

一瞬の内に放たれたその『居合斬り』は、目にも止まらぬ速度で10メートル先の地面を、<sup>アスファルト</sup>街灯を、<sup>アスファルト</sup>街路樹をバターのよう<sup>アスファルト</sup>に切り裂き、切り刻んだ。その内の宙を舞った握り拳ほどの地面の破片が上条の右肩を強打し、それだけで上条は吹っ飛ばされて気絶しそうになる。

上条は右肩を押さえながら、視線だけで周囲を見渡す。

一本。二本。三本、四本五本六本七本 都合七つの直線的な『刀傷』が平たい地面の上を何メートルにも渡って走り回っていた。様々な角度からランダムに襲う『刀傷』は、まるで鉄板を釘でデタラメに引っ掻いた跡のようにも見える。

チン、という刀が鞘に収まる音。

「魔法名を名乗る前に、あの子を保護したいのですが」

右手を刀の柄に触れたまま、女は何の感情を示さない無機質な声で問いかける。

インデックスを探し回る上条の前に突然姿を現した『神裂火織』と名乗るその女は、Tシャツに片側だけ大胆に切ったジーンズという幾分普通の格好に見える。だが、腰に巻いたウエスタンベルトから拳銃のようにぶら下がる二メートル以上の日本刀が一般人ではないことを示していた。

「私の七天七刀が織り成す『七閃』の斬撃速度は、一瞬と呼ばれる時間に七度殺すレベルです。人はこれを『瞬殺』と呼びます。あるいは『必殺』でも間違いいではありませんが」

上条は無言で、右手を押し潰す勢いで握りしめた。

この速度と威力、そして射程距離。間違はなくあの『斬撃』は普通じゃない。それどころかそもそも女の細腕である馬鹿みたいな刀

を振り回す事はおろか、普通なら抜く事すらできないはずだ。

だが、実際に『斬撃』は放たれた。それも一瞬で七回もの『居合斬り』を、その気になれば七回が七回とも上条の体を両断できる『必殺』の七斬撃を放ったのだ。

にもかかわらず、刀が鞘に収まる金属音はただの一度。

それは明らかに普通じゃない攻撃。通常ではありえない現象。常識ではありえない、それを可能とする力 即ち『異能』。

だがそれは超能力ではない。超能力とは異なるもう一つの『異能の力』。

(魔術……)

それを扱うステイルと同じ魔術結社に所属する人間。そして彼と同じくインデックスを付け狙う、上条当麻の敵。

しかし、それが『異能の力』によるものならば上条にはそれを打破する『力』がある。だからあの『太刀筋』に

「ステイルからの報告は受けています。あなたの右手は何故か魔術ディスペルを無力化する。ですが、それはあなたが右手で直接振れない限り不可能ではありませんか？」

そう、触れる事が出来ない限り上条の『右手』は何の意味も持たない。

ただ速いだけならば問題はない。斬撃の来る方向を先読みすれば打ち消すことができる。だが神裂火織の『七閃』の太刀筋は変幻自在で、上条が『幻想殺し』イマジンプレイカーを使おうものなら、七つの太刀筋は迷わず上条の腕を輪切りにするだろう。

(くそつ、こんなところで立ち止まってる暇なんてないってのに……)

視界の隅の一角が夜にもかかわらず茜色に染まっていた。その直前に響いた爆音。おそらくステイルという魔術師が放つ炎によるものだ。燃え盛る炎が夜空を照らし、夕方の様に空を染め上げているに違いない。

そしてそこには間違いなくインデックスがいる。狙われて、追われている。

上条当麻はまだ己の答えを出してはいない。

しかしだからと言って助けに行かないという道理にはならない。

答えが出ていないからこそ、上条当麻には“まだ”インデックスを『助ける』という選択を行う権利がある。

ならば上条当麻にとって助けに行くのは当然のこと。

しかしそこに行こうとすれば、

「幾度でも問います」

神裂の右手が、静かに腰の七天七刀の柄へと触れる。

(来る)

上条の頬に冷たい汗が伝う。

上条をあの場合へ行かせまいと放たれる神裂の『七閃』は決して上条本人を傷つけることなく、周囲を切り裂き足止めするだけに留まっていた。

しかしその『気まぐれ』がいつまで続くかわからない。神裂が本気で殺しかかってくれば上条は一瞬で文字通り八つ裂きにされるだろう。何十メートルという射程距離、街路樹をまとめて輪切りにする破壊力を考えれば、後ろに逃げたり何かを盾にする、という考えは自殺行為にしかならない。

ならば活路は一つ。

「魔法名を名乗る前に、彼女を保護させてもらえませんか？」

その言葉が言い終わるよりも早く、震える膝に活を入れ、地面に張り付いた両足を無理矢理引き剥がすように、一步前へ踏み込む。

神裂の片眉がピクンと動く前に、上条は弾丸のように次の一步を爆発させた。

「おおっ……あああああああ！！」

「何があなたをそこまで駆り立てるのかわかりませんが……」



神裂は、呆れよりも、むしろ哀れみの色が混じるため息を吐き出して、

七閃。

周囲に漂っていた砂埃が上条の前で轟！ という風の唸りと共に八つに切断された。

「あ、オオツ！！」

『右手』で触れれば消せる 頭では理解していても、心がとつさに回避を選んだ。頭を振り回すような勢いで身を屈め、頭上を通り過ぎる七つの太刀筋に心臓が凍える。

計算も勝算もない。避けられたのは単に偶然。たまたま運がよかっただけ。

だがそれを実感する事もなく、上条はさらに一步踏み出す。

七閃がどれだけ得体の知れない攻撃だとしても、その基本は『居合斬り』だ。鞘走りを滑走路にして、一撃必殺の斬撃を繰り出す古流剣術。逆に言えば刀身が鞘から抜けている間は居合斬りを使えない無防備な『死に体』という事だ。

残りは一步。その一步で神裂の懐に飛び込むことができる。

そしてその一步を飛び込んでさえしまえば 勝てる。

そう思った上条の最後の余裕は、チン、という小さな音によって木端微塵に撃ち砕かれた。

鞘に納めた刀が立てる あまりにも速すぎる、ほんの小さな金属音に。

七閃。

「ち、くしょ……あああああああ！！」

目前で、ゼロ距離とも呼べる間近で放たれた斬撃に上条はとつさに右手の拳を突きだす。

それは防御とか攻撃とかそういった意図で出されたものではなく、ただの反射。目の前にボールが投げ込まれたとき、とっさに手が出してしまうような、そんな条件反射による行動。

しかしそれが『異能の力』によるものならば、上条の右手は神や吸血鬼の力だつて消し飛ばす。

ましてやゼロ距離から放たれた七つの斬撃は一つに束ねられた状態<sup>イマジンフレ</sup>で上条に襲い掛かってきている。これならばたった一度の幻想殺<sup>イマジンフレ</sup>し<sup>イカ</sup>で七つ全てを吹き飛ばすことができる。

はずだった。

「な……ッ!?!」

消えない。幻想殺<sup>イマジンフレイカー</sup>しを以てしてもこの馬鹿げた太刀筋は消えてくれない。

太刀筋が拳を作る指の皮膚にめり込んでいく様を感じ、とっさに手を引こうとする。だが間に合わない。そもそも飛んでくる日本刀の一撃に自ら拳を差し出し、すでに太刀筋は上条の右手に触れてしまっているのだから。

神裂はそんな上条の姿を見てほんのわずかに目を細めて、

次の瞬間、辺り一面に肉を引き裂く水っばい音が鳴り響いた。

上条は血まみれの右手を左手で押さえつけ、その場で膝を折って屈んだ。

驚く事に、上条の五本の指はまだ切断されずに繋がっている。

もちろんそれは上条の指が特別頑丈な訳でも、神裂の腕が鈍い訳でもない。単に上条の指が千切れる前に神裂が手加減に加減を加え見逃した、というだけの話だ。

上条は膝をついたまま、頭上を見上げる。

新円の青い月を背負う神裂の前に、蜘蛛の巣のように張り巡らされた赤い『何か』があった。

上条の血が付いたことで初めて目に見えるようになったそれは七本の、細い鋼系<sup>ワイヤー</sup>。

「なんて、こつた……」

上条は齒噛みして、

「……そもそも魔術師じゃなかったのか、アンタ」

「言ったはずです。ステイルから話を聞いていた、と」  
神裂はつまらなそうに呟いた。

「これで分かったでしょう。力の量ではなく質が違います。ジャンケンと同じです。あなたが1000年グーを出し続けた所で、私のパ―には1000年経つても勝てません」

異能の力なんて使っていない、『七閃』の正体はただの手品<sup>トリック</sup>。刀を抜いたと見せかけ、その仕草に紛れ七本の鋼系<sup>ワイヤー</sup>を操っていただけ。終わりに鞘に納める音を僅かに鳴らせば、本当に抜いたのだと錯覚させる事が出来る。

そして異能の力でない以上、上条の幻想殺<sup>イマジンプレイカー</sup>しは通用しない。攻撃を打ち消せず、上条の拳が神裂を捉えるよりも神裂<sup>ワイヤー</sup>が鋼系を操る速度の方が速い以上、上条当麻に勝ち目は無い。

「なら、その刀は……」

「この七天七刀は飾りではありませんよ。『七閃』を潜り抜けた先には真説の『唯閃』が待っています」

つまり『七閃』は前座にすぎない。本命はその後に待つており、前座すら潜り抜ける事が出来ない上条は、その本命には絶対に敵わない、と。

「それに何より 私はまだ魔法名を名乗ってすらいません」  
名乗っていないから魔術は使わない。名乗ってすらいないから殺す価値もない。

それを聞き、上条は黙って血まみれの拳を、握る。

「名乗らせないでください、少年」

そう言つて神裂は、唇を噛む。

「私は、もう二度とアレを名乗りたくない」

握った拳が震えた。コイツはスタイルとは明らかに違う、一発芸だけの人間ではない。基本の基本、基礎の基礎、土台の土台から上条とは全く作りが違う人間なのだ。

それでも、

「……、降参、できるか」

拳を握る。もう、感覚もない右手を、強く握りしめる。

「何ですか？ ……聞こえなかったのですが」

「うるせえつつつたんだよ、ロボット野郎!!」

上条は血まみれの拳を握りしめ、目の前にいる女の顔面を殴り飛ばそうとする。

が、それより前に神裂のブーツの爪先が上条の水月みづおちに突き刺さる。肺に溜め込んだ空気が全て口から吐き出されると同時、顔の横を七天七刀の黒鞘で横殴りにされ吹き飛ばされる。竜巻のように体が回り、上条は肩から地面へと叩きつけられた。

痛みに呻き声を上げる前に、上条は自分の頭を踏み砕こうとするブーツの底を見た。

とつさに避けようと、横に転がった所で、

「七閃」

声と同時に七つの斬撃が上条の周囲の地面アスファルトを粉々に砕き、その破片が一斉に上条へと豪雨のように叩きつけられる。

「ぐっ……あ……ッ!？」

まるで集団リンチを受けたような激痛に、上条はその場でのた打ち回る。

「もう、良いでしょう？ あなたが彼女にそこまでする理由はない

はずです。ロンドンでも十指に入る魔術師を相手に30秒も生き残れば上等です。それだけやれば彼女もあなたを責める事はしないでしょう」

「……、」

そうだろう、とほとんど朦朧とする意識の中で上条は頷いた。

インデックスは上条の事を責めたりなどしない。けど、その代り自分を責めるのだ。自分のせいだと、そう言っただけ。

そうしてずっと誰にも頼らず、誰もを巻き込もうとせず、ただ一人耐え続けるからこそ、上条当麻は諦めたくないのだ。

あんな辛そうな顔で、あんな完璧に微笑む少女を、助けてやりた  
いと。

（ああ、そうだよ。簡単な事じゃないか……）

答えは出ていない。けど、その答えを導くための式なんて、こんな単純で簡単な事なのだ。

だから上条当麻は動く。死にかけの虫みたいに、壊れかけの拳を無理矢理握りしめて。

「……何でだよ」

上条は崩れ落ちたまま小さく呟いた。

「アンタ、すぐくつまらなそうだ。アンタ、あのステイルと違ってヤツとは違うんだろ。アンタ、敵を殺すの躊躇ってんじゃないか。その気になれば全部が全部、俺を必殺できたくせに、“殺せなかった”」

ステイル「マグヌスと名乗ったルーラの魔術師は、そんな躊躇いなど微塵もなかった。問答無用で攻撃を仕掛け、摂氏3000度の炎で塵一つ残さず消くそうとしてきた。

だが目の前にいる神裂火織はそうじゃない。

彼女は何度も、何度も聞いてきた。

魔法名を名乗る前に終わらせたい、と。

「アンタは、“そこで躊躇ってくれるだけの常識ある『人間』”なんだろ？」

「……、」  
神裂火織は黙り込んだ。激痛で意識が朦朧とする上条はそんな事にも気付けない。

「なら、分かんたろ？ 寄って集って女の子が空腹で倒れるまで追い回して、刀で背中を斬って、そんな事、許されるはずないって、もう分かっちゃまってんだろ？」

血を吐くような言葉に、神裂は何もできずに耳を傾け続ける。

「知ってんのかよ。アイツ、テメエらのせいで一年ぐらい前から記憶がなくなっちゃまってんだぞ？ 一体全体、どこまで追い詰めりゃそこまでひどくなっちゃまうんだよ」

返事は、ない。

上条には、分からない。不治の病の子供のためでも良い、死んでしまった恋人のためでも良い。それこそ氷室の言うような権力を求めるためでも良い。認めたくはないが、何かそう言った『望み』があつてインデックスを狙うのなら、まだ分かる。許せる許せないは別として、理解はできる。

けど、コイツは違う。

コイツは『組織』の一人として、組織の“誰か”に言われたたった一言だけで、一人の女の子を追い駆け回して背中を斬りつけたのだ。

そこに個人的な理由はない。個人的な感情もない。仕事だから、命令だから、そんな下らない『理由』しか存在しない。

「何で、だよ？」

上条は繰り返した。歯を食い縛るかのように、

「俺はさ、テメエの命張って、死に物狂いで戦って。それでもたつた一人の女の子も守れねーような負け犬だよ。テメエらに連れ去られるのを、指を啜えて地面に這いつくばってみている事しかできねー弱者だよ」

ましてや馬鹿で、考えなしで、脳タリンで、氷室が居なかったら取り返しのつかない過ちを犯していたかもしれないぐらい馬鹿でア

亦な無能力者だ。

けど、それを教えてくれた氷室でさえ、組織の前には退くしかなかった。どんなに悔しくても、苦しくても、ただの学生に出来る事はないと、そう諦めざるを得ないことを理解して、心を殺して諦めようとしていたのだ。

「だけど、アンタは違うんだろ？」

彼女は組織の人間だ。その上、ロンドンでも十指に入ると自称していた。それはおそらく嘘ではないだろう。少なくとも有数の実力者であるのは間違いない。それはつまり、彼女が魔術結社の中でも相応の地位にいる人間だという事だ。

それだけの地位が、それだけの実績が、

「それだけの力があれば、誰だって何だって守れるのに、何だって誰だって救えるのに……」

なのに、どうして、

「何だって、そんな事しかできねえんだよ！」

悔しかった。

それだけの力があれば、上条は守りたいモノを全て守り抜く事が出来ると思えるのに。

悔しかった。

そんなにも圧倒的に強い人間が、女の子一人を追い詰める事にしか力を使えない事が。

悔しかった。

まるで、今の自分はそれ以下の人間だと言われているみたいで。

悔しくて、涙が出るかと思った。

長い、長い沈黙の後、

「……、私。だって」

神裂はポツリと呟いた。まるで心の内から滲み出した雫が、静かに、ゆっくりと、地面へと落下していくように。

「私だって、本当は彼女の背中を斬るつもりはなかった。あれは彼女の修道服『歩く教会』の結界が生きていると思ったから……絶対

に傷つくはずがないから斬っただけ、なのに……」

予想外だった、という声を震わせる神裂の言葉に、上条の脳裏に氷室の予想の一つが過ぎる。

そのスタイルって魔術師が彼女の護衛である可能性もあり得るかもしれない。

ネセザリウス 必要悪の教会側からしてみれば、何が何でも彼女を『回収』

しなくちゃならない。

だけど聞く耳を持たず逃げ回る相手を『回収』する術は、もう実力行使しか残されていないんじゃないかしら？

「まさか、アンタ……」

「……私の所属する組織の名前は、あの子と同じ、イギリス教会の中にある ネセザリウス 必要悪の教会」

「！？」

「彼女は、私の同僚にして

大切な親友、なんです

よ」

上条には理解できなかった。

氷室にその可能性があると言われても、そんな事ありえない、と心のどこかで否定していた事実が、今日の前を示されたことに、脳が受け入れる事を拒絶している。

けど、神裂火織の表情は辛く、苦しく、心の底から今の現状を嘆



いているようにしか見えず、  
ならその話は嘘ではなく、真実なのだと、上条は頭でなく心で理  
解した。

だからこそ解せない。

「なんで……」

上条の問いに神裂は、血を吐くように、

「こうしないと彼女は生きていけないんです。……死んで、しまっ  
んですよ」

「し、ぬ……？」

「そうです」

淡々と、けど泣き出しそうな表情で頷く神裂の言葉に上条の心が  
一気に冷え固まった。

戦闘で高まった熱も、悔しさで震えていた激情も、何もかもが冷  
え切って、ただ示された言葉を否定しようと心が閉ざされようとし  
ている。

そんな上条を無視して、神裂は切々とその心の内を吐露する。

「完全記憶能力、という言葉に聞き覚えはありますか？」

「ああ、10万3000冊の正体、だろ」

上条は切れた唇を動かし、

「……全部、頭の中に入ってたんだってな。言われたって信じられね  
ーよ。一度見たモノを残さず覚える能力なんて。だって、馬鹿だろ  
アイツ。とてもじゃねーけど、そんな天才には見えねえよ」

完全記憶能力そのモノは否定しないが、それがインデックスに備  
わっているとは到底思えない。

「……、あなたには、彼女がどんな風に見えますか？」

「ただの、女の子だ」

即答だった。そのことに神裂は驚きよりも、むしろ疲れたような  
表情をして、ポツリと言った。

「ただの女の子が、一年間も私達の追撃から逃れ続ける事ができる

「と思えますか？」

「……………」

「ステイルの炎に、私の七閃と唯閃　魔法名を名乗る魔術師達を相手に、あなたのように異能に頼ることなく、私のように魔術にすがる事無く、ただ自分の手と足だけで逃げる事が出来ると？」

神裂は自嘲するように笑い、

「たった二人を相手にするだけで、これです。必要悪の教会という

『組織』そのものを敵に回せば、私だって一ヶ月も持ちませんよ」

そう、上条ですら、イマジンプレイカー幻想殺しという神の奇跡さえ一撃粉碎できる

能力をもってさえ、4日も逃げ続ける事が出来なかったのに　彼女が。

「アレは、紛れもなく天才です。扱い方を間違えれば天災となるレベルの」

神裂は、そう断言し、

「うっえ教会が彼女をまともに扱わない理由は明白です。怖いんですよ、誰もが」

「それでも……………、それでもアイツは、人間だよ。道具なんかじゃねえ、そんな呼び名が……………許されるはずがねえだろ……………ッ！」

「そうですね」

神裂は頷く。

「その一方で、現在の彼女の性能は凡人とほぼ変わりません」

「……………」

「彼女の脳の85%以上は、インデックス禁書目録の10万3000冊に埋め尽くされてしまっているんですよ。……………残る15%をかるうじて動かしている状態でさえ、凡人とほぼ変わらないんです」

確かにそれはすごい話だろうが、今はもっと先に知りたい事がある。

「……………だから、何だよ。それがどうしてインデックスを追い回す理由になるんだよ！」

「そうしなければ、インデックスが死んでしまうからですよ」

今度こそ、ハッキリと上条は聞いた。

拒絶する心の壁を貫いて、神裂の引き裂くような叫びに撃ち砕かれて、強制的に理解させられた。

「言ったでしょう。彼女の脳の85%は10万3000冊の記憶のために使われている、と」

神裂は小刻みに肩を震わせながら、

「ただでさえ、彼女は常人の15%しか脳を使えません。並みの人間と同じように『記憶』していけば、すぐに脳がパンクしてしまうんです」

「そ、んな……」

信じられない。信じたくない。そんな思いが、上条に『否定』を選択させる。

「だって、だって、おかしい。お前、だって、残る15%でも、俺達と同じだって……」

「はい。ですが、彼女には私達と違うモノがあります。完全記憶能力です」

神裂の声から少しずつ感情が消えていく。

「そもそも、完全記憶能力とは何ですか？」

「……一度見たモノを、絶対に忘れない、能力、だろ？」

「では、『忘れる』という行動は、そんなに悪い事ですか？」

「……、」

「人間の脳の容量は、意外に小さい。人間がそれでも100年も脳を動かしていられるのは、『いらぬ記憶』を忘れる事で脳を整理しているからです。あなただって、一週間前の晩御飯なん

て覚えていないでしょう？ 誰だって、知らない間に脳を整理させる。そうしなければ生きていけないからです」

ところが、と神裂は凍えるように告げる。

「彼女にはそれが出来ない」

完全記憶能力者だから、と。

「街路樹の葉っぱの数から、ラッシュアワーで溢れる一人一人の顔、空から降ってくる雨粒の一滴一滴の形まで……『忘れる』事のできない彼女の頭は、そんなどうでも良いゴミ記憶であつという間に埋め尽くされる」

神裂の声が凍る。

「元々、残る15%しか脳を使えない彼女にとって、それは致命的なんです。自分で『忘れる』事のできない彼女が生きていくには、誰かの力を借りて『忘れる』以外に道はないんです」

そんな話、聞いていない、と上条は否定したかった。だって氷室は『思い出せなくなる』から問題ないのだと、そう言っていたではないか、と。

けど同時に思い出す。氷室は『記憶』そのものは残るのだと、そう言っていた事を。呼び出せないだけで、記録はされているのだと。つまり『思い出せなく』ても『忘れて』はいないのだから、『記録』は脳に蓄積されていき、そして何れ一杯になって

パンクする。

「じゃ、じゃあアイツが記憶を失ってるのって……」

「ええ、そうです」

神裂は上条の問いに小さく頷き、

「私達が“消しました”」

どうやって、と問う必要はなかった。彼女は魔術師だ。ならその方法は一つしかない。

そして、そんな彼女が何度も名乗りたくないと言った『魔法名』。

それは殺し名であると共に、魔術師が“魔術を使う際に名乗る”名前。

つまり神裂は、その名を名乗って同僚の、親友の、インデックスの記憶を“消した”。

これはそういうお話。

「……、いつまで、だ？」

「記憶の消去は、きっかり一年周期に行います」

神裂は疲れたように息を吐き、

「……あと3日が限界です。早すぎても遅すぎても話になりません。ちょうどその時でなければ記憶を消すことはできないんです。……あの子の方も、予兆となる、強烈な頭痛が現れていなければ良いのですが」

上条はゾツとした。確か、インデックスは一年程前から記憶を失っている、と言っていた。

そして、頭痛。上条はてつきり、手術後の後遺症か何かだと思っていた。

けど、そうじゃなかったら？

もう彼女は、いつ頭が壊れてもおかしくない状態で動き回っていただけ、だったら？

「分かって、いただけましたか？」

神裂火織は言う。その瞳に涙はない。そんな安っぽい感情表現は当の昔に忘れてしまったとでも言うように。

「私達に、彼女を傷つける意思はありません。むしろ、私達でなければ彼女を救う事はできない。引き渡してくれませんか、私が魔法名を名乗る前に」

「……、っ」

上条の脳裏にインデックスの顔が一瞬過ぎり、奥歯を噛むように目を閉じた。

「それに、記憶を消してしまえば彼女はあなたの事も覚えていませんよ。今の私達を射抜く目を見れば分かるでしょう？ あなたがどれだけ彼女を想った所で、目覚めた後の彼女には、あなたの事は」

10万3000冊を追う天敵』にしか映らないはずですよ。そんな彼女を助けた所で、あなたにとって何の益にもなりませんよ」

「……益？」

その言葉に、上条は違和感を覚えた。

「何だよ、そりゃ……」

違和感は一瞬で爆発する。さながら、ガソリンに火を放つように。

「何だよそりゃ！ ふざけんな！ アイツが覚えているか覚えてないかなんて関係あるか！」

そんなものは関係ない。上条当麻がインデックスを助ける理由はただ一つだ。

「いいか、分つかんねえようなら一つだけ教えてやる。俺はインデックスの仲間だ、今までもこれからアイツの味方であり続けるって決めたんだ！ テメエらお得意の聖書に書かれてなくなつて、これだけは絶対なんだよ！！」

そう、どんな結末を迎えようが、どんな地獄に落とされようが、上条当麻はインデックスを見捨てる事なんてできない。どこに居ようが、どんな状況であろうが、上条当麻はインデックスの味方になり、助けられることならば助け出す。それだけは絶対だ。必ずだ。答えなんて関係ない。それだけは何があっても変わる事のない、ただ一つの真理だ。

「なんか変な話だと思つたぜ、単にアイツが『忘れてる』だけなら全部説明して誤解を解きや良いだけの話だろ。聞く耳持たねえつてんなら、聞くまで説明し続けりゃいいだけの話だろ！ 何で誤解のままにしてんだよ、何で敵として追い回してんだよ！ テメエら、なに勝手に見限つてんだよ！ アイツの気持ちを何だと

「うるっせえんだよ、ド素人が!!」

上条の怒りが、真上から襲い掛かってきた神裂の咆哮によって押し潰された。

「知ったような口を利くな!! 私達が今までどんな気持ちでの子の記憶を奪ってきたと思ってる!？」

言葉遣いも何も、全てを剥ぎ取った剥き出しの感情が上条の心臓を握り潰そうとする。

「あなたはステイルを敵視しているようですが、アレが一体どんな気持ちであの子とあなたを見ていたと思ってるんですか!? どれほどの決意の下に敵を名乗っているのか! 大切な仲間のために泥を被り続けるステイルの気持ちか、あなたなんかに分かるんですか!?!」

「な……、」

あまりの豹変ぶりに驚いて声をあげる前に、倒れた上条の脇腹がサッカーボールのように蹴り飛ばされた。何の手加減もない一撃に、上条の体が浮いて、地面に落ち、2、3メートルも転がされる。

腹の中から口の外へ、一気に血の味が溢れかえる。

だが、激痛にのた打ち回るより先に、頭上の月を背に神裂が飛びかかってきた。

「……!?!」

ゴグギ、という鈍い音。

七天七刀の鞘、その平たい先端が、ハイヒールの踵のように上条の腕を押しつぶしていた。

けれど、悲鳴をあげる事すら許されない。

上条の目の前には、血の涙でも流しかねない、神裂の顔。

恐い。

七閃でも唯閃でも、魔術師もロンドンで十指に入るといふ実力も

関係なく、

これほどまでに『人間』の感情をぶつけられる事が、上条は恐い。

「私達だって頑張ったよ、頑張ったんですよ！」

七天七刀の鞘が横殴りに叩きつけられる。

「春を過ごし夏を過ごし秋を過ごし冬を過ごし！」

一撃、二撃、三撃、四撃、

「思い出を作って、忘れないようにたった一つの約束をして！」

右に、左に、力任せに振るわれる七天七刀の鞘がボロボロの上条を更にスタボロにしている。

それでも神裂の攻撃は止まらない。思いの丈を全てぶつけるかのごとく、上条の体を打ち据える。

「日記や写真アルバムを胸に抱かせて！」

腕を、脚を、腹を、胸を、顔を　　次々と降り注ぐ鈍器が体

のあちこちを潰していく。

「……、それでも、ダメだったんですよ」

ギリ、と奥歯を噛みしめる音が聞こえて、

ピタリ、と神裂の手が止まった。

「一から思い出を作り直して、何度繰り返しても、家族も、親友も、恋人も、全て……ゼロに還る」

やるべきことはやったと。すべてやって、やりつくして、それでもなおその望みは叶わなかった、と。

「私達は……もう耐えられません。これ以上、彼女の笑顔を見続けるなんて、不可能です」

あの性格のインデックスにとって、『別れ』は死のような苦痛だろっ。

それを何度も何度も味わっていく、地獄のような在り方。

死ぬほどの不幸と、直後にそれを忘れて再び決められた不幸へ走っていく無残な姿。

永遠に終わらない、地獄の円舞。



だから、神裂達は残酷な幸福でめいを与えるより、できうる限り不幸を軽減する方法を選んだ。

初めから失うべき『思い出』を持たなければ記憶を失う時のシヨツクも減る。

だから、親友を捨てて『敵』である事を認めた。

インデックスの思すべてい出を黒く塗り潰す事で。

インデックスの地獄さいじくを、少しでも軽いものにしようとして。

「ふ、ざけんな……」

それを聞いてなお、上条当麻は奥歯を噛み締め、絞り出すように呻いた。

「……ふざけんな！」

気持ちは分かる。きつと足掻けるだけ足掻いたのだろう。悲しみを堪えて、記憶を消し続けながらも、それでも『記憶を消さずに済む方法』をずっと探し続けたのだろう。上条だってそうする。そしてそれはたったの一度も叶わなかったことも、分かる。

「だけど、それは、」

「んなモンは、テメエらの勝手な理屈だろうが！」

諦めたのだ。打てる手をすべて打ち尽くして、それでも叶わなかった事に疲れ、諦めたのだ、コイツらは。

「けど、それは、」

「インデックスの事なんざ一瞬も考えてねえじゃねえか！ 笑わせんじゃねえ、テメエの臆病のツケをインデックスに押し付けてんじやねえぞ……！」

この一年間、インデックスは誰にも頼れずたった一人で逃げ続けてきた。

それが一番正しかった選択だなんて、絶対に認めない。認められない。認めるわけにはいかない。

「じゃあ。他に……どんな道があったと言っんですかッ！」  
神裂の七天七刀が、上条の顔面目がけて思いっきり振り下ろされる。

それを、上条はボロボロの右手を動かし、顔面を襲う前に握って食い止める。

もう、こんな魔術師は恐くない。

もう、こんな魔術師に委縮することはない。

体は、動く。

動く！

「テメエらがもう少し強ければ……」

上条は、歯を食い縛り、

「テメエらがウソを貫き通せるほどの偽善使用フォックスワードだつたら！」

もう砕けている左腕を無理矢理に動かして、さらに鞘を掴み、

「一年の記憶を失うのが怖かったら、次の一年にもっと幸せな記憶を与えてやれば！」

その鞘を支えに、ボロボロの体を無理矢理使って起こし、

「記憶を失うのが怖くないぐらいの幸せが待っているって分かっていたら、もう誰も逃げ出す必要なんざねえんだから！」

全身の至る所から血が噴き出すのも構わずに、

「たったそれだけの事だろうが!!」

立ち上がる。上条当麻は立ち上がる。

「その、体で……戦つつもりですか？」

「……、うる、せえよ」

「戦つて、何になるんですか？」

既に立っている事すら奇跡と言える上条の気迫に、神裂はたじろぐ。

「たとえ私を倒した所で、背後には必要悪の教会ネセサリウスが控えています。私はロンドンで10本の指に入る魔術師と言いましたが、それでも上はいるんですよ。……教会全体から見れば私など、こんな極東の島国に出張させられるような下っ端にすぎません」

それはそうだろう。

彼女がインデックスの仲間だと言うなら、彼女を道具として扱う教会のやり方に反発したはずだ。そこで反発しきれなかったという事は、それだけの力の差を示している。

それでも、

「うるっ……せえつつつてんだろ!!」

ガチガチと、今にも死にそうな体を無理矢理に動かして睨み付ける上条に、ロンドンでも十指に入る魔術師は一步後ろへと下がった。

「んなもん関係ねえ!」

そう、関係ない。簡単な話だ。ひどく単純な話なのだ。

上条は心の中でこれまでグジグジと悩んでいた自分を嘲笑う。

その上で、告げる。目の前にいる人物に語ると共に、自らに言い

聞かせるように。

「テメエは力があるから、仕方なく人を守ってんのかよ！」

上条はボロボロの足を一步前へと踏み出す。

「違うだろ、そうじゃねえだろ！ 履き違えんじゃねえぞ！ 守りたいものがあるから、力を手に入れたんだだろうが！」

ボロボロの左手で、神裂の襟首を掴んで、

「テメエは何のために力をつけた？」

ボロボロの右手で、血まみれの拳を握り、

「テメエは、その手で誰を守りたかった！？」

力が出ない拳を、神裂の顔面へと叩き込む。威力もなく、むしろ殴った上条の拳の方がトマトみたいに血を噴き出す。

それでも、神裂は投げ出されるように後ろへと倒れ込んだ。手を離れた七天七刀が、くるくると回転して地面に落ちた。だがそんな事には構わず、上条はさらに一步踏み出す。

「だったら、テメエはこんな所で何やってんだよ！」

崩れた神裂を見下ろすように、

「それだけの力があって、これだけ万能の力を持っているのに……」

グラリ、と上条の上体が揺れる。

それでもなお構わず、上条は、

「何でそんなに、無能、なんだよ……」

バタリ、と上条の体が地面に崩れ落ちる。

(起き、ろ……反撃が、くる……)

視界が暗闇に染まる。

上条は出血多量で視力も回復しない体を無理矢理に動かして、神裂の反撃に備えようとした。

なのに、体は指一本を、イモ虫のように動かすのが精一杯で。

しかし、反撃はこない。

こない。

**第12章 とある終幕への前奏序曲へプロローグ（前書き）**

前話がほぼ原作通りのため、既読者用に二話同時投稿。

いよいよ『禁書目録編』も最終幕へと突入です！

## 第12章 とある終幕への前奏序曲へプロローグ

「体の具合はどうです?」

近寄ってきた神裂の言葉に、ステイルは紫煙を吹かしながら答えた。

「問題ないよ。頭を単に思いっきり蹴り飛ばされただけだからね」

「……そう、ですか」

神裂にしてみれば、その事自体が驚きだった。

昨夜、上条と言う少年と戦い、彼を半殺しと呼んでいい程にボロボロにした後、一向に姿を現さないステイルを探してみれば、路上で気を失って倒れている姿を発見したのだ。

その3日前にも同じような出来事があったが、その時とは状況も戦況も全く異なる。

対策は万全で、万に一つの抜け目もなく準備を怠っていない。その上、彼を打ち破った正体不明の力をもつ少年の相手は神裂自身ができることで、その力を無意味とし、見事打ち倒した。

ならばステイルには、障害となる敵はおらず、インデックスを追い詰め、適当なところでわざと逃がす　　そういう手筈となるはずだった。

だが結果はステイルが返り討ちに合うというもの。

「……何が、あったのですか」

「化け物だよ」

「ばけもの?」

そうさ、と忌々しげな表情を浮かべるステイルの様子に、神裂はさらに首を傾げる。

「アレは、少年の『右手』以上の化け物だ」

「それほどの相手がこの学園都市に?」

正直なところ、神裂はそれを信じる事なんてできなかった。

超能力。魔術と対を為すもう一つの『異能の力』を、ここ学園都市では人為的に植え付け、その研究を行っている事は神裂も知っている。

それは“才能のない”者が求めて掴んだ力たる『魔術』とは異なり、完全にその人物の“才能”に由来する力で、場合によっては魔術すら凌ぐほどの力を発揮する事もある。

しかし、この学園都市における超能力者とは基本的に単なる学生だ。ましてや、あくまでも彼らは『研究対象』でしかない。『力』を使う訓練は受けていても、それを使って『戦う』ための訓練は受けておらず、そんな『戦闘』とは無縁のただ『力』があるだけの学生に、戦う事を目的とした神裂達魔術師が負けるはずがない、という自負がある。

確かにステイルは、そんな能力者の少年に一度は敗北した。しかしそれは『魔術を打ち消す』という突拍子もない、理不尽かつ予想外の力があつたからだ。

だが、その存在を知り、適切な対処をとれば、昨夜の神裂のように圧倒する事など容易い。異能の差はあつても、性能の差は如何ともしがたい溝があるのだから。

そしてそんな“例外”でもない限り、例え初見の相手であつたとしても、異端狩りを主とするイギリス清教ネセザリウス必要悪の教会の魔術師に敵う相手がいるはずもない、と確信している。

だからこそ、ステイルの答えは神裂にとって予想外のものだった。「病院にあの子を運び入れた少女がいただろう？」

「はい。……て、まさか、その少女が!？」

「そうさ。なんでも“あらゆる力を止める能力”とか言ってたな」

「止める能力、ですか……」

「ああ。正直信じたくはないんだが……、実際に僕の炎も、イノケンティウスも、僕自身すら確かに“止められた”。まるで石にでもされたような気分だったね、アレは」



「『石化の魔眼』ですか……」

見た者を石へと変えてしまつと言う、ギリシャ神話に登場する怪物『メドゥーサ』が持つ瞳。

頭髮は無数の毒蛇で、イノシシの歯、青銅の手、黄金の翼を持つという醜怪な姿で描かれ、英雄ペルセウスでさえ、神々から幾多の武具を与えられてようやくその首を斬り落とす事が出来た真正正銘の化け物だ。

一方でその力は数ある魔眼・邪眼の中でも最高位に位置するとされ、女神アテナは切り落とされたその首を自らの盾にはめ込んだ事で、絶大な守護の力を得たとされている。

それぐらい『石化の魔眼』と言うモノの力は強大で、敵対する者にとつては絶対的な脅威の象徴とも呼べる代物だ。

それと同等の力を持つとすれば、確かにあの少年の『右手』以上の化け物だろう。

「……神裂、君ならどうにかできそうかい？」

「わかりません。正直なところ、今の話だけでは予測がつかない、としか……」

その少女の力が『石化の魔眼』そのものであるわけではない。ただの超能力であるなら、何かしら攻略する術があるだろうが、ステイルの話を聞いただけではそれを見出すだけの情報が不足していた。だろうね。僕の方は完全にお手上げだ」

ステイルは言葉通り両手を挙げ、首を振るう。

しかし、そんなおどけた態度も次の一瞬で消え去る。

「……それに、アレの恐ろしさは“そんなもの”とは別にある」  
軽く体を震わせたステイルは、底冷えするような低い声で、

「この僕を、思考の世界で生きる魔術師たるこの僕を、最初から最後まで全部自分の思惑通りに踊らせていたなんて……、しかも最後までそれに気付かせないだなんてそんな事、普通の人間に出来る筈

がない」

「だから、化け物、と……」

「そうだ。アレは紛れもない化け物さ。その上、この僕をまだ利用しようとしているんだから、腹が立つ」

「利用？」

苛立つステイルに眉を顰めながらも、その言葉の意味を測り兼ねた神裂は問い返す。

「利用されていると分かっているのなら、拒否すればいいだけの話なのでは？」

「それが出来ればやっているさ。けど、あの子に関する事と言われ  
たら、そうも言っていられない」

「インデックスに禁書目録に？」

だから取り乱すような気配を感じるのか、と納得する一方で神裂は、それほど重要な問題とは？ と疑問を抱く。

「ああ、何でもあの子の喉の奥に何らかの魔術が施されているらしい」

「！？ ホントですか！」

「確認はしていない。ただこれだけの事をしてまで、そんな嘘を言う理由もない」

嘘だとすれば、それは確認を取ればすぐにバレる程度のものでしかない。

そんな嘘をついて時間を稼いだ所で、はたしてどれほどの意味があると言っのだろうか。

「問題は、その魔術の効果が何か、だ」

「……それは？」

「アレが言うにはあの子の頭を吹っ飛ばす『爆弾』らしい」

「なっ　！？」

「あくまで可能性だ。だが、神裂。それは“ありえない話じゃない”」

その言葉を聞いて、神裂も即座に理解した。

確かに“あり得ない”話ではない。『彼ら』が仕掛けたのだとすれば、それは十分にあり得る話だ。

「だから腹立たしいが、ああ、非常に腹立たしいけど、僕は一度向こうに行つて確認を取つてくる」

そう言つとステイルは口にしていた煙草を虚空に投げ捨て立ち上がる。

投げ捨てられた煙草は空中でひとりでに炎を巻き上げて燃え上がり、跡形もなく塵となつて消えていった。

「……わかりました。ではこちらはあの子の監視と、その少女について調べておきましょう」

「頼んだ」

上条は、喉の渇きと体の熱で目が覚めた。

「とうま?」

清潔感溢れる白い壁や床。どこか見慣れ始めていた部屋のその光景に、ここが病室だと気付いた辺りで、上条はようやくインデックスが覗き込んでいる事、そして自分がベッドに寝かされている事を知った。

「ごきげんよう、上条君。随分と呑気なお目覚めね」

「……氷室?」

声がする方を振り向けば、壁に背を預け、相変わらずの皮肉げな笑みを浮かべる氷室の姿があつた。

「むー……、とうま、私が先に声をかけたのに、サツキの方にだけ返事を返すのはどういう事なのかな?」

「あ、いやー。別に深い意味はないんだが……、?」

ふと頭を掻こうと持ち上げた右手に違和感を感じ、首を傾げる。

見てみれば、その右手にはガツチリと白い包帯が巻かれていた。

(そつだ。俺、神裂つてヤツと戦つて、気を失つたんだっけ……)

敵の目の前で気絶し、なぜ病室で目覚めたのか。

はつきり言つて、あまりにも釈然としないため、素直に生きている事を喜ぶ事も出来ない。

「とうま、大丈夫？ まだどこか痛い？」

「なんともねーよ、こんなの」

「ホント？」

「ああ、ホントだつて……つーか、俺、丸一晚眠つてたのか？ 今何時だ？」

窓の外から差し込む明るい陽射しに、上条は今は昼間だと判断して部屋を見渡しながら時計を探す。

「一晩じゃないよ」

「？」

呟くように答えたインデックスはどこか鼻をぐずらせているようにも見える。

「3日」

「みつか……つて、え？ 3日！？ 何でそんなに眠つてたんだ俺！？」

「全身打撲、肋骨と右腕の骨折、左足にも罫、その上無数の裂傷に伴う出血多量等々……、これだけの大怪我をして僅か3日で目覚めた方が奇跡だと思うけど？」

「げっ！？ そんなにかよ！」

ボロボロにされた記憶はあるが、そこまで酷い怪我をしている自覚はなかった。

よくもまあそこまでボロボロにしてくれたと犯人である神裂とかいう女を恨むと共に、それだけの怪我でよくあそこまで戦つたと自分の頑丈さに呆れ半分称賛半分の気持ちを抱く。

「つて、そうだよ！ 魔術師は！ あの神裂とかいう女は！」

「知らないよ、そんなの！！」

突然インデックスが思いつきり叫んだ。

「知らない。知らない、知らない！！ 私ホントに知らなかった！ とうまの家の前にいた、あの炎の魔術師を撒くのに夢中で、とう

「だが他の魔術師と戦っている事なんかこれっぽっちも考えなかった！」

その言葉は上条ではなく、自分自身に向けて放たれたもの。

言葉の刃で自身を滅多斬りにするような声色に、上条はますます気圧されて言葉が出せなくなる。

「サツキもサツキだよ！ 私がダメって言うてるのに、言う事聞かないで魔術師と戦って！ 途中で息が苦しくなって気を失ったと思ったら、いつの間にかここで寝てたし！ 気が付いたらとうまがロボロになってたし！ 折角、二人を巻き込まないようにって、逃げ出したのに！ なんで追ってきたの！」

「追うに決まってるだろ、バカ！」

インデックスの物言いに、さすがに堪えきれなかった上条が叫ぶ。「俺達がどれだけ心配したと思ってるんだ！ テメエ一人の問題じゃもうねえんだよ、これは！ 見くびるなって言ったこともう忘れれたのかよ！ 完全記憶能力なんてもん持ってんだろ！ ならしっかりと思いでせ！」

「覚えてるよ！ でも、そのせいでとうま怪我したし！」

「んなもん、怪我の内に入んねえんだよ！ この通りピンピンしてるっつーの！」

「でも、3日も目を覚まさなかった！」

「こんだけの怪我してりゃ、3日も寝込むわ！」

「怪我の内に入らないんじゃないの！」

「言葉の綾だろうが！ 揚げ足とんな！」

「逆ギレっ！ とうま、自分がおかしなこと言ってるのに、私のせいにするんだ！」

「悪いかっ！ 元はと言えばお前が」

「はい、ストップ！ それ以上は堂々巡り！ 二人とも少し落ち着きなさいっ！」

「……………」

氷室の一喝により言葉の矛先を一旦は収めるが、両者は未だ興奮

覚めやらぬ様子でにらみ合っている。

そんな様子に氷室は、「まったく……」と呆れたため息を吐きながら、

「上条君。あなたが目覚めるまでの間、インデックスがどれだけ心配していたのか、わかってるの？」

「ぐっ……、けど……」

小さく呻き、それでも何かを言いたげな上条を無視し、今度は、

「それとインデックスも。気持ちは分かるけど、残された方の身にもなれば分かるでしょ。あなたが上条君を心配したのと同じように、私達もあなたの事が心配なの。大切に想ってくれる気持ちは嬉しいけど、自分もそう想われているんだってこと、ちよっとは自覚して」「うっ……、でも……」

唇を噛みしめ、こちらも納得を見せない姿に、氷室はこめかみを押さえながら大きく息を吸い、

「デモもへチマもない！ 二人とも、言う事は！」

「……ごめんなさい」「

「よろしい」

鬼の もとい、鶴の一声により、言われるままに頭を下げ合う二人。

そんな様子を満足げに見つめた氷室は大仰に頷いて見せた。

「第一、あらかた傷は塞がってるとはいえ、それだけ大騒ぎしたらせつかく治りはじめた怪我がまた悪化するでしょうに……」

「うっ……」

「ごめんなさい。とうま、大丈夫？」

「ああ、平気だって言ってるだろ。第一、そんなに痛かったらのは打ち回ってるっつの」

「……、」

上条の空元気に対し、インデックスは何も言わなかった。

無言のまま、ついに耐えられなくなったと言った感じで、じわりと涙があふれてくる。

何かを叫ばれるより、それはよっぽど上条の中心に突き刺さった。そしてようやく知った。“痛みを感じない方が危ない状態”だという事に。

上条は右手を見る。

包帯でグルグル巻きになって、壊れに壊れた右手。キチンと治療はされているのだから、感覚が妙に鈍い。痛みと言うより痺れと言った感じがだ。治療してコレだという事は本格的にヤバいのかも知れない。

「ゴメンね、とうま。ホントは魔術で治せばいいんだけど……」  
「そういや、カリキュラム時間割りを受けた超能力者は魔法は使えねーんだっけか。つたくめんど臭え」

「……うん。『普通の人』と『超能力者』は回路が違うから使えないけど」

インデックスは上条の全身に巻かれた包帯を見やり、  
「一応、それ包帯でも傷は治るみたいだけど……そっち科学って不便。やっぱり魔術の方が早いかも」

「確かにそれもあるけどな。                    けどま、魔術なんて使わなくつても大丈夫だろ」

「……、 “ なんて ” 」

インデックスは上条の言葉にムスツと口を尖らせ、

「とうま、この期に及んでもまだ魔術を信じていないんだね。片想いちゃんみたいに頑なんだよ」

そういう意味じゃねーよ、と上条は枕に頭を押し付けるように首を振った。

「そうじゃなくて……できる事なら、お前が魔術語ってる時の顔ってみたくねーからな」

上条は学生寮の通路で、ルーン魔術について『説明』していたインデックスの顔を思い出す。

まるで青ざめた満月のように冷たく、まるで時を刻む時計の歯車

のような静かな瞳。

バスガイドよりも丁寧で、それでいて銀行のATMより人間味に欠けた言葉。

魔導書図書館、インデックス禁書目録という一個の存在。

それが目の前の少女と同一だったとは、今でも信じる事ができない。

というより、信じたくなかった。

「？　とうまって、説明嫌いな人？」

「は……？　ってか、お前覚えてないのかよ？　ステイルの前でルーンについてカクカク人形みてーにしゃべってたろ？　お兄ちゃん正直アレは引きましたっつってんだけど」

「……えっと、　そっか。私……また、覚醒めたんだ」

「覚醒めた？」

それはまるで、あの操り人形みたいな姿の方が本物の彼女だと言っているようだった。

今ここにいる、この優しい少女の姿は偽りの姿だと言わんばかりに。

「うん。けど、覚醒めてた時の事はあんまり突っ込まないで欲しいかも」

何でだよ？　と上条が聞くよりも先に、インデックスは初々しそうに顔を伏せ、

「意識がない時の声って、寝言みたいで恥ずかしいからね」

それに、とインデックスは唇を動かし、

「　何だか、どんどん冷たい機械になっていくみたいで、恐いんだよ」

インデックスは笑ってた。

本当に今にも崩れ落ちそうに、それでいて決して人に心配はかけ



ないように。

それは断じて機械なんかに作る事のできない表情だった。人間にしか作る事のできない、笑みだった。

「……ごめん」

上条は、自然と謝った。一瞬でも、彼女を人間離れしていると思つた自分が恥ずかしかったから。

「いいんだよ、馬鹿」

と、良いのか悪いのかよくわからない事を言つてインデックスは小さく笑つた。

「さて、もういいかしら？」

いつの間にか一人蚊帳の外にいた氷室が、遠慮がちに会話へと割り込んでくる。

「あ、ああ」

「う、うん。なにかな、サツキ」

「悪いけどインデックス。ナースステーションまで行つて上条君が目覚めたつて言つてきてくれる？」

「あ、うん……、いいけど……」

氷室の言葉に頷きながらも、チラリ、と上条の方を窺い見たインデックスに、

「大丈夫、上条君の面倒は私が見てるから。それにキチンと診察してもらわないといけないでしょ？ あとこの3日間何も食べてないから、食事の用意してもらるように頼んどいて」

「……わかつた。じゃあ、ちよつと行つてくるね」

もう一度頷いてインデックスは病室を後にしようとし、

「あ、とうま。ちゃんと大人しくしてなきゃだめなんだよ！」

「子供じゃねー、……つて、お前まだ根に持つてんのかよ！」

「知らないよーだ！」

そう言つて逃げ出すように病室の外へと駆け出して行つた。

「てか、病院の廊下を走るな！ ……やっぱ子供だろ、アイツ」

「嬉しいんでしょ。上条君の無事が確認できて」

「そりゃ、わかってるけどさ……」

上条だつて安心した。いつもと変わらないインデックスの姿を見て、元気に走り回る彼女の姿を見て、心の底から安心した。

一時はもう会えないんじゃないかと思っただけに、その思いは一人だ。

「つて、そうだ。魔術師は！」

「この3日は大人しくしてるみたい」

「そう、なのか？ つてか、氷室の方は大丈夫だったのか。確かステイルつてヤツと戦つたつて……」

「ええ。軽く捻つてやつたわ」

「軽く捻つたつて……」

そんな容易い相手ではないことは上条自身が一番よく知っている。言つたでしょ。私の能力はこと防御に関しては“絶対”だつて。

どんな攻撃もダメージを受けないなら、初めから攻撃されてないのも一緒よ」

それより、と氷室は上条の目を真剣に覗き込み、

「そっちはどうなの。そんなポロポロにされて、一体何があつたの？」

「それは……」

氷室の問いかけにより、上条はあの夜の戦いの一部始終を思い返し、

「……そうだつ！ 制限時間！」

「リミット？」

思い出した。

3日。その言葉を聞いてから妙な引つ掛かりを覚えていたそれがようやく解けた。

「インデックスは！ アイツ、何ともなつてないのか！」

「何ともつて……さつき見てたでしょ？ 何か問題あるように見えただ？」

「あ、いや……」

何ともなかった。何にも変わらず、相変わらずのお子様振りで、人の事ばかり気にして、そして上条の事も氷室の事も“覚えていた”。それはつまり、まだ魔術師達は記憶の『消去』を行っていないという事。それでいて、さっきの様子を見る限り、インデックスにはまだ自覚症状は現れていないようだ。

上条はホツとすると同時に、貴重な最後の3日間を無駄にした事に自分で自分を殺したくなった。

「……上条君」

「あ、ああ。そうだな。氷室には話しておくべきだよな」

それがどんなに衝撃的で、救いようのない残酷な内容でも、話さないわけにはいかない。

ゆっくりと息を吸って、吐いて、上条は気を落ち着けると、

「氷室。落ち着いて聞いてくれるか？」

「ええ。全部話して。何があったのか、何を聞いたのか、余さず全て」

「……わかった」

小さく頷き、上条は語った。

神裂火織という魔術師の正体と、インデックスにかけられた呪いについて。

全てを語り終えた上条は、そつと息を吐く。

それはじつと黙って聞いていた氷室は、壁に背を預け、何かを考えるように腕を組んで目を閉じている。

きつと上条の語った内容を吟味して、真偽の程を探っているのだろう。

「……」

「信じられないってのはわかる。俺だって信じたくねーよ。けど神裂ってヤツは嘘を言ってるようには見えなかった。じゃなきゃ、あんな風に感情を剥き出しにしたりしない。だから本当なんだ。本当

にインデックスは……」

「……そんな事はどうだっていいわ」

唐突に上条の言葉を遮るように発した氷室の声は、恐ろしく冷たい何かを感じさせた。

「ひ、むろ……?」

恐る恐る上条は、氷室の表情を覗き込む。その顔は一切の感情を示さず、表情までもが寒々しい思いを抱かせる。

「どうだっていい、って、そんなこと……」

「どうでもいい事よ、その真偽の程だなんて。問題は、上条君がどうしたいのか、でしょ」

そうだ。それは確かに正しい。信じる信じないを論じている余裕はもつないのだ。期限の3日は過ぎ、今日がその日だ。こんな事をしている間にも制限時間タイムリミットは刻々と近付いていく。

「今はちよつどお昼を回ったあたりね。最長で残り12時間。その12時間の間に何をどうしたいのか、何をどうするべきかを探し出して、処置を施して、彼らに明確な結果を示さなければならぬ。そうじゃないの?」

「あ、ああ。そうだ」

「それで? 上条君はどうするつもり?」

「んなもん、決まってるだろ」

インデックスを助ける。なにがなんでも記憶を消さずに済む方法を見つけ出して、あの魔術師達の思い通りにはさせずに助け出す。

「そう」

予想通り、とでも言いたげに氷室は小さく息を吐くと、

「……なら、私からも言っておくわ」

「何をだ?」

何か名案でもあるのではないか、と上条は期待に胸を躍らせ、

「この件に関して私は、一切手を出さないから」

「……………は？」

上条は耳を疑った。

「いま、なんて……………」

「聞こえなかった？ 上条君には手を貸さない、って言ったのよ」「聞き間違いじゃなかったようだ。聞き間違いじゃないのなら、何なのか。」

「それはつまりアレか。氷室はインデックスの記憶がなくなっちまってもいいって、そういうのか……………」

「そうね、むしろ」

そこで言葉を止めた氷室は、ふいにドアの向こうへと視線を向けた。

誰かがやってきたわけでもない。ただ遠くを見つめるかのように焦点の合わない瞳で何かを見つめ続けている。

そんな意味の分からない氷室の突然の行動を眺めながら、上条はさっきの言葉の意味を反芻していた。

氷室は手を出さない。インデックスの記憶に関して一切手出ししないと、そう告げた。

それはつまり、インデックスの思い出がどうなるかと構わない、という事なのか？

(そんな馬鹿な……………)

ありえない、と上条は即座に否定した。

氷室にとってもインデックスは大切な存在のはずだ。毎日楽しみに語りあって、上条には理解できない魔術談義に花を咲かせ、インデックスが泣いた時は胸に抱いて泣き止むまで優しくあやしていた。そんな氷室がインデックスを大切に想っていないはずがない。

なら、どうして？ どうして、氷室はインデックスを助けようと思わない？

それとも氷室は、インデックスを見捨てたっというのか？

助ける方法がないからと、あの魔術師みたいに諦めて、切り捨てたっていうのか？

「……一つ、言っておくわ」

「なんだよ」

言葉を返す上条の声には、尋常ならぬ怒気が込められていた。

それをさして気にする風もなく、氷室は変わらぬ口調でつぶける。

「あれから3日が経ってる」

「んなこと分かってる！ 3日も無駄にしちまったから、もうこれ以上無駄にしてる時間なんてないんだよ、俺達には！」

「そうね。でも、私はそこに含まれない」

「なんでだよ！ なんで氷室までアイツらみたいのに、そう簡単に諦めちまってんだよっ！」

「諦めたわけじゃない。もう終わってるのよ」

「違う！ まだ終わってない！ まだ方法はきつと」

「そうじゃない」

上条の訴えを遮り、氷室はキツパリと告げる。

「もう、“約束の期日は過ぎてる”って言ってるの。あの子はもう“退院している”のよ？」

「」

一瞬、理解が及ばなかった。

期日。退院。約束。その言葉が意味するものを上条はゆっくりと噛みしめるように思い出していき、

退院は術後の経過観察と検査を含めて4日後。

それまでは現状維持でも十分。私も約束通りあの子を守るわ。

それは上条に選択を迫ったときの言葉。

元々氷室と上条の間にあったのは、互いに守りたいものを守るた

めの相互協力という『約束』だった。

上条はインデックスを。氷室は病院とその関係者たちを。

しかしその『約束』は、インデックスが入院している間のみの期限付きのもの。

言葉にある猶予の4日はとうに過ぎ、インデックスは2日前に退院を済まし、『約束』はそこで途絶えた。

インデックスを守ると言う、上条との『約束』は、2日前ですでに終わっている。

「だから、なのか……」

「一応、上条君が寝ている間はサービスしておいてあげたわ。でもそれ以上は契約外。この病院内で戦闘が起きるなら、ここを守るために彼らと戦うけど、それ以上は手を貸す義理はもうないわ」

「義理って……」

その程度だったのか？ 氷室にとって、あの3日間の付き合いは、ただの『義理』なんて一言で片付く程、軽いものだったっていうのか？

「なんだよ、それ……」

「悪いわね。私は慈善事業をやってる程、暇じゃないの。助かる方法がすでにあるなら、それ以外の方法を探す、なんて無駄な事をしてる余裕はないのよ」

「っざっけんなッ！」

氷室のどこまでも突き放した台詞に、上条の怒りが頂点に達した。「ンだよそれは！ 暇がない？ 無駄な事？ 要するに氷室にとつてインデックスの事なんてどうだっていいって事なんだろうが！ 見損なつたな。氷室がそんな冷たいヤツだったなんて思わなかった！」

「そうよ。私はそういう人間よ。上条君が勝手に期待して、勝手に

頼って、勝手に見縊っただけじゃない」

「あー、そうだよ。信じた俺が馬鹿だったさ！」

ダンッ、と上条は勢いよくベッドから立ち上がる。

それを冷めた目で見る氷室の姿に、より一層怒りが増した。

「もう頼らない」

「勝手にどうぞ」

「インデックスは俺が助ける」

「好きにすれば」

「ああ、好きにするさー！」

吐き捨てるように言い放って、上条は病室の入口へと歩き出す。

「どこに行くの？」

「決まってる。インデックスを救う方法を探しに行くんだよ！」

「そう。でもその前にナースステーションに行った方がいいんじゃない？」

「あん？」

ガラ悪く、意味の解らない事を言う氷室を上条はありったけの怨念を込めて睨み付ける。

「親切心で言ってるんだけど」

「どういう意味だよ」

「それは」

そこまで言った直後、唐突に氷室が立ち上がった。

「……………チッ」

「……………氷室？」

突如それまでの冷徹な雰囲気打ち消して、苦虫を噛み潰したかのような顔をする氷室の様子に、思わず上条は声をかけてしまう。

だが、そんな上条には構わず、何か焦る様な面持ちで氷室は上条の横をすり抜けると、部屋の外へと駆け出す。

「お、おい氷室？」

「ついてきて！」

「ついて、って……………」



意味が分からない。今さっきまで完全に仲違いをしていたというのに、どうして上条を誘うような言葉をかけられるのか。

だが、そんな疑問も次の一言を聞いて吹き飛んだ。

「ついてきなさい！ インデックスが倒れたわ！」

「なっ　！？」

倒れた？ 誰が？ インデックスが？

「どういう事だよ！」

「説明してる暇はない。近くに魔術師達もいる！」

「　っ！？」

どうやってソレを知ったのかは分からないが、もしそれが本当だとすればマズい。

「くっそ　！」

氷室の後に続いて上条も病室を抜け出し、走り出す。

「一体どうなつてんだよ！」

「追跡トレースしてたのよ」

「トレース？」

「あの子の動きのベクトルをずっと追って観測してたって言うてるの！　それがさっきから妙な動きを見せてたから。たぶん魔術師達と出くわしたんでしょうね」

「ちつくしう！　なんでもっと早く言わねえんだよ！」

「言っただじゃない！　ナースステーションに行けっ！」

「ちゃんと言えっつて言っつてんだよ！」

あんな一言でわかるかッ！　と上条が罵倒する間にもナースステーションが目に見える場所まで辿り着き、そこに群がる野次馬たちが目に飛び込んでくる。

「ちよつと、そこどいて！」

氷室の叫びに驚いたように人垣が左右に割れ、その中心が目飛び込んでくる。

「インデックスっ！」

そこには廊下の床に力なく倒れたインデックスの姿があった。

それと、

「テメエら、インデックスから離れやがれ！」

そのすぐそばに立つ、魔術師　ステイル・マグヌスと神崎火織の姿を目にした瞬間、上条は怪我している事も忘れて拳を握り、飛びかかる。

それを、

「やめなさい、上条君」

「氷室？　なんでだ！」

この場に魔術師達が居て、インデックスが倒れている。そんな状況で考えられることなんて一つしかないのに。

「今はこの子の方が先よ！」

そう言っつて、氷室は床に倒れるインデックスのもとに跪き、呼吸やら脈拍やらを確認し出す。

その動きに、上条の中の熱が一時的に引いていく。しかしだからと言っつて、魔術師達に対する嫌疑は消えたわけではない。

きつく睨み付け、二人を守るように間に入って立ちふさがる。

「テメエら、インデックスに何しやがった」

「何もしてない、と言っつても信じてくれそうにないね。けど、本当に僕らは何もしてないさ。なあ、神裂」

「はい。私達はただ『足枷』の効果を確認しに来ただけです」

足枷、と言っつ言葉聞いて、上条当麻は初めて『敵』の意図を悟った。

インデックスは、一人なら魔術師から逃げられるのだ。これまでだっつて教会を相手にたっつた一人で1年近く逃げ回っつていたのだからたとえ無理矢理捕まえて、どこかに閉じ込めたっつて簡単に抜け出されてしまっつかもしれないのだ、彼女一人なら。

制限時間まであと何日もない状態で、1年近く教会から行方をくらます事が出来た彼女に、再び本格的な『逃走』をされたら取り返しのつかない事態になるかもしれない。どこかに監禁しても脱出さ

れるかもしれないし、『儀式』の途中で逃げられるかもしれない。

だが、上条当麻という『怪我人』を背負う事になれば話は違う。

だから魔術師は上条を殺さなかった。そして、わざとインデックスの側へと帰した。彼女が上条の事を諦めないように、都合のいい『足枷』をはめるために。

インデックスを、より安全により確実に『保護』するためだけに、彼らは悪に徹したのだ。

「もつとも、病室に辿り着く前にここで出会う事になったのは予想外でしたが……」

「目の前で突然倒れられることも含めてね」

つまり、コイツらと出会ったインデックスは対立し、その最中に突然倒れたという事か。

「ま、もうすぐリミットだ。“いつこうなってもおかしくなかった”

”

「ッ!?!」

そう、制限時間<sup>リミット</sup>だ。インデックスの記憶が脳をパンクさせるまでの制限時間。それに伴う脳の圧迫に、彼女は時折酷い頭痛に見舞われていた。それがいよいよ激しくなって、結果倒れたとしてもなんらおかしくはない。

「じゃ、じゃあ……」

「あと11時間と38分」

「!?!」

ふいに近くにあった時計を見上げる。

今から11時間と38分後　今夜午前零時。

それがインデックスの記憶がパンクする制限時間<sup>タイムリミット</sup>。

「どいてくださーい！」

ガラガラという音とともに看護師がストレッチャーを連れて駆け込んでくる。

おそらくこの状況を聞きつけて駆けつけてきたのだろう。そのすぐ側にはカエル顔の医師の姿もある。

「やれやれ。そっちの少年が目覚めたと聞いてきたんだけどね？  
今度はまたこの子かい？ 忙しい子たちだね？」

肩を竦めながらも看護師達にインデックスをストレッチャーで運ぶよう指示を出す。

しかし、

「必要ないわ」

氷室が手で制し、インデックスの体を両手で抱き上げた。

その様子にかエル顔の医師が不思議そうに首を傾げ、

「……別にわざわざ手で運んでもらわなくてもいいんだけどね？」

「違うわ。必要なのは貴方の方」

「僕がかい？」

「ええ。この子の症状もんだいは医者では治せない」

そうキツパリと告げる氷室に、カエル顔の医師から気怠げな表情が消えた。

「どういう意味だい。僕はこれでも腕には自信がある」

「分かっている。それは、“私が誰よりも理解してる”。でも、そういう次元の話じゃないの」

「……原因は分かっているのかい」

「ええ。対処法も」

「そうか……」

対処法、そう聞いて上条はゾツと背筋が冷えた。

そう、確かに対処法はある。“インデックスの思い出をすべて消す”と言う方法が。

そして氷室はそれを支持していた。その方法があるのなら、ある

かも分からない他を探す気はないと。

「ま、待ってくれ！ まだ時間は……」

「上条君は少し黙ってて」

「黙ってられるか！」

黙っていられるはずがない。この場で、この件に関して、インデックスの味方でいられるのは上条ただ一人だけなのだから。

しかし、そんな上条に氷室はあらん限りの怒気を振りまき、

「いいから、黙りなさい！ ここで話すような話でもないでしょうが！」

一喝した。そのあまりの迫力に、上条のみならず、魔術師も、看護師も、野次馬たちさえ息を飲んで声を失う。

そんな中でただ一人、平然としていたカエル顔の医師が、

「……任せていいんだね」

「ええ、必ず。必ず助けるわ」

「そうかい。なら任せよう」

「……氷室？」

上条は今日何度目とも分からない耳を疑った。

(助ける？ 助けるって言わなかったか、今……)

確かに言った。氷室が、インデックスの事を助ける、と。

「けど、そこまで言ったからには、わかっているね」

「もちろん」

カエル顔の医師の問いに、氷室はしつかりと頷く。

その様子を見た医師は、呆然としたままの看護師たちに手早く撤退を告げ、自らもその場を後にする。

「……氷室？」

「ついてきて」

上条の呼びかけにそう短く告げ、

「……その二人も」

有無を言わさぬ声に、魔術師達も黙って頷き、氷室の後に続いて一同は病院を後にした。

### 第13章 とある選択と交渉決裂へブレイクダウン

辿り着いたのは病院から少し離れた小高い丘上の公園。

公園と言っても、遊具や砂場がある様なお子様仕様のものではなく、散発的に立ち並ぶ樹木と芝の地面が広がる緑あふれる開けた場所だ。

そんな公園の隅にポツンと置かれたベンチの上に氷室はインデックスを横たえると、少し離れて振り返る。

その先にはステイルと神裂が並んで立ち、上条は少し躊躇ったものの、構図的に氷室の方へとよって彼らと対峙した。

「とりあえず、『人払い』を」

「すでに済ませてある」

「気が利くわね」

一見気安い会話に見えるも、ステイルからの言葉には鋭い棘がある。

「それで、僕達をこんなところに連れてきて、何をしようっていうんだい？」

「話をするのならば、病室でも十分なはずですが」

「そうね。穏便な話し合いになるならそれでもいいんでしょうけど……」

そうはならないだろうと、お互いに理解していた。

「……僕達はそのつもりなんだけどね」

「つぎけるな！」

ステイルがチラリと向けた視線に噛み付くように上条が吠える。

「インデックスの記憶なんぞ、絶対消させねえ！俺はまだ諦めちゃいねえんだ！」

強い決意を瞳に宿し、上条は魔術師達を睨み付ける。

「俺はまだ諦めちゃいねえ。いや、何があっても諦める事なんかできるか！100回失敗したら100回起き上がる、1000回失

敗したら1000回這い上がる！ たったそれだけの事をテメエらにできなかつた事を果たしてみせる！！」

そんな激昂に震える上条に対し、

「……君も往生際が悪いね」

魔術師達はあくまでも冷静だった。暴風に晒されながらも自らを撓らせ持ちこたえる柳の木の如く、その激情を受け流す。

「さつきも言っただけど、あの子のリミットは今夜午前零時だ。必然的に、僕達はその時刻に合わせて全てを終わらせるよう予定を組んでいる」

「だったら何だよ」

「命令だよ」

静かに、冷徹に、ハッキリと、ステイルは告げる。

「君の意思がどうであれ、刻限と共に僕達はあの子を回収する。それを邪魔するなら、今度こそ君達を完璧に砕くまでさ」

前回はあえて見逃したのだと、ステイルは断言し、上条の決意を突き放す。

「あなたは、私達の中に残っている人間らしい『優しさ』を頼りに交渉しようと思っているのかもしれませんが……だからこそ、厳命します」

ステイルに続き神裂も平坦な声色で、

「今すぐにもあの子に別れを告げてその場を離れなさい。あなたの役割は足枷です。用を無くした鎖は、断ち切られるのが宿命さだめですから」

上条に『諦める』事を命じた。

それはただ単純な敵意や嘲りだけで、告げられたのではない。

無駄な努力をするな、と、その分傷つくだけだ、と絶望にひた走る人間を止めようとする、彼らなりの『忠告』だった。

「ふ、……ざけんなよ」

それが上条の癪に障った。

「どいつもこいつも自分の無能テメエを他人に押し付けやがって。大体テ

メエらは魔術師なんだろう、不可能を可能とするから魔法使いなんて呼ばれてんだろ！ それなのに何だよこのザマは。ホントに魔術じゃ何もできねえのか！ 一つ残らず全部まとめて試しつくしたってインデックスの前で胸を張って正々堂々言えんのかよ！」

「……。魔術では、何もできませんよ。できるようならばとっくにやっています」

神裂は悔しげに奥歯を強く噛み砕く。

「我々は魔術師です。『魔術』によって作られた環境では、『魔術』によって解決される恐れがありますから」

「魔術の専門家が作り上げた対オカルト用の防御システムだってか。うざってえ、インデックスの10万3000冊使えばどうとでもなるだろ！ アイツを押さえりゃ神様の力を手に入れられるだなんて謳っている割には女の子の頭一つ治せねえなんてみみっちい事あるかよ！」

「魔神、の事ですね。教会は、禁書目録の『反乱』を恐れています。だから1年周期で記憶を消さなければ死んでしまうという、教会のメンテナンス技術と術式という名の『首輪』をつけた。その教会が、みすみすあの自身に首輪を外させるような可能性を残すと思いますか？ ……

…おそらく、10万3000冊には偏りがあります。例えば、あの子の記憶操作に関する魔導書は覚えさせない、とか。そういう防御線を張っていると思われませんか」

くそつたれ、と上条は口の中で毒づいた。

それは少し考えれば当然のことだ。『禁書目録』なんて残酷なシステムを作り出すような連中が、そんな初歩的なミスを犯すはずがない。準備は万全に、万に一つの見落としすら許さずに仕組みを構築しているに決まっていた。

だが、それは魔術側の人間が考えたものだ。

「……確かインデックスの頭の8割は『10万3000冊の知識』」



に食われちゃってんだよな」

「はい。正確には85%だそうですが、わたしたち魔術師ではあの10万3000冊の破壊は不可能です。魔導書の原典はオリジン異端審問官でも処分できませんから。従って、残る15%……あの子の『思いつき』を抉ることですが、わたしたち魔術師はあの子の頭の空き容量を増やすことはできなかった」

「おれたちなら、科学側なら？」

『魔術』でどうにもできないことでも、『科学』ならどうだ、と上条は考える。

魔術師が自らの領域でフィールド四方八方手を尽くしてもダメだったとしても、それとは異なる『科学』ならば、まだ可能性は残されているのではないか。その可能性に賭ける価値は十分にあるのではないか。

例えば彼らが科学に疎くても、伝手を持っていなくても、それを橋渡しする人間が居れば、その手もあり得るのではないだろうか？

そんな上条の問いに、

「……、そう、思っていた時期もあつたんですけどね」  
神裂は疲れたように口を零した。

「正直、私はどうして良いのか分からない状態です。自分が絶対と信じていた魔術ではたった一人の少女を救う事もできない。ならばもう藁をも掴む気持ちになるしかないのは分かりますが……」

「……、」  
その先の台詞は、何となく予想がついた。

「正直、だからと言って大切なあの子を科学に渡すのも気が引けます」

それは予想に違わぬ一言であり、  
「わたしたち魔術師に出来なかつた事があなた科学側にできるはずがない、という自負があるんでしょうね。得体のしれない薬にあの子の身体を浸して体の中を刃で切り刻んで……そんな雑な方法ではあの子の寿命を無

駄に削るだけに決まっている。第一、「機械にあの子が犯される所なんて見たくもない」

「なめやがって……」

上条にとつて看過できない一言だった。

「試した事もねえくせに良く言うぜ。そんなら1個質問だ。テメエ、記憶を殺すなんて言ってるけどよ、そもそも記憶喪失つてのが何なのか分かってんのかよ？」

その問いに対し、魔術師からの返答は ない。

予想通りの反応に、上条は小さく鼻を鳴らす。

「ハッ。お前、良くそれで完全記憶能力だの記憶を奪うだの語ってられたよな。一言で記憶喪失つっても色々あるのに」

そう語りながら上条は出来ない己の頭をフル回転し、開発の授業の内容を全力で絞り出すようにして思い返す。

「老化…… つかボケもそうだし、アルコールで酔っ払って記憶がなくなるのもそうだ。アルツハイマーっていう病気もそう、TIA……、つてなんだっけか？」

タラリ、と冷や汗を流しながらチラリと上条は氷室を振り向く。

その視線を受けた氷室は、心底あきれ返ったため息を吐きながら、仕方なくフォローに回る事にした。

「…… 一過性脳虚血発作。分かり易く言うと、軽度の脳梗塞よ」

「あ、そうそう。それだ」

いつちよまえに啖呵を切っておいて、それはダメだろ……、とでも言いたげな氷室の視線を無視して、上条は構わず続ける。

「とにかく、それでも記憶は飛ぶ！」

「あとはハロセン、イソフルラン、フェンタニールなどの全身麻酔による影響や、バルビツール酸誘導体やベンゾジアゼピン類等の薬の副作用で記憶を失う事もあるわね」

フォローを続ける氷室が内心で「後で小萌先生に報告ね、これは」などと考えている事を、上条は知らない。そのせいで、この後に追加じしくの補習が待っているだなんて、彼はまだ知る由もない。

「要するに、人の記憶を『医学的』に奪う方法なんていくらでもある、って訳だよ。テメエらにできない方法で、10万3000冊を挟り取る方法が、って意味だ馬鹿」

馬鹿はアンタでしょう、という氷室の小さな呟きは、この場では完全に無視された。

「それに、ここは学園都市だぜ？ サイコメトリー 読心能力者やら マリオネット 洗脳能力者やらなんつー『心を操る能力者』なんてものたくさんいるし、そういう研究をやってる機関もゴロゴロある。望みを捨てるにやまだまだ早いんだよ。常盤台には触れただけで人の記憶を抜き取る超能力者レベル5もいるみたいだし」

むしろ上条にとってこっちの方が本命だ。

先にあげた例は全て『脳を傷つける』ことで『記憶を取り除く』方法だ。脳細胞そのものをその容量ごと削り取ってしまうような乱暴な方法であり、容量が増えるわけじゃない以上、それでインデックスが助かるわけじゃない。

だがそれをあえてここで言う必要はない。今は何としてでも魔術師による強引な『記憶消去』を止めさせなければならぬのだ。嘘でもハツタリでもなんんでも使って、躊躇させる必要がある。

「で、どうする魔術師？ テメエはこれでもまだ人の邪魔をするのか？ 挑戦する事を諦めて、とりあえずで人の命を天秤にかけちまおうってのか？」

どうだ、と上条はできる限りの威勢を以て、魔術師達にふっかける。

しかし、

「……、敵を説得する言葉にしては、安すぎますね」

魔術師達はあくまでも冷静だった。

「逆に言えば、私達にはとりあえずあの子の命を助けてきた信頼と実績があります。何の実績も持たないあなたの『賭け』は信用でき

ません。それは無謀の一言に変換する事はできませんか？」

ダメだった。上条の全力を賭した賭けでも、魔術師達の心を揺らすことは叶わなかった。

もう一度、反論の言葉を頭の中に思い浮かべるが、何一つ出てこない。

ならば、もう認めるしかない。

「……、だよな。結局、分かりあう事なんざできねーんだな」

「ですね。同じモノを欲する者同士は味方になる、という公式があれば世界は洩れなく平和になっているでしょうから」

ましてや両者が望むモノは分け合う事のできないもの。となれば、残る選択肢は一つしかない。

「上等だ」

上条は拳を握る。それに合わせるかのように、神裂も腰の七天七刀の柄へと手を伸ばした。

「……、それで？」

そんな二人をよそに、ステイルは徐に呟く。

「その彼はそう言ってるけど、君はどうするんだい？」

その言葉の矛先は、上条の少し後ろに立つ氷室へと向けられたものの。

ステイルから突きつけられた言葉の槍に対し氷室は、降参するかのようにつつくりと両手を拳げ、

「この件に関して、私はノータッチよ」

「氷室　！？」

彼女の回答に、上条が思わず声を上げる。

「ふーん。てつきり君も彼と一緒に噛み付いてくると思っていたんだが……」

「無駄な努力はしない主義なの」

「だそうだよ」

彼女の方が分をわきまえている、とでも言いたげな表情でステイ

ルが上条を嘲笑う。

「ちよ、ちよつと待て、氷室！ おまえ、さっきあの医者にインデックスを助けるって……」

「ええ、言っただわ」

氷室は頷く。そして、

「だからこそ、手を出さないのよ」

そのまま上条を突き放す言葉を放った。

「な、」

てつきり心変わりしたのだと思っていた上条にとって、それは二度目の裏切りに他ならなかった。

「なんでだよ！」

「それより、」

そんな上条の訴えを無視して、氷室はスタイルを見やる。

「聞いてきて、くれたかしら？」

「『首輪』についてかい？ もう意味の無い事だと思っけど」

「それでもよ。あの子の記憶がどうなろうと、『首輪』がなくなるわけじゃないでしょ」

「なるほど、確かに」

もつともな指摘にスタイルは頷いた。

まるで長年付き合ってきた間柄のような気安い二人のやり取りに上条は憤りながらも、しかし内容が見えない話に首を傾げる。

「……『首輪』？」

「そうよ。忘れたの？ あの子の喉の奥にある魔術刻印の事よ」

「あ、」

完全に忘れていた。確かにそんなものが仕掛けられている、とあの医者が言っていたのを上条はようやく思い出した。

「けど、今はそんな話をしている場合じゃ」

「今、必要なのよ。……それで、アレは何だった？」

「残念ながら、アレは君の思っているような危険なものじゃない。

むしろ禁書目録インデックスを守るためのものだそうだ」

「具体的には？」

「『ヨハネのペン自動書記』

と言つても君には理解できないか。そつちの少

年は見たことがあるはずだが……、まあ、簡単に言えばあの子が一人じゃどうにもならない事態に陥った時、その体を無理矢理動かして問題を解決するための魔術、つてところかな」

ようは万が一の保険さ、というステイルの説明に、上条の脳裏にある光景が思い浮ぶ。

それはステイルと学生寮の廊下で対峙した際に見た、人形のような口調で喋るインデックスの姿。

インデックス自身が“冷たい機械”と呼び、恐れていた、あの魔導書図書館としての姿だ。

「ぎ、っけんな！ アレがインデックスを守るためのモンだと！

テメエらどこまでインデックスの事、貶めれば気が済むってんだ！」

「僕に言われてもね……、仕掛けたのは僕じゃないし。それにそのおかげで君は僕に“奇跡的に”勝てたんじゃないのかい？」

確かにそうだ。あのインデックスの助言がなければ、上条当麻はインケンテウス魔女狩りの王の対処法なんて思いつかず、無様に逃げ出すか、殺されていたに違いない。

「だからって……！」

「それに、今回は彼女のおかげで無事に病院で治療を受けられたみたいだけど、そうじゃなければ彼女はどうなってたかな？」

ステイルの問いに、今度こそ上条は反論の余地を失った。

あの時、たまたま、偶然、氷室が通りかからなければ上条は当初の予定通り、小萌先生の手を借りて回復魔術を使おうとしていたのだ。その時、インデックスの意識がなければきつと、『ヨハネのペン自動書記』が発動して、回復魔術について手ほどきをしていただろう。

つまり、そういう状況を想定し、それを打開するためにつけられたものなのだ。

「そついうわけさ。だから何の問題もない」

「……分かったわ。わざわざロンドンまで行って聞いてきてくれた

のね。ありがとう」

「ふん。君のためじゃない。僕自身が気になったから聞いてきただけだ」

「素直じゃないわね」

クスリ、と笑う氷室に、ステイルは忌々しげな表情を浮かべ顔を逸らした。

「それで、上条当麻。この状況でもまだ、足掻くと？」  
「当然だ！」

確かに周りは敵だらけだ。味方だと思っていた氷室も向こうに回った今、上条当麻に勝ち目は殆どないだろう。

だからと言って、それが“諦める”理由にはならない。

だからこそ、上条当麻は“諦められない”。

最後の最後、世界中の誰もが敵に回ったとしても、上条当麻はインデックスの味方であると、そう決めたのだ。

交渉は決裂。譲歩はない。

互いに譲る事が出来ないものがある以上、それを分かち合う事が出来ない以上、

残された選択肢はただ一つ。

「来いよ、魔術師」

上条は強く右手の拳を握る。

戦況は二対一。過去の戦績はステイルには苦戦、神裂にボロ負けしている。そんな相手と二対一の状況下で、しかも病み上がりのため体はまだボロボロな状態。万に一つの勝ち目がないのは誰の目にも明らかだ。

それでも上条は拳を握り、大地を強く踏みしめる。

万が一に勝ち目がないなら、億が一の勝ち目を拾えばいい。億が一でもだめなら兆が一。それでもだめなら京けいでも垓がいでも幾らでも構わない。ほんの僅かな、ゼロじゃない勝ち目をこの一戦でつかみ取ればいいだけの話だ。

『出来る』『出来ない』は関係ない。

『やる』か『やらない』か、それだけだ。

「テメエらがあくまでインデックスの『思い出』を殺すっていうなら」

それでもまだ『勝ち目がない』と言っているのであれば、

「まずはその幻想をぶっ壊す！」



### 第13章 とある選択と交渉決裂へブレイクダウン（後書き）

この一週間で何が!?

PV・ユニーク数が急増し、お気に入りも一気に1000を突破して200件に到達!?

驚きのあまりしばらく放心してしまいました。

ともあれ、皆様にご愛護いただいているようで、作者としてこの場を借りて感謝の意を。

と言いつつ、今回は短め。

次回はできる限り早く投稿できると思っているのでご容赦を。  
感想、誤字脱字報告待ってます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4098x/>

---

とある最強の抑止力

2011年11月2日02時15分発行